

---

# **悪魔の勇者**

鴉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔の勇者

### 【Zコード】

N6410M

### 【作者名】

鴉

### 【あらすじ】

全てを失い、悪魔と化した少年。力で全てを否定する血で血を洗う戦いの果てに、彼はハルケギニアへ召喚された。仲魔を従えて向かつた先で、彼は一体何を見るのか。

まだヘタクソな上に初投稿ですから、受け付けない方はご注意を。

## Prologue

世界も、人も、建物も、全てが死んだ。

そして、口ではなく力で言葉が語られる、そんな小さな世界が生まれた。

”力ある存在<sup>モ</sup>による樂園を<sup>バラダイス</sup>”

”完璧なる統制による世界<sup>システム</sup>を<sup>”</sup>

”個の自己完結による孤独<sup>自由</sup>を<sup>”</sup>

言葉ではなく、爪で牙で拳で武器で語られる理想。

(ふざけるな。)

(家族を、友を、平穏を。俺の全てを奪つておいて。)

一方的に強いられた犠牲。

訳も分からぬままに全てを奪われた理不尽。

それでも、生きた。

どうでもよかつたんだ。

振るつこと何の疑問も持たないほど、俺は空虚になっていた。

かつての自分であれば怖れの余り、自ら命を絶っていたであろう程の力。

そして、シャイタン 文字通り悪魔の力。

文字通り”スベテ”を否定し尽くして、残ったモノは憎しみと虚しが。

言葉で否定し、力で否定し。

それに加担した者も利用しようとした者も、全てを俺は許せなかつた。

俺から全てを奪い切った企て。

弦く言葉に答えてくれる友などいない。

笑顔を見せて安心させてくれる家族もいない。

いつ自分が死ぬか。

自分がこれからビニへ行くのか。

ビニへ行こうが何も変わりやしない。

もう、俺は人ならぬ悪魔シャイターンと化したのだから。

それでも僅かに残った人の心が、俺に一步踏み出させたのだろうか。

(タスケテ)

不意に浮かんだ鏡のようなゲートから聞こえてくる声。

俺を睨に掛けて喰らおうといつ悪魔の声だらうか。

そんな警戒心が頭をよぎる。

だが俺は、それでも一步、踏み出したんだ。

それが俺を変えたのかも知れないと、今になつて思う。

## 第一話 邂逅

s i d e タバサ

もちろん、不安はあった。

これから一生を共にする相手なのだ。  
変な使い魔が出てきたりしないだろ？

自分には、果たさねばならない目的がある。  
その力となってくれる使い魔だろうか。

そして自分は、偽名によつて召喚し、契約しようとしている。  
成功してくれるだろ？

不安の種には事欠かないが、表に出しても意味がない。  
ここまで来たら、やってみるしかないのだから。

… 我が名はタバサ… 五つの力を司るペンタゴン… 我が運命に従いし  
使い魔を召喚せよ…

声を張り上げることもなく、それでいて誰よりも力を込めて。祈るよ<sup>う</sup>に、呟くよ<sup>う</sup>に、青髪の少女は詠唱を行つた。

わあ、鬼が出るか蛇が出るか。

不意に、虚空を一筋の光が貫いた。

使い魔が現れるはずの場所に落ちた雷に、思わず息を飲む。舞い上がつた土煙の向こうから、バチバチという耳慣れない音が一、二度。

「……？」

土煙の向こうから現れた人の形をした何か。

刺青をした少年と見えなくもないが、何か人とは違うものを感じる。

亞人が何かだろうか。

よく分からぬが、強い。

周囲の状況を把握すべく辺りへ視線を配るその様子から、彼が相当場慣れしていることが読み取れた。

「人がいる…馬鹿な…マネカタとは明らかに違うが、かといって悪魔にも見えない…」

「おいアンタ、ここは一体どこだ？今までビリに居た？ビリやつて受胎を乗り切ったんだ！」

少年が何か話しかけてくるが、意味が分からぬ。

ハルケギニアの言葉ではないようだ。

よく分からぬが、怒氣や殺氣は感じない。

語氣は少々強めだが、敵意から来るものではないだろうと判断した。ともあれ、言葉が通じないので話にならない。

契約すれば話せるようになるかも知れないと思い至ったタバサは、わざわざ済ませてしまつことにし、彼へと歩み寄つた。

気がつけば、土煙に覆われていた。

警戒していたが、襲撃時に特有の粘りつくような殺氣や視線は感じない。

ただ、周りに多くの何かが居る。その気配だけはあった。

土煙で周りは見えないが、数えるのも馬鹿らしいほど修羅場を潜つてきた自分なら、

気配だけでその程度は理解できるのだ。

そんなことも分からぬようでは確実に死んでいる。自分はそんな場所にいたのだから。

土煙は、そよ風で吹き散らされていく。

そこで視界に入ったのは、見知らぬ草原であった。

「……」

澄み切った青空。

風に吹かれて波打つ草原。

ボルテクス界ではありえない光景である。

上を見ればカグツチと、その更に向こうには丸い世界の”反対側”。  
周りを見れば緩やかに反り返った荒野と砂漠、そして点在する旧世界の名残が少々。

自分がいたのはそんな世界なのだ。

何が何だか分からぬ。

ふと周りを見れば、マントとローブ姿の少年少女たち。  
おそらく同じ年くらいだろうか。

近くに立っているのは透き通るような青い髪をした少女であった。

「人がいる…馬鹿な…マネカタとは明らかに違うが、かといって悪魔にも見えない…。

おいやンタ、ここは一体どこだ? 今までどこにいた? どうやって受胎を乗り切ったんだ!」

もう余つことは無いだろうと思つていた「二ングン」。

困惑と驚愕と疑問と僅かな喜悦をミックスしたような感情を、そのまま近くの少女にぶつけた。

…なんの反応もない。

言葉が通じないのか？見れば、日本人ではあり得ないような髪の色をしている。

極上の大理石を彫り抜いたように美しく白い肌をした少女であるが、感情を押し殺しているかのようなその青い目と相まってか、ひどく無機的な印象であった。

何を思ったか、少女は此方へ歩み寄ってくる。

敵意を感じる所作ではなかつたが、それでも思わず体を強張らせた。

「お、おいアンタ…何を…むぐつ」

…頭が真っ白になつた。

この状況は一体何なのだろう。

気づいたらボルテクス界とは思えない場所に立つていて。

散々探して諦めたはずの人間と出会つて。

考えてみれば、自己紹介すらしていない。

なのに、こきなり「キス」。

そんな甘酸っぱい展開を期待できるほどの世界に生きていなかつたが、

人間だった頃の記憶も感情もまだある。

この行為がどうこうものかは知っている。

一体何なんだこれは。

頭の中を困惑の一文字が駆け巡っていたが、それを止めたのは激痛であった。

「ツ…ぐウツ！」

左右の手の甲に切り裂かれたかのような痛みと灼熱感が走る。何年も、血で血を洗うような闘争を繰り返してきた。

死にかけたことなど数え切れない。

気が狂うほどに痛みも何度も経験した。

打撲、裂傷、擦過傷、骨折、火傷、凍傷、エトセトラ。

ありとあらゆる怪我の痛みを味わった末に、痛覚の鈍りを感じるまでに至つた。

だが、今両手に走る痛みはそのどれとも違う。

回復魔法を使おうにも、痛みが鋭すぎて精神集中ができない。体が動かない。

同時に、脳に何か刷り込まれているような感覚もあった。

「 - - - - - 」

目の前の少女が何か言っているが、やはり分からぬ。

(「…状況が分からぬ今、意識を失つては…」)

必死の抵抗も虚しく、彼の意識は闇へと沈んだ。

side out

side タバサ

この使い魔なら、役に立たない事はないだろう。

そんなことを考えつつ、淡々とコントラクト・サーヴァントを済ませた。

初めてのキスだが、そんなものを惜しむような感情はもつ無いのだ。彼が、呻き声とも悲鳴ともつかない声を上げる。

「大丈夫、ルーンが刻まれているだけ」

説明するが、聞いていいようだ。

痛みからか顔を歪めているが、そんなに痛いものなのだろうか。  
使い魔になつたことが無いから分からないが、ともあれ痛みはすぐ治まるはず。

：

：

：

おかしい。彼の様子からして、痛みがまだ続いているようだ。  
もう十数秒は経つた。とっくに終わってもいいはずなのだが……

不意に、彼の体が倒れこんだ。

「……ッ！？ 大丈夫？」

コントラクト・サーヴァントを行つて使い魔が倒れるなど聞いたことがない。

僅かな驚きの色を瞳に湛えて、彼女は少年へ歩み寄つた。  
軽く搖さぶつてみるが、反応はない。  
死んではないようだが……

ふと、彼の右手に刻まれたルーン文字が目に入る。

「…イー…ヴァルディ…？」

(まさか、彼が”イーヴァルディの勇者”なの?)

確かにそう書いてある。

思わず呆然としてしまった。

ずっと憧れていた存在。

私を守り、導いてくれる勇者。

私の勇者。私だけの…。

そんなものは物語の中にしかいないと分かつていながらも、一縷の望みを捨てられなかつた。

私は、僕倅に巡り合つたのかも知れない。

「ミス・タバサ…彼は一体どうしたのかね!？」

「ゴルベール先生の声も耳に入らず、私は彼を見つめた。  
驚きと、喜びを込めた目で。

side out

## 第一話 契約

side 人修羅

「……」は、俺は一体……？」

うつすらと意識が戻り、目を開ける。  
見知らぬ天井が見えた。

あの後、一体どうなったのだろう。

どうこう経緯があつて、自分はここに寝ているのか。

背中に感じる、清潔なシーツの感触。

悪魔化してからはベッドに寝たことなど無かった。  
人間であつた頃は毎日経験していたこの感覚を懐かしく思いつつ、  
彼は身を起こした。

いくつかベッドが並んでいるが、自分以外は誰もいない。  
戸棚には薬品の瓶らしきものがある。

(まるで学校の保健室そのものだな……)

実際その通りなのだが、それを彼はまだ知らない。

(さて……これからどうしたものかな)

先ほど、青い髪の少女にキスされて激痛を感じたことまでは覚えて

いる。

見れば、両手の甲に見慣れない模様がある。

右手と左手に、それぞれ何か文字らしきものが刻まれている。

右手のそれは読めなかつたが、左手の文字は読めた。

”Satan”  
アカマ

思わず苦笑してしまう。

悪魔の体となり、悪魔の力を振るつて生きることを余儀なくされた俺だ。

戦いの果てに漸く人と出会えた今更になつて「悪魔」<sup>シャイтан</sup>の烙印を刻まれようとは。

運命の女神は、どうやらみほど俺を嫌つているようだ。

以前オベリスクで死闘を演じたモイラライ三姉妹の顔が浮かぶ。  
いずれまた出会いことがあつたら、あの綺麗な顔に至高の魔弾の一、  
二発も見舞つてやるとしようか。

ともあれ、先ほど起こつたことは、どうやら夢ではないらしい。  
であれば、いずれ人間がここへ来るはずだ。

自分がここで寝ていた以上は彼らに運ばれたわけで、  
こんなところで監視もつけずに寝かせている以上、おそらく害意はないのだろう。

さつきは話が通じなかつたが、とりあえず情報を手に入れる必要がある。

ただ、それには言葉の壁にぶち当たることになりそうだ。

(さすがに人間相手にジャイヴトークの効果を期待しても、な…)

悪魔には人の言葉を喋れない者がいる。

ジャイヴトークという技術スキルは、そいつた存在と意思疎通を図るためのものなのだが、

人間同士だと効果はないようだ。

先ほど青髪の少女と話したが、彼女の言葉は理解できなかつたし、こちらの言葉も彼女に通じていなかつたようだから。

ボディランゲージで会話などどれくらいぶりだらう。全く厄介なことになつた。

そんなコトを考えつつ、彼は人が来るのを待つた。

s i d e   o u t

s i d e タバサ

倒れた彼を医務室へ運んだ後、私はコルベール先生の話を聞いていた。

曰く、彼の力は強すぎるらしい。

治療に当たつた水系統の先生の話では、別段悪い所は無かつたそうだ。

おそらく、ローンを刻まれたショックで気を失つてゐるだけで、数時間もしないうちに目覚めるだろうと。

「コントラクト・サーヴァントが成功した以上、ミス・タバサや他の者に危害を加えることは無いでしょうが…彼の魔力は強すぎます。できるだけ注意しなさい」

彼の言葉に頷き、私は医務室へと向かいながら考えていた。

あの使い魔が強いというなら、その右手に刻まれたルーンも頷ける。ただ、その左手にあるルーンは読めなかつた。

ルーン文字とは明らかに違うし、ハルケギニアで使われている文字とも違つていたのだ。

左右両手にルーンが刻まれるという現象は聞いたこともないが、そんなことはどうでもいい。

（田を覚ましているだらうか、”イーヴアルディの勇者”様：）

珍しく沸き立つてゐる気持ちを抑えつつ、彼女は足を早めた。

s.i.d.e out

s.i.d.e 人修羅

どのくらい時間が経つだらうか。  
ようやく、部屋に人が入つて來た。

「…君は、さつきの…」

先ほどキスされた青髪の少女である。

「…大丈夫?」

「…ああ問題ない…つい、言葉が通じる…?」

「契約したから」

「よく分からない。

分からぬいが、とりあえず契約とやらのおかげで言葉は通じるようになつたらしい。

まあ、懸念が一つ消えてくれたのだから不満はない。

「…まあいい。俺の名はシン、間雜まなざシンといふ。君の名は?」

「タバサ」

「いくつか聞きたい」とあるんだが、構わないかタバサ?」

(「クッ)

「「「」はまど」」で、俺は何故「「」」しているんだうづか」

「私が召喚した。」」はトリステイン魔法学院」

「随分と口数の少ない少女のようだが、害意は無むれうだし、質問には答えてくれるようだ。

しかし、トリステイン魔法学院…? 聞いたことの無い名前だ。ボルテクス界はほぼ全て回つたが、そのような名の場所は無かつた。受胎前の世界でもそんな地名は聞いたことがない。

それに…召喚？俺がするならまだしも、俺が召喚された側か。

俺はこの少女とあの場で初めて会ったから、当然仲魔の契約など交わしていない。

悪魔召喚の儀式で呼ぶ方法もあるようだが、あの場に召喚の儀式を行つた形跡は無かつた。

まだ情報が足りないな。

「続けて質問するが…」

そこへ、また一人来訪者があつた。

「おや、目を覚ましたか、ミスター。私はここトリストイン魔法学院で教鞭を執つておりますコルベールと申します」

「初めまして、コルベールさん。俺はシンといいます…いきなりで申し訳ないが、いくつか聞きたいことが…」

口数の少ないタバサよりは、分かりやすく説明してもらえそうだ。そんなことを考えつつ、コルベール相手に情報収集に禿んだ…もとい、励んだ。

「ふむ…にわかには信じられませんが…君はやはり別の世界から来たようだ」

「地名にしても、魔法が当然のように存在しているにしても、とてもじゃないが同じ世界とは思えませんからね……」

ざつと数十分ほど話しただらうか。

話せば話すほど疑問が増えしていくが、とりあえず分かつた事は…

ここが異世界であるらしい、ボルテクス界でも受胎前の地球でもないらしいこと。

ここハルケギニアでは魔法の存在は常識であり、貴族がそれを行使すること。

ここはトリステイン王国のトリステイン魔法学院という魔法使いの学校であること。

自分がタバサの使い魔として召喚されたこと。

帰る方法は無い（別段帰りたくもないが）こと。

何だこのファンタジーは…。

本当にローブを着てマントをつけて杖を振つてこむじめの人間に思わず苦笑してしまいそうになつたが、まあ異世界といつなりこんなものなのだろう。場所が違えば常識だつて違つものだから。

（何とも面白い展開になつたもんだな）

これからどうなことが待つてゐるのか、興味をそそられずには居られない。

「…使い魔に、なつてくれる?」

どこか祈るようなタバサの声。

もちろん、断るつもりは無い。また人に出会えたのだから。

「俺は…魔人シン…今後ともよろしく…」

side out

## 第一話 契約（後書き）

人修羅の名は小説版から頂きました。

間雑の読みつてこれで合ってるのかな…もし違つてたら「指摘頂けると嬉しいです。

「追記」改行などを変更しました。少しほ読みやすくなつたでしょうか。

「追記」の「→ Saturday」を「Saturday」に修正。意味が全然違うことに今更気がつきました。

## 第三話 独白

side シン

「なるほどな。感覚の共有、秘薬の材料の採取、主人の護衛か…」

「感覚の共有はできていなし。秘薬も今は必要ない。護衛してくれればいい」

「わかった」

タバサから使い魔の役割や仕事について説明してもらっていたのが…

とりあえず、戦うことが俺の本分になりそうだ。

ひたすら戦い続けてきた俺だから、今更誰かと戦うことを拒否したりはしない。

ただ、敵を倒すためでなく主を守るための戦いというのは初めてだつた。

今まででは仲魔に守られながら敵を殲滅してきたから。

「さて…学院の構造くらいは把握しておいた方がいいかな。  
少し出でくるが、構わないか？」

(じへい)

時刻は既に夕方。暗くなつては分かりづらくなるだろうし、  
今のうちに大まかなことは把握しておこうと思つ。

「…壁や柱がえらく分厚く頑丈に作つてあるな。

貴族の子女を預かる学院だからか？

むしろ砦か城と言われた方が納得できそくなくらいだな」

まずは外に出て、外壁に沿つてぐるりと回つてみる。

外壁も分厚く、所々に見張り用の望楼がある。

ただ、ほとんどが無人だったからあまり意味はなさそうだ。門の側の守衛室には常時人が詰めているようだが、それだけである。

「…実際それで充分なのかもな」

まだ見習いとはいえ、この世界で絶対的な力を持つていてるメイジが  
ン百人と集まつていてるのだ。

まあ好き好んでこんな場所を襲おうといつ者もいるまいが…警戒して  
ておくに越した事はないか。

「あら、貴方…確かタバサの使い魔よね。もつ具合はいいのかしら  
？」

「ああ、もう大丈夫だが…君は？」

声をかけてきたのは燃えるような赤毛が印象的な少女だった。

抜群のプロポーションが大胆に開かれた胸元からチラチラと見え隠  
れしている。

「私はタバサの親友。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・  
アンハルツ・ツェルプストー。

”微熱”のキュルケよ、よろしく」

「俺はシン。間雑シンだ。よろしく、キュルケ」

「ええ。…で、こんなとこりで何をしてるの?..」

「ああ…ちょっとな…」

少しキュルケと話したが、タバサの親友とは思えないほど饒舌かつ快活な人物であった。

無口なタバサと活発なキュルケ、考えてみれば案外いいコンビなかもしれない…。

「なるほど、学院の構造をね…もう充分見て回ったの?..」

「ああ、いい加減暗くなつてきたし切り上げてタバサの所へ戻ろうと思つ」

「じゃあ私も行くわ

キュルケと二人連れ立つて女子寮へと入る。

夕食にはもう少し時間があるから、皆部屋の中にいるのだろうか。部屋同士を行き来して歓談している声が廊下に漏れている。

「そこが私の部屋よ」

キュルケが指差した隣のドアから、人が出てきた。黒髪の少年である。何だか少し落ち込んだ様子だ。

「あら、貴方つて確かルイズの…」

「…え?…ああ、俺はルイズに召喚された平賀才人ですが…」

「…平賀…！？お前、まさか日本人か？」

「…え、さうだけど、何でそれを…？」

「やはり…」

「ちょっとちよつと、一体何の話よ？」

「すまん…後で説明するから、ちよつと彼と話をさせてくれ

「むう…分かったわよ」

「で、サイト君と言ったな。君は…」

彼から色々話を聞いてみる。

が、訳の分からないことに、彼は東京住まいであつたのに受胎など知らないと言つ。

受胎の予兆でもあつたヨヨギ公園での暴動事件も知らないというのだ。

単にニュースを見ていなかつたという可能性もあるが、死者すら出たあの暴動はかなり大きく報道されていたから、まさか知らないといつこともあるまいが…。

細かい地名まである程度ちゃんと伝わった。

にも関わらず受胎に関わる件だけは全く通じなかつた。

彼と自分は全くの同郷者という訳でもないのかもしれない。よく分からぬが、考へても分からぬ以上は考へるだけ無駄だといつことだらう。

（彼は俺の知る日本とは似て非なる場所から来たのだろうか…平行世界とか）

ただの人間に過ぎなかつたはずの俺が東京受胎などという訳の分からん事件に巻き込まれた拳銃、御伽噺の中にしか存在しないような人外共と殺しあつてきたのだ。

空想としか思えないことを、それを理由に否定することは俺にはもうできなかつた。

あり得ないことなど何もない。全ては大なり小なり実在する可能性を孕んでいるのだ。

俺はボルテクス界でそれを嫌という程学んできたのだ。

「…シン？どうしたんだ？」

「何か顔色悪いわよ？大丈夫？」

キユルケとサイトが俺の顔を覗き込んでいる。

「あ、ああ…何でもない。ちょっと考え事をな。さて、俺はそろそろ行くよ」

とりあえず誤魔化しておいて、さつと部屋へ戻るとする。

「分かつた。またな、シン」

笑顔で手を振つてくれるサイト。強さも聰明さも感じないが、気のいい男のようだ。

俺が悪魔と化したこと、体の紋様については適当に誤魔化しておいたから、深くは追求されなかつた。

多分、察して気を利かせてくれたのだろう。

正直に話すには彼のことをまだ何も知らないし、無駄に警戒される結果になつてもつまらない。

などと考えて『うちこ』、タバサの部屋まで来ていた。

「タバサ、俺だ。ただいま」

「おかえり」

「お邪魔するわよ、タバサ」

笑顔でタバサにじやれつくキュルケ。

タバサも別段嫌がつている様子はない。  
まあ話の邪魔をするのも悪いだろうと、部屋の隅に腰を下ろして目  
を閉じる。

色々あつて少し疲れた。体ではなく精神的に。

(…明日は、何があるんだろ? …)

そう考へながら意識が闇に沈んでいく感覚に身を任せた。

side out

side タバサ

「さて… そろそろ行こうかしら。じゃ、またねタバサ!」

退室する親友を目線だけで送り出して、私はまた本に視線を落とす。ちらりと使い魔に目を向けると、部屋の隅に座つて眠っているようだつた。

「…獣のような眠り方をしている。

体も頭も休まつていいが、感覚だけは起きている。

何があつてもすぐさま覚醒して行動に移れるような眠り方をするのが分かる。

常在戦場の境地。口で言つるのは容易いがここまで徹底して実行できる者は少ない。

北花壇騎士として薄汚い戦いを余儀なくされてきた自分でも、眠つている間は無防備になつてしまつ。

いつ襲撃があるか分からぬときなどは、眠らずに警戒するしかないのだ。

（彼は一体どんな生活をしてきたのだろう…）

彼の強さにも興味がある。気まぐれにティクトマジックをかけてみたのだが…

絶句した。

いや、元々口数が少ないから常時絶句しているようなものなのだが、そんな冗談を言つている場合ではない。

強すぎるのだ、彼の魔力が。

スクウェアメイジであつても比べ物にならない。

しかも、彼自身の魔力とは別に、巨大な魔力の塊をいくつも内包しているのが分かる。

「…ん…タバサ?…どうした?」

ディテクトマジックで探査されていることにか、あるいは彼の魔力に驚いた自分の気配か。

どちらに気づいたにせよ、彼は目を覚ました。  
やはり、彼は自分とは次元が違う。

「…シン、貴方は一体何者？貴方は強すぎる」

「…俺は、”元”人間だ…」

それから彼は、色々話してくれた。

「ジュタイ」とかいう世界を創り変えようとする企みに巻き込まれたこと。

友人も家族も失い、人から悪魔へと変えられたこと。

生き残った数少ない顔見知りも皆、あるいは力に、あるいは絶望に魅入られて心まで悪魔と化してしまったこと。

そして、たった”一人”で戦い抜いてきたこと。

…似ている、と、そう思った。

「この左手を見る…契約で刻まれたルーンだが、何て書いてあるか分かるか？」

受胎前の世界で使われていた文字だ。『シャイタノ悪魔』、つまりアクマ。人の心も記憶も随分と薄れてしまった。消えたわけではないけどな。

…俺は、人間であることを辞めさせられた人間。  
人間にも悪魔にもなり切れない半端者、つて訳さ

自嘲するように笑いながら話す彼を見て、何故か胸が痛んだ。

「…貴方も、一人で戦っていたの」

「”も”、ということはやはり君もか、タバサ。

どこか俺と近しいものを感じていたが。事情を聞かせてくれるか  
?」

(じべつ)

彼になら全てを話してもいい、と思った。

人にも悪魔にもなり切れない彼。

シャルロットにもタバサにもなり切れない私。

そして、互いに一人で戦い抜いてきた二人。

この奇妙な共通が、共感へと変わったのだろうか。

それに彼は、震えていた。

忌まわしい過去をすら笑みを浮かべて独白しながら、彼の手が僅かに震えていることを知っていたのだ。

怖かったのだろう、自分を曝け出して拒絶されることが。

その気持ちは、良く分かる。

自分も、誰にも曝け出すことが出来なかつたから。

それでも全てを明かしてくれた彼に、自分も応えなければと思つたのだ。

独白は、続く。

side out

side 人修羅

不意に、独白が止む。一通り話しあったのだろうか。

「壮絶な過去だった。

父を殺され、母の心を壊され、何も分からぬまま殺し合いの世界へ放り込まれる。

彼女が強いことは感じ取つていたが、それらは全て訓練ではなく実戦で磨かれたもの。

自分とも通じるような境遇だけに、それがどれほど辛いことか、苦しいことかは痛いほど理解できた。

しかも、それは今も続いているというのだ。

「力になりたい。

真摯に、そう思えた。

両親を奪われた恨みと、一方で愛する母を救いたいという心。

その一律背反から、感情を表に出さない彼女の奥底に残つた「人らしい心」を感じ取らずにはいられなかつたのだ。

人修羅などと呼ばれた俺だが、彼女に俺と同じ道を歩ませるわけにはいかない。

彼女は、人間。悪魔や修羅の道は似合わない。

「…イーヴァルディの、勇者…」

不意に、彼女が口を開く。

「貴方の右手に刻まれたルーンは『イーヴァルディ』。悪のドラゴンを退治した勇者の名」

「俺にはどうまでも一律背反が付きまとひりじこ。」  
唖然として、直後に笑いそうになってしまった。

「悪魔」と「勇者」。

その二つの刻印が、俺の中に同居している。  
力のみに生きる修羅と、人々の希望の象徴たる勇者。  
これが何を意味しているのか、俺にはよくわからない。

「お前はどこまでも半端な存在なのだ」と突きつけられた悪意か。

「悪魔の力を以つて勇者の所業を為せ」という意思か。

「勇者の心を持つ悪魔として生きよ」という訓示か。

そのどれもあるのかも知れないし、そのどれでもないのかも知れない。

ただ、おそらく俺は彼女にとつての希望たりうるのだから、ということは分かった。

「イーヴァルディの勇者」

そう口にした彼女の言葉には、万感の想いが込められていたからだ。

ならば、俺は生きよう。

敵にとつての「悪魔」として、彼女にとつての「勇者」として。

そう告げた俺に見せてくれた彼女の笑顔は、ハッとするほど美しかった。

夜は、深々と更けてゆく

side out

## 第三話 独白（後書き）

酷く厨二臭い人修羅になつてしましました。  
でもまあ、こういう人修羅が一人くらい居てもいいでしょう（笑）

## 第四話 仲間（前書き）

最終話までのプロットは何とか立てました。面白い話の筋を作るのがどうも苦手ですが、修正もじつは何とか頑張っていきます。

## 第四話 仲間

窓から月明かりが差し込んでいる。

部屋の隅で座り込んで目を閉じている少年。

体に入った刺青のような模様が月光に照らされ、ぼんやりと光っているのが分かる。

side 人修羅

不意に目を開けた俺は、ベッドで横になっている主へ目を向ける。別段うなされるでもなく健康的な寝息を立てている少女に安心感を覚えた。

あれだけの過去を話してくれたのだ。

思い出すのも辛かつたろうに、夢の中では辛さを忘れていられるのだろうか。

(やうでないよりはよほどいいな)

自分がボルテクス界へ入った直後は、気が狂いそうなほど毎晩うなされたものだ。

多分、この少女も最初はそうだったのだろう。

もしかしたら、今日は話すだけ話してむしろ楽になったのかもしれない。

さて、少し確かめたいことがある。

学院の外までひつそり足を伸ばすとするか。

軽く深呼吸して目を閉じ、獣のような気合と共に腕を振りぬく。

「ハツ！」

数条の光と共に現れたのは三体の異形。

シンが召喚された時と同様、バチバチと小さな音が一度二度響く。

「御主人様、如何なさいました？このような夜更けに。戦ではない  
ようですが…」

「……お前を呼ぶと夜中とは思えなくなるな……」

あまり目立ちたくない、光を抑えてくれ」

「御意。ですが、私は太陽の象徴。限度はありますよ」

「分かつてる、できるだけで構わない」

悪魔たちのリーダー格と思しき白い衣の女がシンと幾度か言葉を交わしている。

ハルケギニアではお目にかかるない白い上質な衣を纏い、黒く美しい髪をこれまたハルケギニアでは見ない形に結っている。たおやかな雰囲気の中に芯の強さを感じる美女であるが、一番田立

つのは彼女が発する光だ。

簡単に言えば「後光」が差した状態。

彼女は「魔神アマテラス」。シンやサイトの故郷たる日本において、皇室の守護神とされている日本神道の主神である。**天照大神**と言えば、日本人なら一度は耳にしたことがあるう。

**高天原**で乱暴狼藉を働いた弟、須佐之男命の所業に怒つて**天岩屋戸**に籠つてしまつたために世界が暗くなつてしまつた、というエピソードは余りにも有名である。

ボルテクス界において太陽に相当するカグツチの揺らぎを利用したイケニエ合体で彼女は生まれた。誕生は数年前、しかし「神代の時代から今まで生きてきたという歴史」と共に誕生した、本物の「神」である。

「…お前たちも俺の中から見ていたと思うが、俺は今あの青い髪の少女、タバサを主とし、使い魔として仕えている」

「見てたけどよ…マスターを従える程の力があんのかい、あの餓鬼に? とてもそつは見えねえけどなあ」

脇に落ちない表情で呟いたのは**幻魔**クー・フーリン。

「**クランの猛犬**」という名を持つ、ケルト神話における半神半人の英雄。

影の国の女王たる女神スカアハから武術の手ほどきを受け、魔槍ゲイ・ボルグの所有者となつたことでも有名な武人である。

白を基調として黒い筋状の模様が入つた服を着て、額には小ぶりなサークレットを鉢金のように身につけて兜代わりとしている。

肩に乗せるようにして担いでいる豪槍の刃が、月光を照り返して鈍く光つた。

「お前たち悪魔は力に従う。俺たち人間は力にも従うが、心にも従

うんだよ

「心ねえ…つーかマスターも悪魔だろーがよ、フフッ」

「人の体は失くしても、人の心まで失くした覚えは無いさ…。  
今後お前たちを召喚して彼女に同行させることもあるだろう。  
その時は彼女に従い、守つてやつて欲しい」

「…我等ガ主ハウヌ一人ダ」

男とも女ともつかぬ無機的な声で答えたのは、龍神セイリュウである。

蛇のように長い体躯は目が覚めるような青い鱗に覆われている。  
四本の足を持ち、緑色の見事なたてがみ、刃物のように鋭く枝分かれした一本の角が特徴の「龍」そのもの。中国や日本で語られる伝承どおりの姿である。

伝説上では「四神」しじんや「四聖獸」しせいじゅうの一柱として数えられる。東西南北それぞれを守る四柱の神の中で、東方の守護を司る龍神。

白虎、青龍、朱雀、玄武といえば聞き覚えはあるだろう。

「お一方とも、そう仰らずに…良いではありませんか、御主人様が主人と認めた方なのですから。

それも御主人様の御意ですし、ね?」

「…承知」

「ハア、姐さんにや敵わねえな…しじうがねえ。  
ま、長い人生、ただの人間に力貸すことの一度や一度あつてもいいか。

三度は多すぎだがなあ、クククツ」

「悪魔が人生語るところ見れるとはね…長生きはするもんだ、全く。…ともあれ、ありがとな、お前ら。頼りにしてるぜ?」

他の仲魔を宥めて説得するアマテラス、愚痴や冗談を言いながら結局この状況を楽しんでいるクー・フーリン、寡黙ながら従つてくれるセイリュウ。

皆、共にボルテクス界を戦い抜いてきた戦友達である。

三人（人という単位が正しいかは分からぬが）とも、ハルケギニアでは単独で一軍を殲滅できるほどの力を持っている。それを全て従える人修羅の力は、当然彼らを上回る。

それがいかほどのものかは、推して知るべし、といったところか。

「…で、いい加減出てきたらどうよ？覗き見は趣味悪いぜえ？」

「…？」

side out

side タバサ

パタン、と静かに閉まるドアの音に、不意に意識を呼び戻された。

「…シン？」

軽く首を持ち上げて眼鏡をかけて部屋を見渡す。

月明かりに青白く照らされている室内に、使い魔の姿は無かつた。壁にもたれて座るように眠っていたはずだが……。

耳を澄ますと、「コツ コツ」と部屋から遠ざかっていく微かな足音が聞こえた。

(こんな夜中に、どうしたの……?)

力になると黙つてくれた私の勇者、イーヴアルディ。

こんな夜中に部屋を抜け出すということは、何か隠し事でもあるのだろうか。

「…」

悪いと思いつつ興味が抑えられなくなる。

これほど人に興味を抱いたのはいつ以来か、もう覚えていない。もしかしたら、初めてかもしない。

経験が無いほど新鮮な感情に軽く戸惑いながらも、手早く着替えて杖を取り、使い魔の後を追つた。

……  
……  
……  
……

(ビニへ行ったのだね。)

彼が学院の敷地を出て、すぐ側の森へ入っていくのは見た。  
こちらには気づいていない様子で、すたすたと無造作に足を進めていたのだが…

森に入つてから、見失つてしまつた。

辺りを見回しながら、気配を探り進んでいく。

「…？」

微かに何かが弾けるような音がして、その後何かがキラリと光つた。光はすぐに収まつたが、まだぼんやりと光つているのが見える。

「…シン…？」

気配を殺しながら、近寄つた。

⋮

⋮

⋮

少し距離を取り、木陰に身を隠しながら耳を澄ます。

風のトライアングルであるタバサは、実戦経験も相まって耳はいいのだ。

そつと様子を伺うと、三体の異形が使い魔と話している。

白い服の光る女、槍を携えた男、角のある青い蛇。

女と男は一見人間に見えるが、普通人間は光らない。

女は浮いているが、杖を持つてないからレビテーションを使っているわけでもないはずだ。

男は一見人間に見えるが、軽薄そうなその所作に隙らしい隙などなかつた。

あの蛇も浮いているから幻獣かと思ったが、あんな幻獣は書物の中ですら見たことが無い。

(あれは一体…?)

何が何だかよく分からぬが、風に乗つて僅かに聞こえてくる話し声から、三体がシンを御主人様とかマスターとか呼んでいるのが聞き取れた。

剣呑な雰囲気は全く無く、むしろ友人同士が歓談しているような雰囲気ですらある。

多分、敵ではないのだろう。

：

「…で、いい加減出てきたりどうよ？覗き見は趣味悪いぜえ？」

「…ッ！？」

あっさり見つかった。

気配の消し方には多少自信があつたし、気づかれていないと思つていたのだけど。

(…スッ)

仕方なく立ち上がり、使い魔へと歩み寄る。

「…タバサ…」

「…いつから気づいていたの?」

私に声をかけた男に問いかける。

「マスターに召喚された直後に気づいたぞ、森ん中に人が潜んでるつてな。

「ヨイツはべらぼーに強いクセして気配探るのは下手クソだから気づかねえのも無理はねえ。<sup>ヘッタ</sup>

ま、それでもそんじょそいの悪魔じや届かねえほど鋭いんだが

…。

要するに今日の俺はビンビンだつたってだけよ。

嬢ちゃんの気配の消し方は完璧だったぞ、落ち込むいたあねえぜ  
?フフ…」

「…悪かったな、下手クソで…で、タバサ、何でここに…?」

軽口を叩いて笑いながら主人をこき下ろす男を軽く睨むように一警  
しながら、シンは私に問いつ。

「…貴方が部屋を出て行く気配がした。気になつたからついてきた。  
ごめん」

「いや、いいや。」しきりにそ隠してて悪かった。近いうち紹介する  
つもりだつたんだが…いい機会かな。

「…つらが俺の”仲魔”、ボルテクス界と一緒に戦い抜いた戦友  
達さ」

「初めまして、タバサ様。わたくし私は魔神アマテラス。御主人様と共に在るものです。

貴方のことは御主人様の中から見ておりました。信頼に足るお方とお見受け致します。

御主人様共々、宜しくお願ひ致しますね」

「俺あクー・フーリン。槍一本で時代を駆け抜ける生粋の伊達男よ！…なんつってな。

マスターがアンタを主と呼ぶんなら、俺が嬢ちゃんを守つてやらあ。

ま、宜しく頼むぜえ？」

「…我ガ名ハセイリュウ」

日々に自己紹介するシンの仲間たち。

微笑みながら丁寧に挨拶するアマテラス。

冗談を挟んで呵々と大笑するクー・フーリン。

寡黙で何を考えているかよく分からぬセイリュウ。

三人（？）の性格が何となく掴めた。

「ハルケギニアでもボルテクス界と同じくこいつらを召喚できるか、試してなかつたんだな…。

とりあえず森に入つて試してみたわけだ。他の人間に見られても面倒になりそうだったし。

ともあれ、これから何かあつたらこいつらにも助けてもらう」とになるだろう。

よろしくしてやつてくれ、タバサ」

シンが自分を任せてもいいと思うほど信頼している仲間なら、何の

問題もない。

そう思えるくらい、私はこの使い魔を信じてるから。  
彼らを仲間と呼べる日が、また彼らが私を仲間と呼んでくれる日が  
来るのは遠くない、そう思えた。

「…タバサ。よろしく」

s i d e o u t

## 第四話 仲間（後書き）

アマテラスはメガテン<sup>3</sup>では男性口調の悪魔として登場しますが、日本神話では女神とされていますので、そつちに沿った設定を採用しています。

クー・フーリングが中々いい味出して書いて楽しかった。  
お気づきと思いますが、セイリュウにはシルフィードの代わりに足になつてもらおうと企んでます。

## 第五話 教業（前書き）

今回も平凡な日常の一コマですねん、いにサブタイが思い浮かびました。

二字熟語好きなんですが、変に縛るんじやなかつたな。

## 第五話 授業

side 人修羅

主人の後に続いて教室へと踏み入る。

雑談していた生徒達の視線が集まるのを感じた。  
多分、見たこともない亞人ないし蛮族に対する好奇の視線。  
あるいは、風のトライアングルという実力派メイジであるタバサが  
そんな亞人。蛮族を使い魔にしたことへの嘲笑の視線だろうか。

もちろん、そんなものを気にする俺やタバサではない。

二つ続いて空いている席を見つけてタバサが座る。  
わざわざ奥へ座つたことを見ると、俺を横に座らせようというのか。

「俺はここに座つてもいいものなののか?メイジの席だらうこ

「構わない」

タバサがそういうならいいか。

深く気にしないことにして席につく。

教室の構造は高校のそれではなく、大学の講堂か何かのように見え  
た。

前方真ん中の教壇を中心に扇状に教室が広がっており、同心円状に  
中心へ向かう形で席が並んでいる。

後ろの席でもよく見えるよう、後ろへ行くほど席が高い。

俺は高校生だったから大学の講堂へ行ったことはないが、進路指導

のためなどで大学のパンフレットはいくつか読んでいた。

大学というのはこんな感じなのだろうか、と、もう経験する機会はないであろう大学生活をふと思い浮かべた。

「まあ皆さん、授業を始めますよ。静肅に」

中年女性の教師らしきメイジが入つてくる。

教壇に立つた彼女は、教室をぐるりと見渡す。

「皆さん、春の使い魔召喚は無事に成功したようですね。  
このシユグルーズ、毎年生徒達の使い魔を見るのを楽しみにして  
いるのですよ」

微笑みを浮かべながら語る彼女の言葉には、生徒に対する愛情や慈  
しみの感情が見て取れた。

貴族特有の選民思想や高すぎる誇りから来る嫌味さは感じられない。  
彼女自身にそういう性質が無いのか、あるいは教職員としての立場  
を弁えて人格者たろうと努めているのか。

いずれにせよ、良い教師ではあるのだろう。

「…おや、ミス・ヴァリエールにミス・タバサは随分と変わった使  
い魔を召喚したようですね」

彼女の言葉に答えるように、野次や嘲笑の声が生徒達から飛んだ。

：前言撤回、この教師はダメだな。

確かに、彼女の言葉それ自体は事実である。別段悪意も感じられな  
い。

だが、その言葉は特定の生徒に対する侮蔑の切欠となつてゐる種類の  
ものだ。

生徒達の規範となるべき教師が、率先して特定の生徒への侮蔑の先

駆けとなつた。

意図したものでなくとも、これはいけない。

見れば、野次を飛ばされたルイズが顔を真っ赤にして言い返している。

そのうちに、野次はタバサにまで及んだ。

「タバサ！お前もゼロのルイズと同じ平民を連れてきたのか！みつともないなあ、トライアングルのくせに！」

タバサはこれを完全無視。まあ彼女らしい対応だ。

が、主を馬鹿にされて黙つていられるほど俺は人間ができるといいのだ。

何せ、悪魔だからな。

「浅いね、お前。公然とクラスメイトを馬鹿にするのか？底が知れるな」

「なつ……平民の分際で！」

「貴族であることを盾に取るなら、人の上に立つ者として相応しい行いをすべきだろう。

公然とクラスメイトを馬鹿にするのが貴族らしい行動だというなら何も言えないが」

「貴也…（キロッジ） うつ…？」

一睨みして黙らせたやつた。

ただし、視線に魔力は込めておいたけどな。

「クロスアイ」、敵を強制的に沈黙させる悪魔の一撃である。

本来は敵の魔法を封じるためのものだから、今は弱めにかけておいた。

まあ授業が終わる頃には解けているだろう。

授業は黙つて聞くものだ。不自由はあるまい。

「ミスター・マリコルヌ、お友達の侮辱はいけませんよ。以後気をつけなさい。

では、授業を始めましょう。今日は土系統のおさらないと鍊金の魔法の授業です……」

マリコルヌの異常に気づかずシュヴルーズは授業を進める。さつきの不用意な発言といい、案外抜けているのかもしれない。まあ根は善人なのだろうが……。

「…何をしたの？」

不意に、タバサが話しかけてくる。

さつきのクロスアイのことだらう。

あの僅かな魔力に気づくとは、さすがだ。

「何、ちょっと黙つてもらつただけだよ。そのままでは授業の妨げになるしな。

書は無いし放つておけば治る。心配は要らない」

「やつ

短く返事をして、彼女は手元の本に視線を落とした。  
どう見ても授業を聞いているように見えないが、彼女のレベルであれば授業の内容などつまらないものなのだろう。

一方で、俺は中々興味深く授業を聞かせてもらつた。

このハルケギニアの魔法をまだ良く知らないのだが、ここまで応用の利くものだとは思わなかつたのだ。

建築、工業、農業にまで土系統の魔法は役に立つのだという。ここまで生活に密着するなら、確かに魔法使いが優遇されるのも分かる。

一方で俺の魔法は基本的に戦闘にしか使わない。

そもそも威力がありすぎて他の用途には使いたくても使えないのが。

例外があるとすれば回復系魔法くらいか。

ともあれ、これを機に俺の魔法の応用を考えてみるのも面白いかもしない。

まずは威力と効果範囲を小規模に限定させる必要がある。そのまま使えそうな回復系魔法も、純粹な人間相手に使つたことが無い。

近いうち効果を確かめておく必要があるかもしない。

流石に害になることは無いだろうが、万が一だ。

助けようとしてティアをかけたら死んじやいました、なんて…。

冗談にしても笑えないし、ホントに起きたらなお笑えない。

(つんつん)

隣に座っているタバサに腕をつかれて、俺は考え方を中断する。

「ん、どうした?」

「机の下に伏せた方がいい」

…授業中に一体何を、と思ったのだが…

周りを見ると、他の生徒達もほとんど同じように机の下に潜っている。

ルイズがシュバルーズと共に教壇にいた。何か実技でもやろうとうのか。

とりあえず真似しておいた方が良さそうだ。何が起きてもある程度対処する自信はあるから。

「わかった」

伏せた直後に『ドカーン！…!』

…なんだあの爆発は。

机の下に潜つて爆風を避けられたから良かつたようなものの。熱はマガタマ「シラヌイ」辺りの火炎無効で、爆風は「ヒツミ」辺りの衝撃無効で防げそうだが、両方同時に来るとどうやらにせよダメージを受ける。

まあ、ダメージを受けても微々たるものだっただろう。

しかしあの爆発を至近距離で食らつたら俺でもかなり痛そうだ。正直防ぐ手段が見つからない。せいぜい防御力増強魔法で守りを固めておくくらいか。

もしかしたらあの爆発は万能属性かも知れない。

まあ、俺の主はタバサだ。  
級友の魔法に口を出す必要もないだろう。

見れば主人はもう机の下から這い出して読書に戻っている。  
マイペースというか何と言うか。

思わず吹き出しそうになつた俺をちらりと見やつて、軽く首を傾げてみせるタバサであった。

s  
i  
d  
e

o  
u  
t

## 第五話 授業（後書き）

今回は人修羅目線のみです。

最初から最後までタバサと人修羅が一緒に行動してるのは、クライマックスでもない限り人修羅目線でのみ描くことになりそうです。

次回、「サイト君大活躍！ハショリしかないよ！」の巻」です（大体合ってると思ふ）

## 第六話 決闘

s i d e 人修羅

踏み込んだその先は、だだっ広い広間だった。  
どデかい長方形の長いテーブルと、その両脇に端から端まで並べられた椅子。

それが何セツトか並んでいる。

「ijiがアルヴィーズの食堂か…広いな」

「じち

タバサは俺を伴つて左端のテーブルへと向かつ。  
適当に空席を見つけて椅子を引いてやつた。

「ありがとう」

「気にするな。ijiは貴族用の食堂だらう?俺はじいで食事すればいい?」

「じー

授業の時と同じく、横の席を示された。

タバサが言つならいいか。デジャヴを感じるがそつ納得しておいて、座る。

テーブルの上には、白く清潔なテーブルクロス。

そして、そのクロスが見えないほど大量に並べられた皿、皿、皿。朝っぱらからこの量か…明らかに多すぎるだろ？

大量に並べられた椅子と、もつと大量に並べられた料理の数々。椅子が全て埋まると仮定しても、この大量の料理は半分以上が手付かずで余りそうな気がする。

貴族の食事とは皆こいつらのものなのだろうか。

スープ。ローストチキン。サラダ。何かの果実を使ったと思しきパイもある。  
見たことのない料理も多い。

この体になつてからは食事は必ずしも必要ではなかつたが、食べば食つただけエネルギーの補給にはなる。  
とはいへ、ボルテクス界では碌な食い物が無い。

倒した悪魔の肉を適当に炙つて食つてみたこともあつたが、正直不味かつた。

そもそも食えそうにないものも多いのだ。

土偶にしか見えないアラハバキとか、見るからに毒っぽいブロブなど食いたくないだろ？

ウイルオウイスプやモウリョウなんか、実体が無いようにしか見えない。

まあ殴れば当たるから実体はあるんだろうけど、やはり食い物としては見づらい。

鳥みたいなスバルナとか、馬肉。牛・牛肉っぽいバイコーンとかは食べてみたい気もしたが手はつけていない。

さすがに人にしか見えないモムノフやサルタヒ「なんかは無理だ。

カニバリズムに浸る趣味は無い。

ちなみにピクシーやリリムみたいな人型女性悪魔は最初から除外している。

これを対象に食うとか言つたら違う意味になつてしまつ。

まあ余談が続いたが、話を戻して。

大抵は吸血や吸魔といったスキルでエネルギーを直接敵から取り込んで貪つたりしていた。

その方が手軽だし、何より純粹なエネルギーを取り込むのは快感でもあるのだ。

敵悪魔と交鈔する際、力を吸わせると要求されることがある。  
痛い思いして吸わせてやつても、感想はかなり違う。

喉越し爽やかと言つてくれれば我慢した甲斐もあるが、しょっぱいとか不味いとか言われた日には一気にテンションが下がつたものだ。ともあれ、やはり力を吸うのは悪魔にとっては食事と同じようなものらしく、味そのものを楽しむことができるのだ。  
ちなみに味の好みは同種の悪魔であつても個体差が激しい。この点は人間と同じだ。

味の評価は、不思議なことに全て「俺の力」を吸つているのに色んな評価をされる。

吸うたびに味が変わるのが、などとよく疑問に思つたものだ。

そんなわけで、数年ぶりに人間らしい食事ができるかもと思い、期待を持つシンであった。

⋮

⋮

……

皿に。

悪魔の体になつて味覚まで変わつてやしないか。  
最初の一口を食べようとした直前にそう思ったのだが、そんなことは無かつた。

スープの深い口。涎が出そつなほどである。すばらしい。  
ローストチキンのパリパリ感、鶏のサラリとした肉汁がたまらない。  
サラダのシャキシャキとした食感は久しく忘れていた感覺だ。

感涙である。

数年ぶりのまともな食事。

だが、その感動を差し引いても、この食事は本当に面かつた。  
コツクが誰かは知らないが、さすがに貴族の食卓を預かるだけはあつて見事な腕だ。

コースの順番など知らないし、別に順番に出されるわけでもない。  
タバサも別に気にしていないようだが…しかしよく食つ子だ。  
この細い体のどこにそんなに入るんだと突つ込みたくないほど食つている。

「…？ 美味しい？」

ふと此方を見たタバサと田が合つ。  
微妙に首をかしげる動作は、男ならぐつと来るに違ひないだらつ。  
本当に絵になる子だ。

「ああ、皿に。どれも絶品だな」

「そり…。食べる?」

差し出してきたサラダの小皿。見慣れぬ葉物野菜が混ざっている。

「ここのトゲトゲの野菜は見たことがないな。どれ…」

ぱくりと一口。ん、結構苦い。

が、悪魔の肉に比べたら充分美味の範疇だ。深い苦味がドレッシングとよく合っている。

「ちよつと苦いが、それがいい。

ドレッシングとよく合っているな

「同感。ハシバミ草は美味しい」

見れば、ここの皿に手をつけていない生徒が多い。やはり常人にこれは苦味が強すぎるようだ。だが、俺とタバサはその美味が理解できる。ちょっとといい気分。

「ハァイ、タバサ。相変わらずよく食べるわねえ。

あら、シンも一緒ね。どう、ここの食事は?美味しいでしょ

「やあキルケ、おはよっ。ああ、ここの飯は皿にな。このハシバミ草は初めて食べたが、お気に入りだ」

キルケが歩み寄ってきた。もつ食べ終わっているらしい。見れば、既に席を立つていてる生徒もちらほら出始めていた。

「あら…これ食べられるなんて凄いわね。タバサ以外は誰も手をつけようとしないのに…。流石にタバサの使い魔だけあるってことかしさ」

「美味しいのに。勿体無い」

空いていた俺の隣に座ったキュルケと、三人でしばし歓談。

⋮

⋮

⋮

「決闘だ！」

俺もタバサも食事を終えて、キュルケを交えて歓談していたのだが…不意に、食堂に高らかに響いた宣言。

食事時の歓談には似つかわしくない単語である。

見れば、テーブルの向こう側に人だかりが出来ている。  
その中心には怒りを抑えて無理に笑顔を作っている金髪の少年。何  
だか頭が足りてなさそうだ。  
その前で彼を睨みつけているのは…

「サイト君…何をしているんだ?まさか彼が決闘を…?」

「何かヤバそうな雰囲気ねえ…」

「騒々しい」

様子を見ているうちに、金髪の少年が食堂を後にする。周りの貴族の子弟に促されて、サイト君も出ていった。

「ねえ、何があったの？」

キュルケが食堂を出て決闘を見に行こうとしていた男子生徒を捕まえて、事情を聞き出す。

「ギーシュのヤツ、モンモランシーと一緒に女子と一緒に股かけてたらいいんだ。

けど平民のメイドのおかげでそれがバレちゃってギーシュに責められてな。

それをかばいに入ったルイズの使い魔と散々に揉めて、決闘騒ぎになっちゃったんだよ。

「ホストリの広場でやるらしいぜ」

「ああまた入った……一方的だな……」

「仕方無いわよ、平民と貴族じゃ勝負にならないわ」

話を聞いた俺たちは決闘を見に、ヴェストリの広場まで来たのだが…  
その内容は酷いものだ。

強者による、一方的な蹂躪。

はつきりいつて決闘どころじゃない。

ルイズとか言ったか、サイト君の主のピンクブロンドの女の子が声を張り上げ、必死に止めようとしている。

実際それは正しい判断なのだろう。サイト君はもう血だるまにされていた。

「だが…サイト君の目はまだ死んでいない。

あれだけやられてもまだ食らいつくなのか…」

散々殴られて体中痣だらけ。

左目が大きく腫れ上がっている。あれではもう左目は見えないだろう。

それでも、まだ開く右目で強烈に相手を睨みつけている。

「君はよくやったよ平民。だがこれ以上やると言つなりもつ手加減はしない。

まだやるといつならその剣を取りたまえ」

金髪の少年が勝ち誇った顔をしながら、足元の土を鍊金して一振りの剣を作り出す。

ふらふらになりながらも、サイト君はそれに手を伸ばした。  
必死に止めようとするルイズだが、そこにサイト君の声がかぶる。

「下げるくない頭は、絶対に下げるねえ…！」

…とつとつ剣を抜いてしまった。

「不味いな。これ以上やるとサイト君が殺される。  
あのフラフラの状態で今更剣一本持つたところで勝負が変わるわけがない…」

「同感」

「かといって決闘に割り込む真似もできないし…」

「ギリギリまで止めないが、流石に死なせたくは…ッ！？」

戦況が、一気に変わる。

何の変哲もない剣を手に、戦場を縦横無尽に走り回るサイト君。どこにあれほどの力が残っていたんだ。

青銅の塊にしか見えないギーシュのゴーレムを、バターでも斬るかのように切り裂いている。

紫電一閃。

最後のゴーレムを斬り捨ててギーシュの首に剣を突きつけたサイト君。

ギーシュは困惑と恐怖で青ざめている。

「勝負は決まつたようだな」

「ええ…まさかあの平民君が勝つちゃうとはね…」

「剣を持つたらいきなり豹変したな…。

あの速力は相当なものだった。あれを捉えられる者はそつそつ居ないだろうな」

などと話しつつ、サイト君に駆け寄った。

「サイト君、大丈夫か？」

「あ……シン……か……へへ……何とか勝つたけど、もうフフフフフだよ……」

「サイト！大丈夫！？ちょっとどきなさいよアンター！」

ルイズが駆け寄ってきて、俺に怒鳴りつけてくる。  
介抱しているのに何で怒鳴られなきゃならんのだ……。  
とりあえず無視してサイト君の治療を始める。  
とはいって、俺の回復魔法が彼に効くか分からない。効きすぎて副作用が出ることも考えられる。  
限界まで力を抑えて魔法を使おう。それでも充分なはずだ。

「……ティア……」

一瞬だけ、彼の体が淡い緑色の光に包まれた。

「あ、アレ……？ 痛みが引いてる……」

流れた血までは消えないから顔はまだ血まみれだが、傷それ自体は  
消えたらしい。

「応急処置はしておいたが、念のため治癒魔法の使える先生に診せ  
たほうがいい。

……じゃあな、サイト君。よく頑張った。ゆっくり休んでいい

ルイズとサイト君にそう言い残して、俺は主の下へと戻る。

ルイズが何やら俺に驚愕の視線を向けているが、気にしないでおくれ。

「サイト君は大丈夫そうだ。これから治癒魔法の使える先生に診せにいこう」

「そう。良かつた

⋮

side out

side タバサ

あの平民の少年の豹変はただ事ではないが、考えても分からないのだから気にしない。

それ以上に気になるのは、シン。

何をしたかは分からぬけど、あの平民の少年に近寄つて何かをしたように見えた。

少年が僅かに光つたのを、私は見た。

何事もなかつたかのようにシンはこちらへ戻ってきた。

けれど、あの少年はあれだけ殴られたのに自分の足で立ち、ルイズに引っ張られるように医務室へと歩いていった。

その動作に、ダメージは感じられない。

⋮ シンが彼を治療したの…？

もしかしたら、母様も…。

s  
i  
d  
e

o  
u  
t

## 第六話 決闘（後書き）

お待たせしました、第六話です。

今回はサイト君決闘編。

外部から見た流れですので、導入部やら決闘の細部やらは省いてます。

でも実は今回の隠しサブタイは「魔人の食事情」。

ぶっちゃけ戦闘描写よりも人修羅の食事情考える方が楽しかった（笑）

アバチューは確か敵を食つて強くなつてぐゲームでしたっけね。俺はやってないんですが、何かそういうのっぽく見えました。

さて、次回は多分フーケ編へ突入。  
お楽しみに。

P・S・俺が食べたい悪魔は…リリムかなあ（オイ

## 第七話 外出

side タバサ

ペラリ、ペラリとページを繰る音だけが部屋に響く。窓から差し込む爽やかな陽気が、ともすれば物静かで陰気になりかねない部屋を明るく照らしていた。

外の喧騒は、ここには届かない。

静寂に包まれた、けれど至福の一時。

「…つ…ふう」

ページを勝手に捲つてしまふ悪戯好きなそよ風すらも、今は微笑ましく好ましく見える。

虚無の曜日は、好きなだけ本を読んでいられる私の大切な時間。シンは今は外出している。

こんな陽気の日は外に出るのが好きなのだと。彼なら何の心配もいらない。

不意に、静寂が破られる。

無粋なほど乱暴なノックによつて。

こんなことをするのは一人しかいない。

「…サイレント」

杖を手に取り消音の魔法をかける。

再び取り戻した静寂に満足し、私はまた本へ目を落とした。

またしても不意に、肩を掴まれる。

視線を上げると、予想通り親友。

「…………！」

何やら切羽詰つた様子で口をパクパクさせていく。

「……ふう……」

さすがに放つておくわけにもいかず、また杖を取つてサイレントを解除する。

「タバサ！付き合つて！トリスターニアへ行くわよー！」

……いきなり何を言い出すのだろう、この親友は。

私にとって今日がどれだけ大切か分かっているだろう。

「……虚無の曜日」

簡潔と呼ぶのもおこがましい程短い返事を返して、私はまた本に目を落とす…  
が、その本まで取り上げられてしまった。

「……」

感情のない目に「む～…」といつ擬音を込めるつもりで親友を見つめる。

「分かってるわよ、今日が貴方にとって大事な日だってのもね。  
でもこっちも大変なのよ！ダーリングが出かけちゃったの…しかも

ゼロのルイズと二人でね！

これは放つておくわけにいかない、すぐ追わなくちゃいけないの！  
だから付き合つて、タバサ！」

「…だつたら一人で行けばいい、と思うのだが… 親友にそれを言つのも酷かもしれない。

少なくともそう思えるくらいには、私はこの親友が好きだったから。

(… )

領いて身支度を整え、書置きをテーブルに置いて部屋を出る。

キュルケに付き合つてトリスターニアへ行く タバサー

side out

side 人修羅

寮を一步出ると、そこは美しい草原。

麗らかな陽気、そよ風に波打つ草の絨毯。

ボルテクス界では決して見られない光景だ。

肌を差す暴力的なカグツチの熱気とは全く違つその好ましい感覚に、  
俺はしばし身を委ねた。

適当な場所を見つけ、木の幹にもたれるよ<sup>う</sup>にして目を閉じる。

：人だつた頃を思い出す感覚。

だが、陽気はともかく静かな草原に身を任す経験はあまり無い。  
俺の出身は東京の新宿、都心も都心である。  
草地の一つや二つ公園を探せば見つかるが、この時間にこんな静かな草原はそうそう無いのだ。

一しきり楽しんだところで、一端部屋に戻るつか。

いい加減こつちの字も覚えないと何かと不自由だし、今日は休みらしいからタバサに頼んで教えてもらおうか…。  
などと考えていたのだが、部屋はもぬけの殻だった。

「…タバサ…どこ行つた？」

ふとテーブルを見ると、書置きらしき手紙。

一文しか書かれていないが、生憎と読めない。  
さつそく不自由に当たつてしまつた。

とりあえず字の読める人を探そつか…。

「じゃあトリスター・アはあつちですね?・ビツもありがど?」

……  
……  
……  
……

字の読めるメイドを捕まえて、手紙の内容とトリスターの位置を聞けた。

多分そう遠くへは行つていないので…さすがにこのナリで街道を走りたくない。

人型であつてもこの姿は蛮族か亜人にしか見えない、といふことくらいは承知しているのだ。

「…仕方無い、空から行くか」

手近な林を見つけてセイリュウを召喚する。

「悪い、セイリュウ。ちょっと俺を乗せて飛んでくれ」

「…我ハ馬テハナイ…ガ…ヤムヲ得ヌ。乗レ」

地上から見てもさほど田立たないだけの高度を確保してから、トリスターニアへ向かう。  
幸い視力はいいから、タバサはすぐに見つけられるだらう。  
などと考えているうちに見つかった。  
本当にすぐだった。

とりあえずセイリュウは上空で待機させておいて、飛び降りる。

「タバサ！」

ズドンッ！…という鈍く重い音を響かせて着地。  
ちょつとヒヤが減つた気がするが、まあいいか。

「…シン…？何で貴方が落ちてくるのよー…？」

「…驚いた。どうから？」

目を丸くする一人（タバサは極僅かな変化しかなかつたが）に事情を説明する。

「…へえ…あの空に浮かんでるちっちゃいの、貴方の使い魔なの?  
使い魔を持つてる使い魔なんて初めて聞いたけど…ね、私たちも  
それに乗せてくれない?」

「…乗りたい」

「一人を乗せたくらいでへばるほどやわな奴じやないから構わないが…馬はどうするんだ？」

四三

見事に被つた。流石に親友、息が合つてゐる。

10

「す、いい、それほんの風竜より速いんじゃない！？」

「：気持ちいい」

その後、結局「この距離なら学院に戻つて馬を返してから改めて飛んだ方が速い」という結論に至つた。

セイリュウは実際馬の速度など問題にしないし、三人で乗つたところで何も乗つていないと同じように飛ぶからだ。

ちなみに、俺とタバサ以外の人間が居るとこひで喋らないように命令はしてある。

文字通りはしゃいでいるキュルケと喜んでいるらしくタバサを微笑ましく見やつた。

「コイツなら全力で飛べばトリスター・アまで一十分、ゆつたり飛んでも三十分あれば着くかな」

「そうね、これだけ速いならゆつくり飛んでもらつた方がこの子も楽だろ?」

(ノーブル)

⋮

⋮

⋮

「じゃあ俺は向こうの林の中で待つてるから。気をつけて行けよ、一人とも」

「ごめんな、シン。流石にそのカツコで町には入れないからね… タバサ、ついでに彼の服も買ってきましょうよ」

( … )

「ハハ…悪いな。なるべく地味で動きやすいやつ頼むよ、タバサ。  
安物で充分だから」

「…分かった」

s i d e o u t

s i d e タバサ

「…いたわよ！ダーリンとルイズ発見！」

キュルケが随分と楽しそうに見える。

尾行がそんなに面白いのだろうか…正直ここは理解しかねる。

悪戯している子供と同じようなものだろうか。

何だか妙にしつくりくる予想に勝手に納得して、私は前方の二人を見つめる。

「…裏路地」

「あそこに入つていったわね…行くわよ」

杖の感触を確かめるように匕べつと握りこむと、キュルケに続いて裏路地へ。

トリスター・アはトリステインの首都といえども、治安は余り良くない

いのだ。

大通りでさえ当たり前のようにスリがいる。

通りを一本離れた裏路地は全てスラムといつていい。食うに食えない貧民やごろつきがそこかしこにいる。腕に覚えのある人間以外が入れば身ぐるみ剥がされ売られてしまう。人身売買が平氣でまかり通つてゐる世だ。

女は体を賣ることを強要され、男はどこかの農地か鉱山あたりで過労死するまで重労働に従事させられるのがオチ。

もちろん私とキュルケならそんなことはない。

キュルケは杖を腰の後ろに差しているが、私の杖は大きいから常に手に持つてゐる。

一目でメイジと分かる私たちに絡めるほど腕のいい人間は、そもそもごろつきなどしない。

「…あの店に入つていつたわね…武器屋みたいね」

「行く？」

「いいえ、出でくるのを待ちましょう…あんまり氣乗りしないけどね」

「…分かつた」

氣乗りしない、というキュルケの言葉はよく分かる。

何せ、大通り以上に臭くて汚いのだ。

流石に大通りは多少マシだが、裏路地ともなると平氣でゴミや汚物が転がつてゐる。

この世界には公衆衛生などという概念が存在しない。

貴族は王族と貴族のことしか考えないから、平民しかいないこのような下町を清潔にするために金を使うなどという発想自体が無いの

だ。

もしサイトかシンが領地を持つ王族や貴族の使い魔として呼び出され、ハルケギニアの都市を見たら、きっと「街を清潔にした方がいい」と進言しただろう。

現代知識を持つ一人なら、公衆衛生が大きな利をもたらすことを知っている。

私はシンの生きていた世界の話を聞いていたから、それが理解できる。

街を清潔にすれば、まず流行病が一気に減る。それによって人口の向上が望め、それが生産力に繋がる。

また、街を清潔にすることで治安だって向上するのだ。

一見関係ないように見えるが、それは素人考えである。

簡単な例を出そう。

ゴミ一つ無い清潔な場所と、ゴミ捨て場と勘違いしそうなほじゴミが散乱した場所。

ゴミをポイ捨てするとしたら、どちらの方がやりやすいだろうか。どちらの方が気が咎めないだろうか。

まともな倫理観を持つた人間ならば、後者と答えるはずだ。

治安向上には警邏による監視と取り締まりも確かに大事だが、それと同じくらい「犯罪をしにくい街づくり」が大切になるのだ。

人は良くも悪くも周りの人間に左右されることが多い。

皆が犯罪をしている場所にいるとそれが犯罪ではなく当然の行動に思えてくるが、逆もまた然りなのだ。

軽犯罪を徹底的に取り締まることで重犯罪の発生率まで抑えられるという手法（「割れ窓理論」とかいつたか）をシンから聞いた時は、目から鱗が落ちる思いだった。

「あ、出できた…行くわよタバサ！」

ルイズとサイトが店を出て大通りへ向かったのを確認してから、私たちも武器屋へ向かう。

二人が何を買つていったのかをキュルケが店主から聞き出す。

「ふーん…古いインテリジョンスソードをね…ねえ、店主サン、この店にそれ以上の剣はあるかしら？」

媚びるような色気ムンムンの口調と仕草で、キュルケが交渉を始めた。

狙いはゲルマニアのシュペー卿とやらが鍛えたという宝剣。確かに立派ではあるが、正直実戦用とはとても思えない。

岩だつて切り裂くと豪語する主人だが、まあ嘘だろう。

材質は確かに鋼だろうが、金のメッキや象嵌された宝石などは無駄そのもの。

豪華な剣を持つていればそれだけで敵は自分を警戒する（財力や権力を手に入れるだけの実力の証明になる）し、そもそも宝石という異物が入り込んで十分の耐久性を発揮できるわけがないのだ。あの装飾にはなんの戦術的優位性も無い。

：何だかバンダナを額に巻いた傭兵の姿が脳裏に浮かんだが、きっと氣のせいだろう。

「…役立たずの剣」

呴いた言葉は親友にもキュルケにも聞こえていない。

まあいい、親友が何を買おうとそれを止める権利はないし、忠告はした。

勝手に納得して、本を取り出しけりを繰る。

「…まいどお～…（涙）」

「終わったわタバサ。そ、行きましょ」

泣きべそかいだ店主と、満面の笑みを浮かべて宝剣を抱えるキュルケ。

色仕掛けに負けて散々値引きさせられたらしく。

その額が如何ほどか興味が無くもないが、店主の涙と鼻水でぐしゃぐしゃになつた酷い顔を見れば聞く氣も失せるといつもの。

「…」愁傷様

ちらりと店主を見やつてそつそつと、私は親友の後に続いて店を出た。

side out

## 第七話 外出（後書き）

フーケ討伐戦前哨編、と言つたところでしょうか。

戦闘描写がまだほとんど無いのが気にかかりますが、どうせヘタクソだからまあいいか。

後半、戦闘描写がたくさん出てくる辺りへ差し掛かるのが怖いっす。

## 第八話 怪盗

side 人修羅

「いい、ルイズ？あのロープを魔法で切った方の勝ちよ…」

「上等よ…アンタには負けないんだから…！」

「…なんでこんなことになったのか。」

月の明かりにぼんやりと照られた寮の庭。

挑発と敵意をぶつけ合う二人を見やり、俺は一人、溜息をついた。

事の発端は、あの後学院へ戻ってきてからのルイズとキュルケのやり取りである。

そもそもルイズとサイト君は、サイト君が持つ剣を買うためにトリスターニアへ来ていた。

キュルケとタバサがそれを尾行し、俺がその足を提供したわけだ。二人は街ではルイズとサイト君に接触はせず、サイト君にプレゼントするための剣（と俺が頼んだ服）を購入して戻ってきた。

結果、残つたのはルイズが買った剣とキュルケが買った剣。

当然剣は一本も要らない。

日本の剣術には「刀流」というものもある。

かの剣豪、富本武蔵が開眼した「天一流」と呼ばれる流派がそれに当たるが、あれは刀を一本使うのではない。  
本来は刀と脇差の二刀なのだ。

脇差を正眼のように前へ、刀を上へ振り上げるような形で構える。間合いの短い脇差を前へ出して相手を誘き寄せ、上に構えた刀で切る、というのが基本の戦術らしい。

だが、刀とは本来見た目よりも重い。

日本刀の速さと鋭さは倭寇によつて大陸へ知れ渡り猛威を振るつたとされているが、大陸の剣と日本の刀では構造が違つ。

日本の刀は鋭く切り裂くことを、大陸の剣は重さと頑丈さに任せて叩き切るような使い方をする。

そして、ここハルケギニアの剣もやはり日本の刀より大陸の剣に近いのだ。

両手に一本ずつ持つには重過ぎる、というわけである。

さて、そうなると問題はサイト君がどちらの剣を使うのか、という点だ。

ルイズとキュルケは、先祖にまで遡つてすら喧嘩の種に事欠かない関係らしい。

当然二人とも自分の買つてきた剣を使わせようとする。

サイト君に対するアピールがライバルへの敵視に変わり、当事者を無視した口論に発展してしまった。

拳句の果てに、この状況。

縄で簍巻きにされたサイト君が、壁から吊るされている。彼を吊るしたそのロープを的として魔法で勝負をつけようといふわけだ。

「魔法勝負のためにサイト君を使う意味があるんだろうか…」

「言つても無駄」

「…確かに。 というか、下手に口を出してしまつたりを食つのが怖い。

しかし、サイト君も災難だな…。

さすがに威力は抑えるだろ？が、魔法が外れたらサイト君に当たるかも知れないし当たつたら当たつたでサイト君は簾巻きのまま地面へ落下。

どちらにしろ危険すぎる…」

「落ちたら私が助ける」

タバサならうまくやつてくれるだろ？

彼女がやると言つた以上、できないといつことはあるまい。

「さあ、貴方から先で良いわよルイズ。これで決まれば私の負けでいいわ」

「くつ…余裕ねツェルプストー。いいわよ、先手を私に譲つたことを後悔なさい！」

「いくわよ、”ファイア－・ボール”！」

杖をロープへ向けて詠唱するルイズ。

しかし、呪文名の通り火の玉が飛び出したりはしなかつた。

代わりに出たのは、轟音。

ちょうど授業で起こした爆発と同じようなものである。

手元で起こるか、離れた場所で起こるかの差はあつたけれど。

「何かが飛んだよ？には見えなかつた。いきなり爆発が起こるのか

…。

あれを使いこなしたらかなりの武器になるな。  
しかし…外れか。あーあ、壁が酷く抉れてる…

そのあまりの威力に思わず感心してしまつ。  
魔法学院なら建物に魔法によるプロテクトくらいはかけているだろうに、あの惨状である。

「ふふつ、やつぱり外したわねゼロのルイズ。私が手本を見せてあげるわ。

ファイア・ボールはこうやるのよー” ファイア・ボール” !

続いて呪文を唱えるキュルケ。

今度はちゃんと火の玉が飛び出した。

俺の使う魔法に当てはめるなら、おそらくアギ相当といったところ。  
中々密度の高い魔力が詰まっているのが分かるし、狙いも正確。  
いい攻撃だ。

サイト君の頭上に正確に飛来してロープを焼き切る火球。

「 … ”レビューション” 」

すかさず杖を向け、落下したサイト君を支えるタバサ。  
その素早く静かな詠唱だけでも彼女の実力が分かるというものだ。  
勝負は決まつたな。さて、ロープを解いてやらないと。

「サイト君、お疲れさん。待ってる、今外してやるから…」

その時、俺は異常に気づいた。  
月の明かりが翳つたのである。

サイト君の縄を解こうと刃を背に屈んだのだが、不意に周辺の暗さが増す。

ちょうど、太陽に雲がかかった時と同じよう。

直後に感じた地響き。

何だろうと振り返った直後、俺は声を張り上げて駆け出していた。

「タバサー！ 後ろを見ろ！」

「つ……！？」

「敵と見ていいんだな？ 攻撃を仕掛けるが」

「構わない。けど建物は壊さないで」

「分かってる。……ジャッ！」

身長30メイルはあるうかという土製の人型ゴーレム。動きは鈍いが、耐久力もパワーもありそうだ。

こういう巨体は、足から崩すのがセオリー。

そう判断した俺は、ゴーレムの足を狙つて右手を下から上へと振り上げた。

腕の振りだけで斬撃のような衝撃波を発生させて敵を抉り裂く技。「アイアンクロウ」と、そう呼んでいる。

巨大なドラゴンの爪痕のように地面を抉り、その延長線上にあつたゴーレムの足を切り崩す破壊の風。

だが、一撃でその足をへし折るまでには至らなかつた。

「つ……成功してよね……」ニア・ハンマー！

「爆発はじてるけどダメージは無さそうね…これはどうかしり?」  
フレイム・ボール”！」

「…ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラース…”ジャベ  
リン”」

アイアンクロウに続き、ルイズが爆発を、キュルケが火球を、タバ  
サが氷の槍を解き放つ。

どれも当たってはいるものの、ゴーレムには大した被害は見られな  
い。

見れば、俺のアイアンクロウで崩した足が修復されている。

「…再生能力があるのか…チマチマ削つてたんじゃキリがない…！」

件のゴーレムは緩慢な動きで学院の建物へと歩み寄っている。  
俺たちの存在など無視するかのように。

一体何をするつもりだ？俺がそう思つた所で、ゴーレムは拳を振り  
上げた。

狙いは、先ほどリーズが爆発で抉つた学院の壁。

腹の底に響く鈍い轟音の直後に降り注いできた瓦礫を避けつつ、壁  
を見上げる。

黒い服を来た者が、ゴーレムの開けた壁へと入っていく。

「…学院への侵入が目的か…タバサ！あの穴へ入つていった者を追  
つてくれ！俺はこのゴーレムを何とかする！」

(二二二)

頷いたタバサは、フライを唱えて舞い上がり、キュルケがそれに続く。

飛べないルイズは後ろで慌てているばかり。

助けにはなつていなが、期待はしていない。足手まといにならなければそれでいい。

「物理攻撃でダメなら魔法を食らえ…ハツ！」

振りぬいた腕から、膨大な魔力を発散する。

空気中の水蒸気が瞬時に氷結し小さな氷塊の群れを成す。

同時に生み出した風によつて、氷塊は対象物へと冷氣を撒き散らしながら飛ぶ。

簡単に言えば、ブリザード吹雪である。

万物を瞬時に凍結させるこの魔法を、”絶対零度”と呼んでいる。

俺の最も得意とする氷結魔法。

周辺の気温が一気に下がり、吐く息まで白くなる。

頃合を見計らつて、俺は再度腕を下から上へと振りぬいた。

「ジャツ！」

破壊の風の再来。地面ごと抉り裂くアイアンクロウは、このゴーレムには無力だった。

だが、先ほどとは状況が違う。

”絶対零度”によつて”氷結”させた敵に、”アイアンクロウ”といつ”物理攻撃”を撃ち込む。

それが導く結果は、文字通りの粉碎である。

再生能力のある敵なら、再生できないよう一撃で倒せばいい。

それほど威力のある一撃を放てない状況なら、手持ちのカードの威

力を引き上げる下準備をすればいい。

敵の守りを崩しておくとか、敵の動きを止めて衝撃を受け流せない  
ようにするとか、方法は色々ある。

「芯まで凍らせ、打ち碎く」

単純なだけに強力なこの戦法を、俺は好んで使っている。

無駄に破壊を撒き散らすような派手な攻撃が余り好きではないのだ。

ガラスを叩き割った時のように澄んだ、それでいて甲高い耳障りな  
音を残し、ゴーレムは文字通り粉々になつた。

これが生物的な悪魔であつたら凍つた血肉の真っ赤な粉雪が見られ  
るのに、茶色ではどうも味気ないな。

残酷な、それでいて幻想的なその光景を思い浮かべながら、四散す  
るゴーレムを見つめていた。

「な、何て威力なの…アンタ一体…？」

「一体つて言われてもな。俺はタバサの使い魔のシン、それ以上で  
も以下でもない」

驚愕の視線を向けてくるルイズに当然過ぎる答えを返し、俺はタバ  
サ達が飛び込んだ穴を見やる。

不意にそこから飛び出してくる黒い影。

「ん…？タバサ…いや敵か！」

黒いロープを来た人物は、そのまま文字通り「飛び去る」。  
胸に何かを抱えているのがチラリと見えた。

生憎、空を飛ばしたら追う手段はセイリュウしかないが、あまり学  
院内で呼びたくない。

一度乗せたキルケにも口止めしてあるのだ。

しかし、アイツだけが出てくるといふことは…タバサは！？

「おいタバサ！キルケ！無事か！？」

「…平気…取り逃がした」

「アタタ…全くやつてくれるわねアイツ。かなり実戦慣れしてたわ」  
呼びかけに応えて穴から顔を覗かせる一人を見やり、俺はほつと息をついた。

s i d e o u t

## 第八話 怪盗（後書き）

最近面白いクロス物のSSを見つけたんですが、それが実は盗作だつたことが判明してちょっと凹んでる今日この頃。  
焼き直しして最初からやり直してくれんかなあ。読むのに。

## 第九話 思惑

side 人修羅

喧々諤々。この状況を表すには、この四字熟語が相応しいだろ？。

昨晩に起こった襲撃事件であるが、あれは”土くれのフーケ”と呼ばれるメイジの盗賊の仕業であることが判明した。

根拠は簡単、現場に犯行声明が残されていたからである。

”破壊の杖と幻惑の羽、確かに押領致しました 土くれのフーケ”  
と。

昨晩あのゴーレムが空けた穴の奥には、宝物庫があつたのだ。  
そこに保管されていた宝二つが、今回盗まれた品。  
フーケはどうやら貴族の持つマジックアイテムだけを狙う盗賊らしいから、この二つもマジックアイテムなのだろう。  
俺はどんなものかは知らないが。

さて、あの事件の後。

あの時フーケを追つて宝物庫へ突入したタバサとキュルケに大した怪我は無かった。

その後俺たちは教師を捕まえて事情を説明。

とりあえずその教師は学院長へ報告の後、現場の保存のために見張りに立つ。

俺たちは下がつて休むよう言われ、中々寝付けないままに一夜を明かした。

そして朝一番に学院長室へ教師たち共々呼び出されて事情聴取を行

い、今に至る…とこつわけだ。

さて、件の「喧々諤々」についてだが、要するにフリークの盗みを許してしまったこの失態の責任を誰が取るかといふ話である。

「昨日の当直はミス・ショーヴルーズ、貴方であつたはずだ…盗まれたのは貴重な宝が一つ、どう責任を取るのです！」

責任追求を真っ先に行い、当直であつたショーヴルーズをヒーローとばかりに責め立ててるのは同じく教師の立場にあるギター。瘦せぎすの体に血色の悪い顔で、不気味かつ神経質そうな雰囲気を漂わせている男である。

幾度かこの男の授業を聞いたが酷いものだった。

自分の系統である風の魔法こそ最強とのたまひ、その証明のために反論した生徒を吹き飛ばしてみせる。

どう考へても子供に物を教える態度ではなく、まず間違いなく教師失格な男である。

ギターではなくバトーカゲードーと改名すべきだ。

槍玉に挙げられたショーヴルーズは顔を蒼白にしておろおろするばかり。

正直見るに耐えないと、まあどうでもこことだ。

「やめんか、ミスター・ギター。

彼女の責任だと君は言つが、そもそもこの中にまともに当直をしたことのある者がどれほど居るところのじや。

今回の件はわしも含めた教職員全員の責任じやよ。

メイジの学校に侵入しようとするとする者などおのまいと油断した、わしら全員の責任じや

」

学院長が何やら人格者めいたことを言つてゐるが、その右手はしっかりとシユヴルーズの尻に伸びてゐる。

「ありがとうございますオールド・オスマンー私のお尻でよかつたらもういいからでも…！」

今にも泣き出さんばかりの面持ちでオスマンのセクハラを受け入れるシユヴルーズ。

まあセクハラを受け入れるのは本人の勝手だが、オスマンの言つていることは要是責任の所在を誤魔化す方便。

下の者が犯した失態を償うのが上に立つ者の責任である以上、今回の一件で腹を切るべきはオスマンなのだ。

サボった当直にも責任は当然あるが、当直がサボらないよう管理するのも学院長の義務。

さつきの一言から、皆が皆サボっていたことが明白である以上、オスマンが管理を怠つていたことも事実なのだ。

「今わしらがやるべきはフーケの討伐、それのみじや。この失態はなんとしても取り返さねばならぬ」

「そうですね！ではすぐに王室に討伐隊の要請を…」

「たわけつ！そんな事をしどる間にフーケに逃げられてしまうわい！わしらで討伐隊を編成してフーケを捕らえに行くんじやー！」

王都へ連絡を入れようとすると「ルベールを叱り飛ばしたオスマンは、フーケの討伐を決定。

正直俺から見れば、失態の上塗りでしかない。

失態の責任を上に知られる前に取り戻そと。○誤魔化そとして

足掻く。

結果、すぐさま大々的に動くべきところへ、初動が決定的に遅れて取り返しがつかなくなるということが良くあるのだ。

このままではオスマンは良くて学院長辞任、悪くすれば投獄〇〇処刑もあり得る。

ここトリスティン魔法学院は国中の貴族の子女を預かる場所なのだ。今回は生徒達に被害は無かつたが、そこに賊の侵入を許した以上、父兄である貴族達の怒りを買うのは必定。

しかも、ここにはキュルケのように他国から留学してきた者もいる。である以上、外交問題に発展することすらありうるのだ。

今の段階で王室や貴族達に事の子細が知れれば、オスマンの首は確実に飛ぶ。

下手をすれば他の教職員に累が及ぶこともありうる。

それで済めばまだ軽い方か。

流石にこれが戦争に繋がるとは思わないが、外交問題に発展したとして、トリスティン側が相手国にどう対応するかによつては、戦争の火種になることは充分考えられる。

事は、皆が考えていくほど浅いものではないのだ。オスマンもそれを理解しているはず。

フーケを捕らえた上で報告すれば何とか保身は図れるだろうと、オスマンはそう考えたわけだ。

「これよりフーケ討伐隊の編成を行う。我らはと思わん者は杖を掲げよ!」

しかし、杖を挙げる者はいない。

「何じゃ、この腑抜け共め! フーケを捕らえて名を揚げよ! ところでおらんのか!」

「己の保身に走ったオスマンに他人を脇抜け呼ばわりする資格はないと思うのだが、それはさておき。

ここで名乗りを上げれば、フーケ討伐の全責任を負うことになる。誰も名乗りを上げないのも当然と言えば当然だらう。

討伐に成功すれば良いようなものの、失敗すれば討伐隊参加者にまで責任が及ぶことも充分ありうるからだ。

少なくとも、オスマン一人の責任ではなくなる。

皆それを無意識のうちに感じたのか、オスマンの視線が向けられても俯くばかりであった。

しかし、そこに名乗り出る者が現れる。

「私が行きます」

「ミス・ヴァリエール！何を言つのです、生徒である貴方が行く必要などないですよ！私たち教師に任せておきなさい」

「誰も杖を掲げようとしないじゃないですか。それとも貴方が行ってくれるのですか、ミス・シュヴルーズ？」

「い、いえ……それは……」

勇気ある態度と見えるかもしれない。しかし俺からすればそれは所詮蛮勇だ。

昨日のゴーレムは少々手強かつた。その上ルイズはまともに戦えなかつたのだ。

とてもではないが、やれるとは思えない。自殺行為だ。  
そう止めようとしたのだが……

「ヴァリエールが行くなら私が行かない訳にはいかないわね」

キュルケまでが杖を上げる。

(スツ)

「タバサ、貴方まで…！？」

「心配」

「…ありがとう、タバサ」

なし崩しにタバサが、ついでに俺まで行くことになってしまった。  
ま、仕方無い。

「貴方たち…分かつておるのですが、相手はあの土くれですかぞ！？  
危険すぎるー！」

見るに見かねたコルベールも止めようとするのだが、オスマンがそれを許さない。

「まあまあミスター・コルベール。見上げた度胸ではないかね。

それに、実力的にも彼らならば問題はあるまい？

ミス・ソエルプストーは火のトライアングル。

ミス・ヴァリエルも努力家じやし、その使い魔はグラモン家の三男坊と戦い、これを下すほどの剣の使い手。

ミス・タバサは風のトライアングルである上にシュヴァリエの称号すら持つてあると聞く。その使い魔は昨晩、フーケのゴーレムを粉碎したというではないか。

「の中に、彼女らを相手に勝てるだけの実力を持ったものがあるのかの？」

その問い合わせに答えるものはない。

答えるべきは、自分が討伐に行かねばならないから。

「オールド・オスマン！ フーケの潜伏先が判明しました！」

「ミス・ロングビル！ 今までどこに…？」

「朝起きたらやけに騒がしいので事情を聞きまして、すぐにフーケの足取りを追って調査に出ていたのです」

「さすがミス・ロングビルじゃ。で、フーケの居場所は？」

「はい、ここから馬で片道四時間ほどのある森の中に小屋がありまして、フーケはそこを拠点にしているものと思われます。近隣の農民から、黒いロープ姿の男が出入りしているとの目撃証言を得ました」

「黒いロープの男…？ それです、フーケに間違いありません…！」

ロングビルの報告に反応するライズ。

「決まりじゃ。」

ではミス・ヴァリエール、ミス・ショルプストー、ミス・タバサの三名を以つてフーケ討伐隊とする。

第一目標は破壊の杖及び幻惑の羽の奪還、第二目標はフーケの身柄確保じゃ。

ただし、己が命を最優先とせよ。任務は果たしたが生きて戻れなんだ、などという結果は許さんからの。良いな？

ミス・ロングビルもフーケ討伐隊に参加し、案内役を務めるよう

「

『杖にかけて！』

かくて、フーケ討伐隊が結成されたわけだが…

何だろう、この違和感は。

何かがズレている。歯車がどこか噛み合わない。何かを見落としている。

脳内に警報が鳴り響いているのを感じる。

これまで戦ってきた経験からすると、この手の違和感を無視するのには危険。

この討伐行、何かあるな。まともに終わるとは思えない。

まだ具体的なことは見えてきていないが、俺は全力で警戒することを決めて、杖を掲げる主を見やるのだった。

side out

## 第九話 感想（後書き）

中々話を進められずになります。

長すぎるかなあ。でも会話文ばかりで進めるのは嫌いなのですよ。  
セリフ以外の表現があつて初めて深みが生まれると思うので。

その分スピード感に乏しい作品になってしまつことが多いあるんですね。  
ですが、どうかお付き合いくださいませ。

## 第十話 希望

side 人修羅

ゴトゴトと音を立てて揺れる馬車。

窓から見える景色に、俺は思わず見とれていた。

針葉樹林の緑の山、青く抜けるような空、穢れを知らぬ白い雲が、見事なコントラストを演出している。

辛く厳しい冬を乗り越えてようやく訪れた春を祝ぐような、生命力に満ち溢れた景色であった。

荒廃しきったボルテクス界でも、コンクリートに覆われた東京でも、到底見られない光景。

これがピクニックか何かだったら最高なのに、と思わずに入れないと。

「…どうしたの？」

隣に座るタバサが膝に乗せた本から目を上げて、俺に目を向け、小首を傾げる。

いつも思うが、本当に絵になる。

「いや、いい景色だと思ってな…。俺が前に居た場所では見られない光景なんだ」

「確かに、綺麗」

「ああ。ピクニックか何かだったら最高だなって思つてたところを」

軽くおどけて言つてみせる俺を見やるタバサの目に優しい光があったのは、多分俺の氣のせいではないはずだ。

「暢氣ね、これからフーケを討伐に行こう」

「いいじゃない。どうせフーケと対峙すれば緊張せざるを得ないもの、今のうちに氣を抜いておくのも悪くないわ」

軽く睨むように言つるイズに、それを宥めるキュルケ。

それを聞いたサイト君は溜息をつく。

「はーっ、盜賊退治か…氣が滅入るなあ」

「フフッ、気持ちは分かるが、まあこれだけの面子が揃つたんだ、滅多なことも無いだろつ。

自分の役目をキッチリ果たす、それだけを考えるんだな」

「…それもそうだな。

あのゴーレムを粉碎してみせたシンが居てくれるんだし、死ぬようなことも無いか」

頼りにされるのは悪い気はしないが、頼りにされすぎるのも困る。とはいえることを言つて彼を不安にさせる必要もないの、笑つて頷いておいた。

「そういえばアンタ、昨日の夜に魔法使ってゴーレム倒してたわよね。

アンタってメイジなの？杖らしいものは持つてないようだね

「いや、俺はメイジではないよ。魔法は使うが、メイジのように杖

は要らない。

まあ先住魔法みたいなものかな…精靈の力を借りるわけではない  
が…こんな風にな

そういつて、ブフを唱えて掌に小さな氷塊を作つて見せ、握りつぶすように消した。

「へえ…氷。昨日のゴーレムも凍らせて碎いてたみたいね。

”ワインディ・アイシクル”みたいなものかしら…風と水系統の魔法を使うつてこと?」

「いや、系統魔法みたいに複数の属性を重ねたりはせず…」

俺の魔法に興味を持つたようで、質問してくる一人。  
タバサやサイト君も口は開かないが、興味深そうにしていた。  
むつり黙っているよりはよほど有意義な時間だろ?。  
そんなことを考えつつ、俺は到着を待った。

⋮

⋮

⋮

「あそこです。あの小屋がフーケの拠点と思しき場所です

ロングビルが指差したのは古く小さな山小屋である。

左右に広がる森を貫く細長い草地、その森に寄り添うようその小

屋はぼつんと立っていた。

「さて、どうする?」

提示した質問にいくつか意見が重なり、サイト君が偵察役として小屋の様子を見てくることになった。  
中にフーケがいるかどうかの確認である。

他の者はここで小屋の周囲を見張りながら、サイト君の命図を待つ。

「サイト君、大丈夫だろ?とは思うが、小屋周辺に罠などが無いか警戒を怠るな。いいね?」

「ああ、分かった。行つてくれる」

俺の言葉に軽く頷き、剣の柄に手を置いて進むサイト君。

一端脇の森へ入り、木の幹を遮蔽物として利用しながら小屋へ近づいていく。

馬鹿正直に小屋へ直進するような真似はしなかつたか。正解だ。  
満足そうに頷いて、俺は小屋を眺めた。

サイト君はといふと、小屋の側まで到達して、まずは小屋の周りをぐるりと回った。

周辺にフーケがないか、見て回ったのだろう。

一回りして小屋の壁にそつと耳を当て、中に入人の気配が無いかも探る。

何も聞こえなかつたようで、手で丸を作つて手招きしている。

「…大丈夫そうね…行きましょう

ルイズの言葉に頷き、俺たちは小屋へと近づいた。

「小屋の周りにも中にも人の気配は無いぜ」

サイト君の報告に頷き、ルイズたちは軽く言葉を交わして各担当を決めた。

「…じゃあ、ミス・ロングビルとキュルケは周辺を警戒しつつフーケが居ないか探索。

私とサイトで小屋の外で見張り。タバサとシンが小屋の中を探る…つてことでいいわね？」

『了解』

声を揃えて了承した皆は、それぞれ持ち場に向かう。

「よし、俺が先に行く。何かあつたらフォローしてくれ、タバサ」

「任せて」

頷きあうと、俺は小屋のドアに手をかける。

軽く開いた後、足を踏み込むことなく数瞬ほど様子を見た。ドアを開いた直後、あるいは踏み込んだ直後が奇襲を受けやすいことを知っているからだ。

何が起きてもすぐ対応できるよう身構えながら、静かに足を踏み入れる。それに続いてタバサも杖を構えながら入って来た。

「…フーケはいないな。では破壊の杖と幻惑の羽の探索に移りつ

(二二)

またも頷きあつて、思い思いに小屋の中を探っていく。小屋の中は乱雑に工具やら木材やらが散乱している。どれも古いが、人がいた痕跡は確かにあつた。埃の積もり方が均一ではないのだ。

どころか、埃が払われたような痕も残つてゐる。

「最近になつて使われた、そんな痕跡は確かにあるな……」

そう呟いた俺の声に、緊迫感漂つタバサの声が重なつた。

「シン、これ

「見つけたか？ ……これは！」

「知つてるの？」

俺は、そこで見たものにわかには信じられなかつた。片方は俺が人間であつた頃に存在した品、もう片方は俺が悪魔になつた後に使つていた品だつたからだ。

「ああ……これは……」

答えようとしたところに、ルイズの悲鳴が重なる。

『キヤアツ！…昨日のゴーレム！？』

「むつ？…タバサ、出るぞ！先に行け！」

「分かつた」

小屋の外へ駆け出るタバサに続いて、破壊の杖と幻惑の羽を持った俺も駆け出した。

直後、小屋がゴーレムに踏み潰された。すぐに出でにおいて正解だったようだ。

「サイト君ーこれを一合図したら撃つてくれー！」

「二、二二つは…！？これが破壊の杖のかつー！？」

「話は後だ！タバサ、ルイズを連れて下がつて！サイト君もそれ持つて少し離れてろ！」

俺が指示を出すことにルイズが不満を言いたげな目を向けてくるが、状況が状況である。

腕を掴んで引き摺つていぐタバサと、近寄つてくるゴーレムの足音に反論を飲み込んだ。

それを見て軽く安心した俺は、改めてゴーレムに向き直つた。緩慢な動きで拳を足を繰り出してくるのを軽く避けつつ、俺はゴーレムの気を引くことに専念した。

状況は、余り良くない。

まずは味方と合流する必要があるのだ。何故なら、ここでゴーレムが現れたということはそつ遠くない位置にフーケがいるということを意味するからだ。

周りの探索に出たロングビルやキュルケがフーケと遭遇してしまうと、一対一で対峙するハメになる。

少し時間を稼げば、この異常事態を察してこちらへ合流してくれるはず。

ゴーレムの破壊はそれからでも遅くない。

今ゴーレムを壊してしまつと、フーケの手が空いて更なる行動を許すことにもなるのだ。

「何してゐのよシン！早くそいつ倒してよ、昨日みたいに……」

「今は時間を稼ぐ！まずはキュルケやミス・ロングビルと合流する必要がある！」

タバサ、二人を探してくれ！ライズ、サイト君、それまでは下手に動くな……」

「分かつた」

キュルケが向かつたであろう森のほうへ駆けていくタバサ。それを横目に見やつた俺は、サイト君に声をかける。

「サイト君！破壊の杖の使い方は分かるか？発射準備をしておいてくれ！」

「ああ、何でか知らないけど分かるぞ！任せろ！」

その返答に一安心して、俺は更にゴーレムの氣を引くべく、軽く攻撃を仕掛ける。

効果がないことは分かつているが、俺を無視してライズやサイト君のほうへ向かわれても困るのだ。

「シン！」

珍しく声を張り上げるタバサが、キュルケと二人で走ってきた。随分早かつたが、多分異常を察したキュルケが此方へ向かっていたのだろう。

「キュルケが来たか…タバサ…ミス・ロングビルはいたか…？」

(フルフル)

「チツ…いい加減時間稼ぎも限界だな。そろそろ決めるぞー・サイト君、準備はいいな！」

「おうー！」

サイト君が破壊の杖を構え、前方にいる俺を巻き込みますじゴーレムを狙える位置へ走り出る。それに合わせて、俺は腕を振りぬいた。

「ハツー！」

絶対零度。

昨夜は学院の敷地内だったから力を抑えておいたが、今度は全力である。

発動速度も冷気の濃さも規模も桁違いだ。

ビキビキバキバキと音を立てて、見る見るうちにゴーレムが凍り付いていく。

「…今だサイト君ー撃てーーー！」

「食らひえつーーー！」

飛びのいた俺と入れ違いになるよつこ、破壊の杖から一閃の煙が凄まじい速度でゴーレムへ向かう。

その正体を知っているのは俺とサイト君だけだわ。

「耳を塞げつーーー！」

後ろの三人はその声にすぐさま応じ、直後に爆音と爆風が俺たちを襲つた。

後に残るは、バラバラになつたゴーレム。うまくいつたようだ。

「ふう〜…やつたな！」

「凄いじゃないサイト！何で破壊の杖が使えたの！？」

「凄い威力」

「シンの氷の魔法も昨日とは比べ物にならなかつたわねえ」

日々に喜ぶ4人だが、俺は言ひほど樂觀していなかつた。そろそろ、フーケが現れるはず…。

「皆さん、遅れてすみません！」無事ですかー？」

息を切らせて走つてくるロングビル。

まさか、こいつが。

そう思つたが、警戒心を隠して応じておく。

「大丈夫、ゴーレムは破壊しました。

肝心のフーケはまだ見つかっていませんが、そっちには居ませんでしたか？」

「ええ、見つかりませんでした。ゴーレムの音を聞いて慌てて戻つてきましたの」

それにしては随分と遅い」登場だと思つたが、そんなことはおぐびにも出さない。

「へえ、それが破壊の杖と幻惑の羽ですか…ちょっと見せていただけませんか?」

「確定だな。

「サイト君、タバサ、渡すな!!」

「…チイツ!!」

俺の声に一気に形相を変えたロングビルが、破壊の杖と幻惑の羽を奪い取つてルイズを盾に取る。

「…チツ、間に合わなかつたか。やつぱりアンタがフーケだつたんだな、ロングビル」

事態の激変に、皆は驚きを隠せず対応できず「にいた。

「…まさかバレてたとはね。こつづいたんだい?」

「学院長室でアンタが報告した時から違和感を感じたよ。

第一に黒いローブ姿つてだけで男とは断定できなければずなのにアンタは男と報告した。

ストレートな嘘は裏返せば真実になるもんだ。

第一に、馬で四時間かかる」「へ朝から調査に出たにしては、アンタの帰りが早すぎた。

時間的に無理がありすぎるな。

第三に、こんだけ派手に「ゴーレムが暴れているのにアンタが戻つ

てくるのは遅すぎた。

しかも戻った直後に財宝を手に取ろうとする。ここで俺の疑いが確定した。

名を馳せた怪盗にしては、随分無理な行動を取つたもんだな、フーケ？」

「なるほどね…アンタみたいな餓鬼に見抜かれるなんてアタシもヤキが回つたかねえ。

しかし、こうなつた以上アタシが有利ぞ」

「そうみたいだな。

大方、盗んだはいいがあの二つの使い方が分からなかつたんだろう？  
これで破壊の杖の使い方は分かつたわけだ？もう一つ、幻惑の羽はどうすんだ？」

ニヤリと笑いながら言つてやるとフーケの目が一気に鋭くなる。

「アンタ…」いつの使い方を知つてるね？教えてくれないかい？」

チラリとタバサに目を向けると、」くんと頷く。教える、と言つて  
いるらしい。

「主人の了解も得たんだろ？さあ言いな！」

「いいとも。そいつは幻惑の羽ではなく、正しくは”セキレイの羽”というアイテムだ。

対象に羽を向け、相手が自分の虜になる様をイメージしながら念じれば効果が現れる」

「そうかい…ありがとうよ。じゃあ早速試させてもらおうか！」

羽をキュルケに向けて念じるフーケ。

『…私ハフーケ様ノ御意ノママニ』

開いた瞳孔で人形のような硬質的な声を発し、俺たちに杖を向けるキュルケ。

セキレイの羽は確実に効果が出るものではないが、どうやら外れ（当たり？）を引いたらしい。

「つ…！つよくも…！」

親友の変わり果てた様に驚いたタバサは、フーケにらみつけた。

「怖いねえ、そう睨まないでくれよ。心配ない、すぐに仲良く地獄に送つてやるや」

そう言つて今度は破壊の杖を俺たちに向けるフーケ。

背後のタバサが身を強張らせるのが分かつた。

「さあ、死になつ！－」

サイト君がやつたように引き金に指をかけて引くフーケ。  
だが、何も起こらない。

「何でだ、何で魔法が出ないんだいっ！？」

「残念だつたな、あれは杖じゃない、本当の名前は”ロケットランチャ一”。単発の武器さ」

サイト君の声に、フーケは動搖した。

「単発…？使い捨てってことかい！？」

何てこつた、せつかく盗んだのにもうゴミじゃないか！  
…だつたらもう一回あの羽を…って、どこ行つたつ、何で無いん  
だい！？」

「残念だつたな、あれはマジックアイテムじゃない。セキレイの羽  
は消耗品、一度使えば消える」

「…」  
「…」  
「…ええい、覚えといでつ！キュルケッ、こいつらを殺しなつ！！  
！」

『御意』

キュルケにそう命じて、フーケは恐怖に震えていたルイズを突き飛  
ばして背を向け、駆け出した。

こちらに杖を向けていたキュルケは、魔法の詠唱を開始する。

「チツ、タバサ！キュルケの相手を！俺はフーケを捕らえる！」

「…ツ！？分かつた」

駆け出したフーケの後を追い、俺は全力で駆け出す。

数秒で目標距離まで近づいた俺は、フーケに向かつて腕を振りぬく。

「ハツ！」

腕から発散された魔力が糸のように縋り合わされ、フーケへと飛ん

で絡みつく。

外部から魔力による干渉で四肢の動きを完全に奪う魔法、”シバブ  
ー”。

麻痺などとも違うこの状態を、俺は”BIND”状態と呼んでいる。  
その一番の違いは、鈍くても動けるか否か。

”PLAYE”状態であれば、非常に鈍いにしても動くことは可能だし、当たりやしないが魔法も使える。

一方、BIND状態は一切の行動が不能になる。マヒと違つて自然回復はするのだが。

「ぐつ……!? 体が動かない……何だいこれはっ！？ 何をしたああっ！」

棒立ちになつて喚くフーケを放置し、俺はJターンしてキュルケの元へ向かう。

ポケットから紋章が刻まれた石のような結晶体”ディスチャーム”を取り出して、キュルケへ投げつけた。

石は砕け、光が生まれる。

光は収束して、キュルケの体へと吸い込まれた。

「つ……あ……私、一体……タバサ、何で私に杖向けてるの？」

「ツ……キュルケ……！」

元に戻つたキュルケに安心したのだろう。思わずキュルケに抱きつくタバサ。

多分、変わり果てた親友に、同じく変わり果ててしまつた母を重ねて見てしまったのだろう。

もっと早くに”ディスチャーム”を使ってやるべきだったかもしない。

「すまんタバサ。もつと早くあの石を使っておけばべきだった…嫌なものを見せてしまつたな」

「いい…その代わり、後での口のことを教えて」

軽く首を振つて許してくれるタバサ。

そのくらいならお安い御用だと笑いかけて、俺は皆に呼びかけた。

「さあ、フーケを連れて学院へ帰るうか」

side out

side タバサ

帰り道。

往路と同じように窓から外を眺めるシンを、私は見ていた。

…シンなら、お母様を助ける手段があるのかも知れない。

サイトがギースコと決闘した後、シンは魔法らしきものを使って사이트の傷を治したように見えた。

今回、キュルケが幻想の羽でフーケに操られてしまった時も、何かのアイテムらしき石を使ってそれを治した。

あの石は使つてしまつたから消えてしまったようだけど、シンなら他にお母様を治す手段を持っているかも知れない。

心を壊され、人形に心奪われてしまったあの母様を元に戻す。  
私の悲願を叶えてくれるかも知れない。

(イーヴアルディの勇者…私だけの勇者…力を貸して)

帰つたら、シンに頼もう。

お母様を助けてと、頼もう。

彼なら、きっと応えてくれる。

私はそう信じている。

s i d e   o u t

## 第十話 希望（後書き）

第十話、如何だったでしょうか。

セキレイの羽は只の消耗品、宝にするにはショボいアイテムですが、相手を魅了するという効果はタバサの母の状態にも通じるのでストーリーに絡め易いのです。

幻惑の羽の正体、皆さん見抜けましたでしょうかw

では次回、お楽しみに。

## 第十一話（第一部最終話）

『月の一夜に約束を』

side 人修羅

居並ぶ教師陣の顔は、皆一様に明るいものだった。

「流石は我がトリステイン魔法学院の生徒だ！」

「教師として私たちも鼻が高いですよー。」

「貴方たちは我々の誇りですー。」

日々に装飾過多な美辞麗句を並べ立てている。  
正直、俺としては虫唾が走るのだ。

先入観の上に胡坐をかいた油断を突かれ。

保身を第一とした対応をし。

ツケを自ら払いにいく気概もなく。

あまつさえそれを守るべき生徒に押し付ける。

ツケを払えなければ生徒に責任を押し付ける氣で居た上に。

払つたことが分かればそれが自分の功績であるかの如く過剰に誇る。

人の醜さの一端が、ここには確かにあったのだ。

お前らが言つていいセリフじやないだろ？、と俺などは思うのだが…

「…ま、黙つといでやるか…」

「…？」

「ああ、いや何でもない。気にするな」

吐き捨てるような呟きが聞こえたのか、タバサが此方に目を向けてくる。

そんなタバサを見ていると、嫌悪感も薄れてくるのだ。

この子が、また俺の友人たちが無事だった。

俺としてはそれで充分であり、第三者による贅辞など雑音に過ぎない。

この子達を見ていると、人間もまだ捨てたモンじゃないと思えてくるのだ。

「さて……ミス・ヴァリエール、ミス・ツェルブスター、ミス・タバサ。

本当に良くやつてくれた。

お主ら三人には、王宮からシユヴァリエの称号<sup>セイウノヒョウ</sup>が授与<sup>セイフ</sup>されることが検討されておる。

ミス・タバサは既にシユヴァリエ号を持つておるから、水精靈勳<sup>オンドィーヌ</sup>章が授与<sup>セイフ</sup>されることとなろうがの」

「あの……サイト君は、何も無いんですか？」

「（ニヒツ）一番貢献したのは、シン」

ルイズがサイト君の、タバサが俺の功績をそれぞれ挙げてくれるが、無情にもオールドオスマンは首を振った。

「二人は貴族ではないからの」

「タバサ、俺のことは気にするな。皆無事だった、それで充分だ。

大体、貴族号や勲章なんぞ貰つても俺では持て余すだけだからな

「そういう、ルイズも俺のことは気にするなよ。

…ところでオールドオスマン、褒美をくれとは言いませんが、一つだけ後で質問に答えて欲しいんですが…いいでしょうか？」

謝絶する俺とサイト君だったが…サイト君は何かオスマンに用事が

ある様子。

俺も少し気になるな。

「俺もサイト君と同じじく聞きたいことがある。多分内容はサイト君と同じだらうが、同席させてもらっても構わないか？」

「いいじゃねえ、では一人は残りなさい。

…さて、今日は佳き日じゃ。

フーケを無事に捕らえた日じゃが、お詫え向きといつべきか、今夜はフリッギの舞踏会じゃからの。

三人とも、身支度をするがよからぬ。今から急げば夜には間に合

うじやろうからの」

「ああっ、忘れてた…早くしないと間に合わない…失礼します

つ…」

「私も急がないと…失礼します！」

オスマンの言葉に血相変えて部屋を飛び出すルイズにキュルケ。タバサはじつといひながら見ている。

「タバサも先に戻つてくれ。話が済んだら俺もすぐにいくから

(ノクツ)

頷くと、学院長に無言で一礼して彼女は部屋を出て行く。さらに学院長はその場に居合わせる教職員達にも退室を促し、部屋には俺たち三人だけとなつた。

「 わたし... これまでのやく話ができるの。」

サバニ君 ジバ君 とくな質問じゃなか

あの破壊の杖に関してです。アレは俺やシンが元々居た世界にあった武器です。

一体どこで手に入れたんですね？」

「幻惑の羽も同じくだ。アレは俺が元いた世界……といつてもサイト君の居た所とはまた別だが……にあつた品。同じものを今俺も一つ持つてゐるが、これを一体どこで？」

話を聞いたオールドオスマンは田を剥いた。  
そして、昔を思い出すように遠い田をして、語り始めゐる。

■ ■ ■ ■ ■

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

「…遭遇した一二頭のワイバーンのうち一頭を破壊の杖で、もう一頭を幻惑の羽で無力化した者がいたと…」

「そいつはもう死んでいる上にどこから来たかも分からないとなる

と、帰る手がかりにはなりそうもないな。…気を落とすな、サイト君

「ああ…チツ、せっかく帰る手がかりを見つけたと思つたの…」

「すまんのう、あまり役に立てんで。時に、良い機会じや。一人のことも教えてもらえんかの？」

申し訳無さそうな顔をしたオスマンは、ついで好奇心を湛えた目を向けてくる。

多分、サイト君の剣の腕や俺の力に関してなのだろう。

⋮

⋮

「…俺が伝説の使い魔ねえ…正直実感沸かないよ

「ハハツ、だろうなあ。しかし、そうなると君がギーシュに勝った時のあの動きには説明がつく」

学院長室を辞した俺たちは、一人連れ立つて女子寮へ向かっていた。  
さつきの話が、やはり話題となる。

後で思えば、秘密の話をこんな風に話すのは無用心極まりないのだが…

そんな警戒心も忘れるくらい、驚いていたのだろうか。

「… そ う な ん だ よ な あ … し か し 、 シン の こ と も 驚 い た。 ま さ か 悪 魔  
に さ れ た 人 間 な ん て …」

「 心 は 一 応 人 間 だ、 気 に す る な。 あ あ、 言 つ ま で も な い が、 他 言 は  
し て く れ る な よ? 」

「 僕 も 君 の 事 は 誰 に も 言 わ な い か ら 」

秘 密 の 共 有。

戦 い に 生 き て い た 頃 の 僕 に は 考 え ら れ な い ほ ど の 甘 い 行 動。

な の に、 何 故 だ ろ う。

こ れ ほ ど 胸 が 温 か い の は。

心 许 せ る 友 が 居 る こ と を 喜 ぶ 気 持 ち を、 僕 は 久 し ぶ り に 味 わ つ て い  
た。

s i d e   o u t

s i d e   タ バ サ

二 人 で 会 場 へ と 向 か う 道。

舞 蹚 会 に な り 興 味 は 無 か つ た の だ が、 何 故 か 今 年 は 参 加 し よ う と 思  
え た。

着 る 事 な ら ど あ る ま い と ク ロ ー ゼ ッ ト の 奥 に 仕 舞 い 込 ん で い た 黒 い ド  
レ ス を 身 に ま と イ。

大 急 ぎ で 調 達 し た 男 性 用 の 正 装 を シン に 着 さ せ。

私 た ち は 連 れ 立 つ て 会 場 へ と 向 か つ て い る。

言葉は、無い。

何だらう、この気持ちか。  
何故私はいつも自分のことを気にしているのだらう。

ドレスは似合っているか。

凹凸の凹に子供のようなこの体を嫌ったことはないけれど、今は少し恨めしい。

つらつらと考え事をしてふと田を前へ向けると、見えるのは使い魔の背中。

シンの背中はこんなに広かつただらうか。

シンの背中はこんなに頼もしかつただらうか。  
私は少し足を早め、シンの隣に歩み出る。

会場のドアを前にして。

私の心は、確かに躍っていた。

side out

side 人修羅

二人で会場へと向かう道。

舞踏会になど出たことはなかった。

普段は居心地が悪そうで出たいなどと思わないはずだが、何故が出

てみてもいいと思えた。

タバサに渡された正装を手間取りながら身につけて。  
俺たちは会場へと向かっている。

言葉は、無い。

何だらうこの気持ちは。

何故俺はこうもタバサのことを気にしているのだろう。

ドレスを身につけた、俺の御主人様。

黒いドレスによって強調された白い肌は眩しく、恥らうように頬を赤らめた彼女は本当に可愛く。

俺は顔が赤くなるのを感じ、彼女の姿を見られなかつた。

タバサはこんなに綺麗だつただらうか。  
タバサはこんなに可愛かつただらうか。  
後ろからついて来る足音が少し早まり、タバサが俺の横へ歩み出でくる。

会場の扉を前にして。

俺は高鳴る心を抑えながら、不器用に左腕を差し出した。

side out

side タバサ

シンが私に腕を差し出してくる。

不器用な、それでいて優しいエスコート。

恥ずかしさを抑えながら、私はそっとその腕を取った。  
歩幅を合わせてゆつくりと会場へ踏み込んでいく。

彼がこちらを見ようとしないのが少しだけ不安だった。  
けれど、彼が私を気遣ってくれているのは確かに感じる。

不器用に歩幅を合わせたり。

不器用に肘の高さを合わせたり。

決して巧くはない、しかし優しいその所作は、たしかにこゝに言つてくれている。

(歩きづらいか、タバサ？腕は疲れていないか、タバサ？)

大丈夫、と応えるように、私はシンの腕を少し強く抱え込む。

普段は邪魔にしか思えない明るい照明が、今日はとても嬉しく感じた。

side out

side 人修羅

不慣れで下手と分かつていて、それでもタバサをエスコートし、  
俺たちは会場へ入る。

余りに綺麗なタバサを直視できないままに、俺は足を進めた。

声をかけてくる友人たちはみな一様に笑顔であり、リラックスした様子だ。

それに解されるように、俺の硬さもすこしは取れたようだった。

「…いか、タバサ？」

(…)

「そうか」

料理に手をつける。

何と言つていいかも分からぬまま、普段の食事時と同じような言葉をかける。

未だに、タバサを直視できない。

舞踏会は、気づけば大詰め。

そろそろ舞踏曲の演奏も終わる。

俺は少し、後悔していた。

こんなに綺麗なタバサを相手に、ダンスの一つも踊れない。結局こんなに綺麗なタバサを、俺はろくに見てもいいない。大して話もできなかつた。

そんな俺に、声がかかる。聞きなれた、しかし俺が誰より好きな声で。

「…踊つて、くれる？」

その時俺は初めて彼女を真正面から見ることができた。  
そして、なけなしの勇気を振り絞つて、こう答えたんだ。

「喜んで」

s i d e o u t

s i d e タバサ

不器用に私の腰に回された手。

不器用で不慣れなステップ。

けれどその全てに、私は喜びを感じていた。

言葉は、無い。

けれど彼と見つめあうその視線だけで、全てが通じ合つ気がした。

人並みの幸せなどとうに奪い去られていたけれど。

私にも、勝ち取れた。

大切な人とダンスを踊る。そんなささやかな、けれど大切な幸せ。

私は今たしかに、それを噛み締めている。

今だけは、全てを忘れていたい。

(私の勇者… イーヴァルティ…)

始祖ブリミルよ。

この世に生まれて初めて願います。

どうかこの幸福を、一秒でも長く

side out

不器用な、しかし幸せに溢れたダンスを終えて。  
酌み交わしたアル「ールを覚まそうと、主人を使い魔は屋上から夜  
風に当たつて月を見る。

「終わつてしまつと、寂しいもんだ」

「… そう、でも楽しかった」

「ああ、俺もだ…」

「… 私のドレス、似合つてない?」

「… ああ、とつてもよく似合つてない… あまりに綺麗すぎで、直視  
できなかつたくらい」

「… ありがと」

しづかに、しかし万感の想いを込めて交わす言葉に、嘘偽りは何一  
つ無い。

少女の瞳は潤み、そして頬は赤らんでいる。

少年は、吸い込まれるように顔を寄せた…

月は今、重なった。

⋮

⋮

⋮

「ねえ、シン…」

「うん?」

「私のお母様のこと、覚えてる?」

「ああ、前に聞いたな、覚えているよ」

「お母様のこと…助けてくれる?…シンなり、できるかも知れない」

優しく、それでいて力強い抱擁の中で、少女は少年に懇願する。祈るよつこ、願うよつこ。

『ああ、任せておけ』

答える少年の目には確かに意志と決意の光が。

聞いた少女の瞳には確かに喜びと感謝の光が。

少し火照つた一人の頬。

夜風は、優しく撫でるように

## 第十一話（第一部最終話）『月の一夜に約束を』（後書き）

舞踏会のシーンはちょっとした挑戦でした。

普段の理屈っぽさや状況描写をなくし、心理描写を可能な限り盛り込んで印象的に仕上げようと頑張つてみました。

私が描くタバサで萌え死んでくれる人がいれば本望です。ちなみに私も書いて萌え死にました。

最後はあえてどちらの視点とも明示せず。

第三者視点のように見えて、実は一人で共有してる視点…って風にしたつもり。

そして、今日が一人の本当のファーストキス。心情的にね。ちなみに俺の嫁を非処女にはしませんよ（ぶち壊し）

縁が無いから…という恋が描けるのかななんてボーッと思いつつ後書き書いてます。

以上を以つて、第一部終了とさせて頂きます。  
もちろんまだまだ続きます。また次回。

## 第十話（第一部 パート一〇） 隠謀（前書き）

第一部が終了し、10万PV＆ユニークアクセス1万を達成。  
感謝、感謝でござります。ありがとうございます！

とある國の王宮。

白を基調とした内装で統一された玉座の間。

入り口と玉座を結ぶ直線を中心に左右対称に設計されたその間は、清潔感にも溢れた明るい雰囲気でありながら、奇妙なほどに冷たく無機的でもあった。

一段も二段も高くなつた床に据えつけられた玉座。

それは本来、座るものではなく背負うもの。

血の海に浮かび、血によつて購われるそれは、しかし汚れの一つすら見当たらない。

少なくとも表面的には、だ。

しかして、そこに身を置く彼がそれを理解しているかどうかは定かではない。

side ???

この主に召喚されて暫くが経つた。

最初に来た時は随分と面食らつたものである。

時代遅れな”神授王権”<sup>システム</sup>によって統治される國。

それは聞いたこともない開闢伝説に端を発するものであった。

始祖プリミルから生まれし四王家。

まさか私がその四王家の一つを束ねる王の使い魔にされるとほ。使役する側には立つても、使役される側に立つたことはない。

とはいって、伝も常識も欠けた私がこの世界で生きるには、庇護を受ける以外に道は無かつたのだ。

幸いにも主を名乗る男は王。

快樂主義を繪に描いたようなその振る舞いは到底王たる資格が無いようにも見えるが、その実、一種のマキャヴェリズムを体現する統治を行つてゐる。

清にはえしく濁に塗れた王。

しかしそれを否定する氣も無い。

私がここですべき」と。

それは、まだ分からぬ。

それを見極めるべく、今しばらくなこの男に従おつ。

「…何を考えてこる?」ゴーディ

「…その呼び方をどうすれば止めさせられるかを考えていたのだ、ジョゼフ」

「ククツ、気に入らぬか?」

「私はギリシャ神話に語られる詩や音楽の女神とは違つ。

そのようなものに興味を持たぬ私にその名が相応しいとは思へん」

Muse。ギリシャ神話における知的活動を司る女神たちの総称。後に詩歌を司る女神として信仰された存在である。

当然、ハルケギニアにそんなものは無いが。

「ギリシャ神話…聞いたことの無い言葉だな。お前の居た世界の伝承か。

いずれ機会があれば聞かせて貰うとしよう

異世界から来たと言う私に酷く興味を持つてゐるらしいこの男。

”無能王”ジョゼフ。ハルケギニアの大國を統べる王。

始祖の血を引くこの男が無能と称される所以が、魔法を使えぬことにある。

しかして、それは二つの意味で間違つてゐる。

第一に、王に必要な資質は魔法ではなく政治能力及び対外折衝力、そして国を統べる統率力である。

第二に、この王は魔法を使える。ただし、ハルケギニアにおいて酷く異質な形においてであるが。

それでも無能の名に甘んじるこの男を、私はどうも理解しかねていた。

何を望んでいるのか、何がしたいのか。

それが未だに分からぬのだ。

「それはそれとしてな、ミューズ。

お前にはしばらくアルビオンへ向かつてもらひ

「アルビオン…確かに空に浮いているとかいう巫山戯た島国だつたな。そこへ出向けといふのか。何のためにだ?」

「レコン・キスタという組織が、今アルビオンで暗躍してゐる。聖地奪回及び貴族による共和制を旗印に掲げた宫廷革命運動を推進する組織だ。

遠からずアルビオン王家に反旗を翻す。内乱状態になるだらひ」

レコン・キスタ（言葉の意味からすればレ・コンキスタと切るのが正しいが）。

地球上においてもその名は存在する。

8世紀にイスラム教徒によつて征服されたイベリア半島を奪回すべ

くキリスト教徒が起こした運動。

「奪回」という点で奇妙に共通したこの如く、思わず内心で苦笑してしまう。

だが、そんなことはおぐびにも出れない。

「破壊工作でもしてこと? あるいは潜りこんで内偵か?」

「まさか。手伝つて来こと書つのだ」

「…理解できんな。お前は始祖の血を引く王であらう。  
であればアルビオン王家はお前の親戚に当たるはず。むしろ王家  
側を助けるのが筋ではないのか」

「王家もレロン・キスタもビーヴィーも良い。せいぜい楽しませて欲し  
いと思つだけだ。

面白いではないか? 理想を掲げる画者が名誉と誇りと悲願の名の  
下に殺しあう喜劇。

それを踏みにじるのはどれほど痛快であろうなあ? クククッ…」

…やはり、この男は壊れてくる。

だが、私に言えたセリフもあるまい。

「…いいだらう。

アルビオン王家もレロン・キスタも、お前の掌の上でせいぜい躍  
らせてやうではないか」

今は、この男に従つておぐ。

それにガリアだけではなくアルビオンを見ておくのも悪くはない。  
この世界が本物のまま良いのか、この世界が破滅へ向かって  
いないか。

：場合によつては、ハルケギニアの胎動を見ることにならう。

ガリアの、受胎。

この男にはまだ話していないその陰謀は、もしかしたら彼の眼鏡にかなうかもしだれぬ。

創世など趣味ではないだろうが、面白ければ何でもいいという男だ。いずれ、話してみるか。

ただし逆らうならばすぐにでも殺せるよう準備を整えた上で、だ。

世は押しなべて陰謀が渦巻く地獄。

ミヨズニトニルンたることを強制された男、氷川。

その目には、ただ冷たい光だけがあつた。

side out

## 第十一話（第一部 Part 010ague）陰謀（後書き）

ジョゼフ及びミョズートニルン登場。

今回は第一部プロローグなので少々短めです。

さて、ミョズートニルンに氷川を置いてみました。

ガイア教幹部にして宗教学や史学に精通する彼を表現すべく、今日はWikipe diaや広辞苑に少々活躍してもらいました。それにしても、これにしては薄い気もしますけど

さて、今後彼らがどうなるのか。

いよいよアルビオン編へと突入します。

では、また次回。

## 第十二話 行幸

side 人修羅

「四大系統にはそれぞれ違つた特色があるわけだが…」

欠伸をかみ殺しながらまらない授業を聞く。

いや、これを授業と称するのは授業といつて葉に対する圓流ではないかとすら思つ。

何故なら…

「ミス・ツールプストー。最強の系統は何だと思つかね？」

「もちろん火ですね。全てを破壊し、焼き尽くす火の系統こそ戦闘における最強だと思いますわね」

ギターの脣ぎつたような視線と口調（別にギターなどと寒いギャグを言うつもりはない）。

さらりと受け流して持論を展開してみせるキュルケ。

血色の悪い顔で上目遣いにニヤリと笑みを浮かべつつ見ていたギターの脣がめぐれ上がつた。

「違うな。最強の系統は風だ。風は全てを吹き飛ばす。火すらもな」

これが、授業ではないという所以。

授業や講義などではなく、単なる自系統の自慢に過ぎないのだ。もちろん他の教師にも自分の系統に対する贔屓は多少なり見受けられるのだが、それでもここまであからさまではなく、少なくとも表

面上は四系統を平等に扱っている。  
が、ギターにそれは一切無い。

「風の最強たる所以を証明してみせようではないか。

ミス・ツールプストー、君の自慢の火で私を攻撃してみたまえ」

「こんな教室の中で、よろしいんですか？やるからには全力でいきますけど？」

「かまわんよ。思い切り来るがいい」

キュルケの指摘は正しい。戦闘行為に属する実技を教室内でやるなど正気の沙汰ではないのだ。

それでもなお強行しようとするギターの気が知れない。

風のスクウェアなどと言っている。

確かに魔力は高い方なのだが、とても戦いなれているとは思えない。あの目、あの所作、あの言動。

命をいたぶつたことはあっても、命のやり取りをしたことは無い人間だ。

「行きますわよ……”フレイム・ボール”……”

「……”攻撃力低下魔法”<sup>タル・ンダ</sup>……”

「来い！……”ウインド・ブレイク”！」

衝突した炎と風は、互いに互いを打ち消しあった。  
教室内にかるいどよめきが起こる。

「…相打ち、ですかしら」

「そ、そのようだな… 中々やるではないか。だが私は本気を出してはいなかつた」

「本気を出したらさぞお強いのでしょ? どうせならフーケ討伐で示して欲しかつたですけれど」

「うべり…」

こつそりタル・ンダでギターの魔力を削ぎ落としておいたから相打ちで済んだが、実際打ち合えばキュルケは吹き飛ばされてしまう。

ギターは気づいていないようだが、キュルケはちらりと俺の方を見やつた。

俺の介入に気づいている。

この時点での実力差は知れる。単純な魔力の差が実力の差ではないのだ。

しかし、こうして魔法勝負ではなく口での勝負になると、ギターにはご愁傷様としか言えない。

口での勝負でキュルケに勝てる者を俺は知らない。それほどキュルケは口が上手いのだ。

「… ありがと」

「ああ。怪我はさせたくないからな」

こちらを見て言うタバサに、そう返しておく。

俺の介入に気づいたのは、このクラスではキュルケとタバサだけらしい。

他に俺の方を見たもの、気づいた素振りを見せた者はいなかつた。

「いいか、風の系統とは……！」

ギトーが必死に風最強論を展開している。  
キュルケは興味を無くしたようだ。

「失礼しますぞ！」

不意に、教室に響く声。

見ればコルベールが入り口に立っていた。  
…何故か、金髪のカツラを頭に乗せて。  
生徒もギトーも、絶句している。

「…「ホン。ミスター・コルベール、授業中ですよ？」

「本日の授業は全て中止と相成りました。

今日は佳き日であります。

我がトリステイン王国がハルケギニアに誇る一輪の可憐なる花、  
アンリエッタ姫殿下が、本日当学院に行幸なさいます。  
皆さん、日頃の研鑽の成果を姫殿下にご覧頂くまたとない機会で  
すぞ！

すぐに準備をするのです。身なりを整え、杖をよく磨いておくよ  
うに！

なんたる僥倖！行幸だけに！

(…寒い…)

それは、コルベール以外全員の共通した感想だつただうつ。可哀想  
に皆揃つて固まっている。  
まさか言葉だけでクラスを凍りつかせるとは…！

氷結魔法を得意とする俺にもできない芸当。コルベール、恐るべし。

当の最強氷結魔法の術者は、渾身の自信作が冷たい反応で迎えられたのをショックに感じたのか、かるく身じろぎした。  
静まり返った教室に響く、カツラの落下音。

「…滑りやすい」

タバサがボソッと言つた一言に、教室内が爆笑した。  
ギターすら後ろを向いて肩を震わせている。  
キュルケなど腹を抱えて机を叩いて大笑いしている。

「ええい黙りなさい」の小童共！…さつやと白室へ戻つて準備しなさい！」

「で、では…クククッ、本日の授業は…ふふつ、」、これまで…フ  
フフッ…ゲホッゲホッ」

顔を真っ赤にして怒鳴るコルベールと、真っ赤な顔で必死に笑いを堪えて律儀にも授業終了を宣言するギター。

生徒達はそれを見て、口を押さえたり肩を震わせたりしながらぞろぞろと教室を去っていく。

一人だけ列を離れたキュルケが此方へ歩み寄ってきた。

「…シン？」

「ああ、キュルケか。どうした？」

「どうしたじゃないわよ。何で手出したりしたの？」

「放つておいたらキュルケが負けていただろ？からな。怪我をさせたくなかった」

「うぐつ……ハツキリ言わないでよね……。  
シンの加勢を受けても相打ちだったの、ちょっとショックだった  
のに……」

ちょっとムッとした顔で声をかけてきたから、怒られるかと思ったのだが…

やはりキルケは冷静な判断力を持つているようだ。実際大して怒つてはいないようだつた。

「まあ、とりあえず礼言つとくわ。ありがとね」

いいさ、別に頼まれたわけでもないしな」

フツと笑つて背を向けるキュルケを見送つて、俺もタバサと共に寮へと戻つた。

「アレがアンリエッタ姫か？」

二三三  
一角馬一頭立ての豪奢な馬車を降りた白いドレス姿の女性。

確かに可憐な花と称されるだけはあって、相当な美人である。

容姿端麗、スタイル抜群。

濃いすみれ色のボブヘアと、白い肌やドレスの対比が眩しい。表情や所作の一つ一つから高貴さ、優雅さが滲み出でている。性格など知りようもないが、「深窓の姫君」を地で行くおじとやかな人にしか見えなかつた。

だが、今後一国を背負つていかねばならない人物として見ると、世間知らずのお嬢様の域を出るものではないと感じた。純粋無垢で穢れを知らぬその目には、物事の暗部を見てきた者には決して出せない光があつたのだ。

「…気になる？」

姫を見ようとせず、横で本を開いていたタバサが問うてくる。心なしか、不安げな光を湛えた目で。

「俺が気にするのはどうやってタバサを守るか、それだけさ」

軽くおどけるように言つてやる。

「…そう」

短い返答を返してまた本に目を落としたタバサの顔に照れたような色が浮かんでいたのを、俺は見逃してはいない。

「しかし…さすがに一国の姫の行幸ともなると、護衛の腕は大したものだな」

「…あの帽子を被った髭の人、強い」

「やはりタバサもあの男に田をつけたか…ああ、あの男は相當に実戦慣れしている」

「…シンの方が強い」

此方を見ないで言つタバサの顔には、やはり照れた様子が見て取れる。

俺を信じてくれるタバサの言葉につい嬉しくて笑いそうになるが、そんな様子は出さずむらつと答えてみせた。

「ああ、俺は誰が相手でも負けんぞ」

そう答へ、件の男に田を向けた刹那…

俺たちは、確かに互いを見ていた。

side out

## 第十二話 行幸（後書き）

第一部を終えて、心おきなく『レタバサを描く』ことができます。  
今回はちょっと抑え気味かなあ。

タバサのキャラを壊すことなく存分に『レタバサ』るのは難しいですね。  
でも嫁だから頑張れます。

ではまた次回。

第十四話 追跡（前書き）

ちょっと短かつたかも知れません。

## 第十四話 追跡

side 人修羅

姫の行幸から一夜。

VIPが来るということで厳戒態勢にあつた魔法学院は、大きな問題も無いままに朝を迎えていた。

昨夜はこそそこそ動いていた人物がいたりして女子寮が少々騒がしかつたのだが、別段敵意など感じず危険とも思えなかつたので放置しておいたのだ。

それに、姫の護衛には魔法衛士隊の人間がいる。

昨日見たあの帽子の男はその魔法衛士隊の一つ、グリффォン隊の隊長なのだそうだ。

実際、大した腕だつた。あの男がついているなら滅多なこともないだろう。

大体姫を守るのは俺の仕事ではないのだし…。

そう思つて、タバサには何も言わなかつた。

少々騒がしいことくらいはタバサも気づいていただろうけれど、彼女は何も言わなかつた。

そう、問題は無かつたのだ。姫の護衛という一点に関して「だけ」だが。

(…結局一睡もできなかつた…)

俺の睡魔を完全に叩き潰してくれた原因が、今俺の左腕を抱き込むようにして寝息を立てている。

『…今日からここで寝て

『 いじでつて…ベッドでか？タバサはどうで？』

『 リー』

『 …一緒に寝ると…？』

俺も半人半魔の存在とはいえ、まだ心は人間のつもりだ。女性に対する興味は残っているし、何よりタバサは可愛い。付き合つてもいない女性と寝床を共にするなど…。そんなようなことを言つてみたのだが…

『 …私と一緒に寝るのは…嫌？』

：断れるワケが無いだろう。

目を潤ませて不安げな顔で上目遣いに懇願されたのだ。

『 分かった、一緒に寝よう』としか言えないではないか。

左腕に感じる女性の体温、ふわりと香る女性特有の甘い香り。慣れれば落ち着くのだろうが、生憎俺はそういう経験が無いのだ。まあ、ピクシーやネコマタに頬にキスされたことがあるくらいか。サキュバスも夜な夜な迫つてきたものだが、手は出していない。悪魔化する前だって別段女性にモテていたわけでもないのだ。経験の浅い俺に、この状況は刺激が強すぎた。

とはいえ、悪いことではない。

部屋の床で浅い睡眠を繰り返していた俺は、知っていたのだ。タバサには、定期的に悪夢に魘うなされる夜が来ることを。

父母を奪われ戦いに放り込まれた少女だ、悪夢を見ない方がおかしい。

しかし、今夜は俺が横にいて安心できたのか、魔された様子はなかった。

(…まあ、俺も一晩眠れなーくらいならビリヒーともないし、な)

そう納得することにして、タバサを起こさないよいつとベッドから出る。

パジャマ姿の主人は、今も健康的な寝息を立てている。

そつと肩まで布団をかけなおし、俺は洗顔用の水を汲みに部屋を出た。

⋮  
⋮

部屋に戻ると、気配を感じたのかタバサが起き出していった。

「おや、起きたか。おはよう、タバサ」

「…ん…おはよう、シン…ふわ…」

可愛い欠伸を一つくれて、寝ぼけまなこで此方を見る。

こんな姿を見たことがあるのは俺かキュルケくらいだろ?つか。  
微笑ましい姿に、ついつい俺も笑顔になってしまつ。

「よく眠れたか？」

「……うん……お父様とお母様の夢を見た……」

「そうか、いい夢だつたみたいだな。……む、水だ。顔を洗つて着替えるといい」

「……ありがとう」

顔を洗い始めたタバサをちらりと見やつて、クローゼットから着替えを取り出し、隣に置いてやる。  
そこまで済ませ、俺はそつと部屋の外へ出た。  
さすがに女の子の着替えを凝視する趣味はないのだ。

.....

「シン、おはようー。タバサはー?」

「おはようキユルケ。

タバサは中で着替えてるが、どうしたんだそんなに慌てて?」

廊下でタバサを待っていたのだが、キユルケが慌てた様子で此方へ走つてくる。

その表情に危機感は見られず、どちらかといつと好奇心に輝いているようだった。

別段危険なことではないのだろうと判断し、一いつひらも軽く返す。

「実はタバサとシンにお願いがあつてね……」

「お願い、ねえ。タバサがもつじき着替え終わるから、やつしたら  
中で聞こつか」

「ええ、悪いわね」

(がちやつ)

「…シン、終わった…キュルケ？おはよっ」

「ああタバサ、おはよっ。着替え終わったみたいね。  
ちよっとお願ひがあつて来たのよ…入つてもいい？」

(いべつ)

三人連れ立つて部屋に入る。

「実はね…」

……

……

「ルイズたちがギーシュと魔法衛士隊隊長と一緒に立つて学院を出て

行つたと。

「面白そつだからそれを追いかけたいと、そつこいつとか？」

「そうーそうなのよ！

ルイズとダーリンとギーシュだけならまだしも、魔法衛士隊隊長までついていくなんてただ事じやないわ！

それに、ルイズとあの隊長さん、なうんかありそつなのよねえ…ツェルプストーの血が疼くのよお

」

「…程ほどにな。…で、タバサ、どりすむる？」

「…構わない

「さすがタバサッ！ ありがとーうー！」

破顔して抱きついてくるキュルケに、くすぐったそうな、しかしここか嬉しそうな表情を僅かに見せるタバサ。  
多分この表情の変化に気がつく者はそつ多くないだろ？

「じゃあ俺のセイリュウで追ついとこなるな。

馬とグリフォンだらう？

グリフォンのスピードは知らないが、馬を置いていつたりはしないだろ？し、馬の速度は超えないな。

朝食を取つて支度を整えてから出ても充分追いつけだらう

「そうね、今回はちゃんと方角は確認してるし。ラ・ロシェール方面へ向かってたわ

そう確認しあつた俺たちは、食堂へと向かった。

前と同じく、正門を出て近場の林へ踏み入つて、セイリュウを召喚する。

「…マタ馬ノ代ワリヲセヨト言ウノカ、主…」

「すまんな、セイリュウ。頼むよ」

「」めんねえ、今度美味しい肉やお酒買つたげるから、勘弁して頂戴

「…承知」

撫然とした様子のセイリュウを宥めすかす俺とキュルケ。肉と酒に釣られたのか、案外簡単に了承してくれた。

：

「相変わらず速いわねえ

」

「…気持ちいい。読書に最適

……

セイリュウは速い上に魔力で風をある程度遮断してくれている。  
多分上に乗っている俺たちを気遣ってくれているのだろう。  
おかげで、強風に煽られて振り落とされたりする心配はない。  
羽ばたいて飛んでいるわけでもないから、揺れもほとんど無いのだ。

「…テ、何処へ飛ベバ良イノダ、主？」

「ああ、あつちよあつち。南ね」

「だそりだ、頼むよセイリュウ」

「…承知」

吹き抜けるそよ風に身を任せ、俺は少し眠った。

side out

## 第十四話 追跡（後書き）

今回も「テレタバサ織り込みました。

一緒に寝るのはまあゼロ魔SISじやありがちなシチューですが、やっぱ王道は入れとかないとね。

相変わらず進行遅いですが、お付き合いください。

＜追記＞

ラ・ロシェールの方角を北東と書きましたが、原作設定によるリストeinの南側だそうです。

修正しました。

では、また次回。

## 第十五話 暗躍（前書き）

お気に入り登録数200件突破。  
感謝、感謝でござります！

## 第十五話 暗躍

side 人修羅

速度を落とし気味にして飛んで行く仲魔。

俺はその背に跨り、ぼーっと前を向いていた。

流れ行く雲、青い空。

地平線とのコントラストを田で楽しむ。

緩やかに曲線を描いていた地平線はしかし、今は大きく隆起した姿に変わっていた。

「シン、前に見えるあの山、あそこがラ・ロシェールよ」

「…港町だよな？何で山なんだ？普通海沿いだと思つんだが…」

キュルケの言葉に疑問を呈す。

その言葉に、キュルケは表情を変える。

効果音をつけるなら「きょとんっ」が望ましい。

「え？何言つてるのよ、海より山に港を置く方が効率いいじゃない」「…根本的な認識や常識からして大きな齟齬があるようだ…」

言葉は通じるのに話が全く通じない。

こういう場合は会話の前提となる基礎知識、基礎認識の部分に大きなズレが含まれているものだ。

そこをまず修正しないとどうにもならない。

「…まあ、行つてみれば分かるかな」

「そうね、この港や船のこと良く知らないみたいだし。  
もしかしたらシンのビッククリした顔見れるかも 説明しないでお  
くわ

「…悪趣味」

ボソッとつぶやくタバサ。しかし…

「何よー、シンの驚いた顔見てみたくないの?」

「…見たい」

少し俯き加減に、しかしちょっと顔を赤らめて言つタバサを見て、  
キュルケは破顔した。

「でしょー」

「…じゃあせいぜい大袈裟に驚くとするかな」

そんな一人の様子に思わず俺も苦笑してしまった。

…何気ない時間、しかし何よりも楽しい。

非日常に身を置くことを余儀なくされた者が望むのは幸福などでは  
ない、平穀なのだ。

俺はそれを再認識していた。

……

「…主、アレデハナイカ？」

不意に、セイリュウがこちらに声をかけてくる。  
ルイズ達を見つけたようだ。

「ん？ どれだ？」

「右前方、見慣レヌ鷲頭ノ獸ノ後カラ馬ガ全速力デ駆ケテイル」

「…ああ、あれね。確かにルイズ達だわ」

グリフォンの上に帽子の男とルイズが、後ろで走っている馬の上には黒髪の少年と金髪の少年が見えた。

「よしセイリュウ、あそこへ向かつて…ん！？」

三頭の前に、数人の男たちが飛び出してきているのが見える。  
手に武器を持った男達。

「…奇襲を受けているのか！？」

「…盗賊」

「まずいわね。すぐ援護するわよ！ 急いで！」

「セイリュウ！ 行け！」

「承知」

セイリュウがスピードを上げて急降下していく。

眼下に見えるルイズ達と盗賊共の姿がどんどん大きくなってきた。

「俺が飛び降りて蹴散らす。タバサとキュルケはセイリュウに乗つたまま魔法で援護を頼む」

「オーケー、任せて！」

「…分かつた」

「セイリュウ、二人を頼む。…よつ！」

セイリュウの背を蹴つて盗賊たちのど真ん中へ着地する。いきなり降ってきた見たことも無い亜人らしき者に、盗賊たちは混乱する。

「な、なんだコイツは！？」

ルイズの前に立つ帽子の男は怪訝な様子で此方を見ている。魔法学院で目が合った時に俺を見たのを覚えているのか、敵意を向けてきてはいないようだ。

盗賊共の誰何の声には答えず、俺は片つ端から盗賊共を殴り倒した。

「い、いきなり何しやがんだこの亜人がつ！おい、こいつ諸共殺つちまえつ！！」

俺に向かって振り下ろされる剣。

しかしあえて避けたりせず、無造作に前へと踏み込んだ。肩に軽い衝撃。しかし痛みは無い。

達人クラスならまだしも、賊程度が振るうなまくら剣に傷つけられ

るほどこの体はやわではないのだ。

まして、あえて前へと踏み込んで相手の間合いを外してある。間合いを少し外してやれば、その一撃には速度が乗らないし力も入らない。

たつたこれだけの動作でも敵の攻撃力のほとんどを奪うことができるのだ。

「なつ！？斬れねえだと！？どんな体してやガフツ！？」

皆まで言わせず殴り倒す。

もちろん、気絶程度で済むよう手加減はしている。後で尋問していく必要もあるからだ。

上からはタバサとキュルケが放つ氷の矢や炎の玉が降つてくる。ルイズ達も状況を理解したのか、それぞれに盗賊共を攻撃していた。地力が違すぎる。盗賊共との戦いはすぐに終結した。

：

「…シン、無事？」

「ルイズ！アンタ達大丈夫？」

セイリュウから飛び降りてきたタバサとキュルケが声をかけてくる。背に乗せていた二人を下ろしたセイリュウは、後ろでふわふわ浮いて此方を伺っている。

「キュルケ、タバサ…シンまで…アンタ達なんでここにいるのよ…？」

「ルイズ、この三人は？」

「え、ええ…ワルド様、この三人は…」

怒鳴るように疑問をぶつけてきたルイズが、帽子の男の声に一気に  
しおりしくなる。

二人は何か特別な関係なのだろうか、と感じた。まあどうでもいい  
ことなのだが。

⋮

⋮

⋮

「なるほどね…ルイズの級友とその使い魔君か」

「…タバサ」

「”微熱”のキュルケよ。…いい男ねえ…ねえアナタ、情熱を知り  
たくはないかしらあ？」

タバサは普段どおりに。

しかしキュルケは自己紹介と同時にワルドと呼ばれた男を誘惑にか  
かる。

「悪いがキュルケ君、僕にはルイズという婚約者がいるのだよ」

冷たくあじらうワルドの言葉。しかし婚約者とは…。

ワルドの年齢は知らないが、おそれらく20代後半。ルイズとは10以上違うはず。

つまりは…ロリコン！？

・タバサに手を出したら…消ス。

ワルドに対する警戒心を募らせつつ、しかしそれを表に出さないよう気をつけながら俺も自己紹介する。

「タバサの使い魔、シンだ。

ちなみに向こうの竜はセイリュウ、俺の仲魔…まあ使い魔みたいなものだ」

「使い魔が使い魔を持つのかい…？変わっているねえ

「私は魔法衛士隊グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ。

シン君、君はかなり強いな。先ほどに戦いぶりは見せてもらつた

よ

ギーシュはセイリュウの存在に驚き、ワルドは俺の戦いぶりを褒める。

まあどうでもいいことだ。

：

「なるほど…アルビオンへ、ねえ。危ないわよ？

あの国が今どうなってるか知らないワケじゃないでしょ？何しこ行くのよ」

「危険は百も承知よ。目的は極秘任務だから言つわけにいかないの」

「まあそういうことだ。任務内容は聞かないでくれたまえ」

俺たちが来る原因となつたキュルケが、ルイズ達から話を聞いている。

俺たち三人の中では一番弁が立つし、こういう場合は適任だ。ギーシュは、俺が氣絶させておいた盗賊を尋問している。

俺はそちらの様子を見に行くことにした。

「ギーシュ、何か吐いたか？」

「ああ、シンか。うむ、どうもただの物盗りのようなのだが、どうも要領を得なくてね……。」

「おい、何か隠しているだろ？ もうさと吐け！ …」

「な、何も隠してねえよ！ 俺たちはただの盗賊だ！」

お前らしい身なりしてやがるから身ぐるみ剥いでやる！ としただけだ……！」

…嘘だな。

少なくともワルドはグリフォンに乗つてゐる。

あの乗騎と身なりを見ればメイジということはすぐに分かる。

しかも、グリフォンを乗りこなすほどのメイジなのだから凄腕であることも読み取れるはず。

身なりに目が眩んだとしても、狙う相手として自然とは言えない。大体、今はアルビオンが内乱中だから、アルビオンへ行くための港へ続くこの街道を通る商人は多い。

いつの時代もどこの世界も、戦争が生む特需は大きいのだ。大きな利益を狙つてあちこちからやって来る商隊を狙うほうが、貴

族を狙つよつよほじ樂で儲けも大きい。

さて、どうやって本当の目的を吐かせてやるつか。

俺の意識は、尋問…いや拷問方法の検討へと入っていく。

「ギーシュ爵、シン君、何か分かつたかね？」

しかし、俺の思考はワルドの声に途切れた。

「ええ、どうもただの物盗りのようなのですが、まだ何か隠しているようにも感じます」

「ふむ…詳しく述べて聞いている時間も惜しい。捨て置くとしよう」

「バツヤーリ嬢さんの任務のようだ。

「キョルケ、俺たちは」「後どうするんだ? アルビオンまでついていくのか?」

「面白そつだし、手伝うこととしたわ」

戦地へ乗り込むことになるか。

まあ、タバサを守ることに注力すれば問題はない。

その気になれば一軍まとめて蹴散らすことすら造作も無いのだから。

「分かった…ワルド子爵、先にラ・ロショールへ向かってください。

俺たちは後から行きます

「何?…急ぎの任務なのだが…」

「大丈夫、あいつに乗ればすぐ追いつけます。時間はかけませんから、お先に」

後ろに控えるセイリュウを指して軽い様子でそう言つと、自信があるのだろうと納得したワルドは頷く。

ワルド、ルイズ、サイト君、ギーシュを見送ったあと、俺は盗賊に向き直つた。

「ねえシン、一体どうしたのよ？」「こつらに何かあるの？」

「ちょっと気になることがあってな…聞き出しておきたい。すぐ行くから、一人はセイリュウに乗つて待つて欲しい」

…一人に拷問を見せたくない。

そんな俺の微妙な表情を見抜かれたのか、タバサがそつと俺の腕を取る。

「…シン…」

心配そうな顔で俺を見上げてくるタバサ。

主に心配されるようではまだまだだと思いつつ、俺は笑顔を見せてやる。

「大丈夫だ、無理はしない。ほら、キュルケと一人で待つていってくれ。すぐ終わるから」

(…じくつ)

一瞬ためらいを見せるものの、ちゃんと頷いてくれる。

二人がセイリュウに乗つてちょっと離れるのを見て、改めて俺は盜

賊たちに向こう直つた。

「な、何だよ…話せる」とはも‘つ全部話したぞ?」

「そ、そりだよ…いい加減逃がしてくれよ…」

随分都合のいい要求だ。

「お前らはまだ隠していることがあるだろ?…?  
狙いは金品ではなく、あの四人の命だろ?… わざと吐いた方が  
身のためだ」

「なつー?いや、違う!トホン… ぐああつー?」

指で摘むようにして放り捨てたのは、血まみれの爪。

「…わざと吐け。でないと爪が一枚ずつ剥がれていくぞ?  
手の爪を全部剥がしたら… 今度は指を一本ずつへし折つていくか。  
それでもだめなら両の耳を千切り取る。次は目だ。  
そのうち、いつそ殺してくれと思つようになるさ。  
さあ、お前はどんな声で啼くんだ?… 聞かせてくれよ」

冷たい目で見下すようにニヤリと笑つてみせる。

「ひいいつー!わ、分かった!話すよー話すからやめてくれー!」

「フン、わざとやつぱいんだ。… で?」

「…俺たちは、仮面をつけた妙な男に頼まれたんだ。

今日、この道をメイジを含む四人組が通るから襲え…って。

ガキを含む一行で目立つからすぐ分かるはずだ……ってよ。

襲えとは言われたが殺せとは言われなかつたのがちょっと妙だと  
は思つてたんだが……

何せ、報酬が良かつたもんですよ……」

怯えたよつて叫んで泣く男を見下ろしながら、さうじて言葉を継ぐ。

「…その仮面をつけた男とこつのは何者だ？名は？」

「…そいつの情報は全く分からねえ…。

が、襲撃が済んだらラ・ロシユールで落ち合つて報酬を貰つ手はずになつてた

…その仮面の男、おそらくこつりに報酬を渡す氣など無いな。  
ラ・ロシユールへ来たらそこで殺して口封じ…まあそんなところだ  
るつ。

仮面をつけて自分の情報は一切渡さない。

そんな真似をする以上、自分と少しでも接触したこの男たちを見逃  
すわけはない。

黒幕がラ・ロシユールへ来る以上、そこでも何か一騒動起きると見  
ておくべきだらう。

「…良いだらう。情報に免じて殺さずにおいてやる。

死にたくなければラ・ロシユールへは近づくな。さつと失せろ

そう言い捨て、喜色を浮かべる盜賊たちには田もくれず、俺はセイ  
リュウの元へ向かった。

「…どうだつた？」

セイリュウに乗り込み、ラ・ロショールへ飛ぶ。

俺が何も言わないのを怪訝に思ったのか、タバサが心配そうな表情で俺に話しかけてくる。

「…奴等、やはり金で雇われたようだ。

物盗りというのは間違いなく嘘だ。あの四人を襲撃するよう依頼されたらしい。

それに、連中の話から察するに、ラ・ロショールでもう一波乱あるかも知れん。  
ルイズ達の目的が何かは分からんが…」この一件はかなり根が深いぞ。

首を突っ込むならそれ相応の覚悟が要る。」

トリステイン王国魔法衛士隊で隊長職にあるワルドすら動いているのだ。

魔法衛士隊は女王直属らしいから、まず間違いなく女王か政府首脳部の命令で動いている。

彼らの口ぶりからすると、それは極秘命令の類。

である以上、今回の一件には国家間の陰謀が関わっている可能性が高い。

そこで、この襲撃の黒幕は誰かという話になるが…

この時期にラ・ロショールへ向かう貴族がいれば、アルビオンへ向かっていると考えるのは当然。

その目的は多々あれど、レコン・キスターかアルビオン政府のいずれかに属する、ないしは接触しようとしている者であることは間違い

ないのだ。

両勢力ともに、ラ・ロショールへ向かう貴族がいれば、「敵に通じている者ではないか」と疑うことは「」く自然なことだ。ただし、レコン・キスタと違つて今のアルビオン政府はかなりの劣勢。

トリステイン王国領であるラ・ロショールにまで敵を探り出すための諜報員を置く程、人的資源に余裕があるとはとても思えない。であれば、今回の黒幕はレコン・キスタである可能性が高いのだ。

俺の説明に、二人は目を伏せるようにして考え込む。

「…なるほどね…ちょっと推理に飛躍があるような気もしないでもないけど…」

「…筋は通る」

「確かに…ね」

「まあ所詮推測は推測だ。今後の推移によって状況はどうにでも変わらう。」

「首を突っ込む以上、常に警戒は解かないでくれ」

「分かつてるわ」

(二)くつ)

警告に頷く一人に俺も頷き返し、セイリュウを駆る。さあ、行こうか、ラ・ロショールへ。  
そして、陰謀渦巻くアルビオンへ。

(…何があるうど、タバサは守る)

そう決意を固めて、だんだんと大きく見えてくるラ・ロシェールを  
俺は睨み付けた。

s i d e o u t

## 第十五話 暗躍（後書き）

終盤の人修羅の推測の辺りなんか、ノリノリで書きました。  
楽しいね、陰謀。大好きだ策謀。

まあ一番好きなのはそれを力づくで踏み潰す様なんんですけど（オイ

## 第十六話 奇襲

side 人修羅

「ふむ…なるほどな。確かに筋は通る」

グラスの中に揺れる緋色の霧をぐつと煽つて呴くワルド。  
セイリュウの上でタバサとキルケに語つた推理を、ワルドにも話  
しておくれべきと考えたのだ。

「ええ…多少飛躍はありますけどね」

「つむ、仮定の上に仮定を重ねた推測ではあるが…しかしいい所を  
突いた推理ではあると思つ。」

過信は禁物だが、覚えておいて損は無いだろ?」

「連中が言つには、報酬は二二・ラ・ロショールで受け取る手はず  
だつたそうです。」

黒幕はおそらくそこで仕事を終えた盜賊たちの口封じをしようとしていたのだろうと思ひます。

つまり、あの襲撃の黒幕は今この町にいる可能性が高い…。

一応タバサたち一人には襲撃に注意するよう警告はしておきました

た

そこまで話し、俺もグラスを煽る。

未成年ではあるが、悪魔に法律も何もないのだ。

第一ここには日本のように未成年の飲酒を禁じる法はない。

キルケもギーシュも平気で飲むのだから。タバサも付き合い程度

には。

「やうか…確かに警戒しておくに越した事はないが…

君の推理からすると、黒幕はレコン・キスター側、その目的は『トリストインのメイジと思しき連中がアルビオン政府へ接触を取ろうとしているのを阻止する』ことのはず。

余り町を混乱させると私たちに逃げられる可能性を高めてしまつことにもなる。

ここで仕掛けてくる可能性は余り高くはないだらうと私は考えていいの

ワルドは事態を少々楽観視しているようだ。

もちろん、俺も自分の推測が絶対的に正しいとは思っていない。だがこうこう場合、警戒しておくに越したことはないのだ。

万一に対する備えは無駄になればこそ幸いであり、取り越し苦労はしておいた方がいい。

考えが足りないことが死に繋がることを思えば、考えすぎに得はあつても損は無い。

長く戦つてきた自分だから分かる、それが生きる秘訣なのだ。

「その推測が当たつていてことを期待しましよう。

油断を突かれて死ぬくらいなら、心配性だ臆病だと笑われる方が余程マシというものですから」

軽くおどけてやつ言ひ、ワルドもニヤリと笑つて酒を注いでくれた。

「フフ、全くその通りだな。

にしても、先の奇襲の際に君の戦いぶりを見せてもらつたが、君は相當に場慣れしているな。

それだけではなく、君の身体それ自体も実に頑丈に出来ているようだつた…。

間合いを外しただけで敵の剣を無傷で受け止めた際など、本当に見事だつたよ。

見たところ亜人のようではあるが、人間に負けず劣らずの知性を持つた存在：初めて見る。

君は、一体…？

怪訝な顔で疑問を呈するワルド。

しかし、真っ正直に答えるのは憚られる。

悪魔だなどと、聞こえの良いものではないのだ。

「…今の俺はタバサの使い魔。それ以上でも以下でもありませんよ」

けろりとした顔で答えてやる。

話すつもりは無いというこちらの意図を察したワルドも、それ以上追求しようとはしなかった。

「フツ…そうか。何にせよ、君は頼りになりそうだ。  
君が敵でなくて良かつたよ。さ、もう一杯」

「ハハツ、頂きます。

…まさか貴族に酌をしてもらうことになるとは思いませんでした。  
人生何があるか分からぬのですね…」

「ああ…全くだ…」

静かに、しかし万感の想いが籠つてゐるであろうその一言が、後から思い返すたびに心に残つた。

⋮

⋮⋮⋮⋮⋮

俺たちが宿泊している宿、女神の杵亭。

中の上程度の、貴族が泊まるにはそこそここの宿である。

資金はどこでどれだけ必要になるか分からぬから下手に散財するわけにはいかない。

かといってその日暮らしの傭兵やじりつきの平民達が泊まるような安宿に貴族が泊まれば目立ちすぎるし危なくもある。

このくらいの宿であれば、宿側も泊まる客をある程度選ぶ。最低限宿代は払えて、かつ問題を起こさない程度の分別を備えた相手でなければ泊めないので。

宿代を踏み倒しかねないような者を泊めねばならないほど宿側も困窮していいし、何より問題など起こされでは宿の評判に関わる。この世界では効率的な情報伝達手段が無い以上、客の口コミや噂が最も有効な宣伝手段なのだ。

ゴシップや悪い噂が好きな人間などどこにでも居るから、評判を傷つける類の情報が流れるのは早い。

そこを熟知している宿側も、その辺りは充分に注意を払うのだ。

とはいっても、酒が入れば気が大きくなり陽気になるのは人の性。

夕食時を少し過ぎて程よく酒が入った客たちは、笑い声を上げて乾杯を繰り返し、ぐいぐい酒を煽つていた。

「船、あるかしらねえ……」

「どうだろ？ 『スヴォルの夜』は確か明後日じゃなかつたか？ よほど急ぎの便でもなければそれまで待つのじゃないかな」

頬杖ついて呟くキュルケに、グラス片手に答えるギーシュ。何かを考えるように俯くるイズと、ビニカぶすつとした様子のサイトは一人揃つて黙つている。

「子爵が出航予定を聞きに、少し前に港へ向かつたはずだな。彼が戻るのを待とう。…ほらシン、一杯どうだ？」

「さつき子爵と何杯か飲んだからな…これ以上飲むところという時に酔つて対応できなくなりそうだ。やめておくよ、ありがと！」

こつちの世界の連中は若い頃から飲んでいるだけあって、<sup>うわばみ</sup>大酒呑みが多い。

地球で同年代の少年少女に飲ませたらひっくり返つてしまつであろう量を、みんな平氣で飲む。

悪魔になつた体でどれだけ酔いが回るか試したことはない。が、羽目を外して大酒飲んでゲーゲー吐いて苦しむ友人を昔（悪魔化する前に）何度も見たことがある。

あんな姿になるのは真つ平御免だ。

そう思い、ギーシュの誘いを謝絶した俺は料理を突つぐ。

「どうか…君は常に戦う用意を欠かさないのだな。常に戦場、立派な心がけだと思うよ」

単に酔いつぶれた間抜けな姿を晒したくないだけだからそんなに感心されることでもないのだが…。

などと思いつつ、好意的な賛辞は素直に受け取つておいた。

そこへ、子爵が戻つてくる。

「あ、子爵…どうでした、船はありますか？」

「いや、ダメだった。やはり『スヴォルの夜』まで船を出す予定はないそうだ」

眉間にしわを寄せた子爵の表情からしておそらくこの結果は出なかつただろうと思つていたが、予想通りか。

「…なあタバサ、『スヴォルの夜』って何だ？」

「アルビオン大陸が最もラ・ロシェールに近づく夜のこと。  
動力源である風石の消費を最低限にするために、この田を狙つて  
運行する船が多い」

「…ふむ…」

アルビオン大陸が近づく…動力源のフウセキ…良く分からぬい言葉  
がいくつかある。

浮遊大陸らしいが、どうやらふわふわと動いているようだ。  
フウセキというのは…風の石と書くのだろうか。

思うに、魔力を秘めた石か何かなのだろうか。魔石やマハラギの石  
みたいな。

そんなことを考えて…

しかし、その思考は途切れることを余儀なくされた。

外から向けられる多くの気配と、そして粘りつくよつた敵意に。

「…子爵」

「ああ、気づいたか…ツー？伏せる…！」

目配せした直後に、宿の中に矢が撃ち込まれる。幸い誰にもあたらず床に刺さつただけであったが、酒場をパーティクに陥れるには充分であった。

「何だ、敵襲か！？」

「テーブルを倒して！盾にするのよ、早く…！」

慌てるサイトとギーシュに、素早くキュルケが指示を出す。料理や酒が食器ごとダメになるのも構わず、テーブルを一、三倒して即席の盾を作つて隠れる。

「…宿の前面に敵部隊、数はここからでは良く見えないが、50人は居そうだな…」

…裏口に敵の手が回つている可能性もあるが、正面突破よりはマシか…。

諸君、この手の任務は、半数が目的地へ辿り着ければ成功とされるものだ」

「…（jee）…囮」

ワルドの状況説明に頷いたタバサが、キュルケと俺と自分を指差してそう言つ。

それで皆理解したようだ。

ワルドを先頭にルイズ、サイト、ギーシュと続いて裏口から港へ向かって走り出す。

それを確認した俺は、タバサとキュルケに向き直った。

「本来なら時間稼ぎが常套手段だろ？が、あまり時間をかけすぎるところちらも消耗しそうだ。」

俺が前へ出て纏めて蹴散らして来よう。

タバサは援護を、キュルケは俺の攻撃を掻い潜つて店内へ踏み込もうとして来る者を狙つて欲しい。

ただし、一人とも酒場からは出ないよ！」

「それは良いけど、一人で前へ出るなんて危険じゃない？」

「…シンなら大丈夫。私が援護する」

タバサが決意を込めた目で静かに言い放つ。

その目と言葉に俺への確かな信頼が見て取れる。

それだけで、不思議と力が湧いてくるような気がした。

「ああ、任せておけ。…いくぞ！」

破顔して言い放ち、そして入り口へ向かつて駆ける。

待ち受けるは、完全武装の傭兵数十人。

「覚悟しろ…俺たちに剣を向けたことを後悔させてやる…！」

ニヤリと笑い、俺は全身に力を込めた。

第十六話 奇襲（後書き）

話せば分かるもんだ、ふふふ。

## 第十七話 恐怖（前書き）

更新にちょっと間が空きました、申し訳ない。

## 第十七話 恐怖

side 人修羅

テーブルの陰から飛び出し、酒場の入り口横まで走る。

壁に身を隠して、散発的に窓から飛び込んでくる敵の矢を避けた。

(…数に任せているだけ、統率が取れているとは言い難いな)

矢を放つなら合図して同時に放つのが常道。

バラバラに撃つて効果が上がるには圧倒的に射手の数が多い場合だけだ。

数に任せているだけ、魔法が飛び込んでこない所を見るとメイジは含まれていらないらしい。

矢が途切れるタイミングを見計つて入り口から外へ飛び出し、間髪入れずに攻撃を加える。

「ジャッ!!」

水平に振りぬいた腕から不可視の斬撃が乱れ散るように飛び出す。一種のかまいたちのようなその攻撃を見切れる者はおらず、数人が斬り倒された。

「ツー?ぐああツー!」

「な、何だ!? 何が起こった!?!」

一対多の戦いにおいて真価を発揮するこの手の広範囲攻撃のうちでも特に威力の高い技、”デスバウンド”。

一種の散弾のようなもので、正確な狙いをつけなくともある程度の命中率を期待できる技である。

その分、攻撃の精密さには欠けるのだが、このような状況では気にする必要が無い。

そして小さな不可視の斬撃は、一発でも常人相手なら致命傷に至るに充分。

町を破壊するわけにいかないから、今のはかなり力と範囲を絞ったが、全力でやればこの一回で全滅させて余りある。

「アイツはやべえ！殺せ、囮い込んで討ち取れっ！！」

真っ直ぐ突っ込んでくる者、側面に回り込もうとする者、後ろへ回ろうとする者、矢を撃ち込んでくる者。散開して俺を攻撃にかかるようだ。

多勢の利を活かして多面攻撃に出たその判断は褒めてもいい。相手が俺でなければ討ち取れただろう。

ニヤリと笑って、前へ出る。

「馬鹿がつ！死ね…ゴフッ…！」

勝利の笑みを浮かべて油断した馬鹿を間髪入れずに殴り倒し、俺は更に前へ出る。

俺が下がるか、さらに側面へ回り込もうとするだろうと予測していたであろう敵は、俺の動きに驚き、一瞬だけ動きが止まった。

「”ニア・ハンマー”」

敵の動搖した瞬間を的確に狙い、タバサの魔法が敵数人を纏めて難

ぎ倒す。

見れば、タバサとキュルケも入り口近くまで押し出してきたようだ。窓から顔を覗かせるようにして魔法を放つていて。店内へ乗り込もうと突撃する兵も居たが、キュルケの炎に焼かれて一人残らず消し炭だ。

敵も統率の乱れを把握したらしい。

リーダーらしき男が俺を囲むよう指示を出す。

槍衾を敷いて俺を取り囲もうとしているようだ。

包囲が完了したその瞬間、俺の一撃目が発動した。

「ジャツ！！」

空へ向けて放つた魔力の塊が、弾けて地上へ降り注ぐ。さながら、槍の雨のように。

この”ジャベリンレイン”は”デスバウンド”と同じく広範囲攻撃である。

効果範囲の差、攻撃の角度や速度の差から、状況に応じて使い分けている。

俺を囲んでいた哀れな傭兵30名のうち、無傷で済んだ者はいない。ざつと死者23～6名、残りが重傷と言つたところか。致命傷も何名か含まれている。

たつた一撃で敵の戦力の大半を削り取ってしまった。

リーダーらしき男は呆然自失。

射手たちはほとんど無事だが、恐慌状態が半分、逃亡者が半分といったところ。

狂ったような声を上げて浴びせられる散発的な矢は全て無視して、俺はリーダーらしき男へ向けて走った。

「う、うわああああああッ！？」

恐怖から逃れようと剣をテタラメに振り回す隙を狙つて、俺は拳を叩き込む。

一撃で首の骨が折れたのだるうつの男は、遺言すら残せぬままに命を失つた。

「……運が無かつたな……」

……

「「「ちは」「んなもんか。タバサ、キュルケ、そつちは？」

「終わった」

「「「ちももう残つてないわ」

まだ少し残つていた敵の抵抗は、これで完全に排除した。  
損害はほとんど無い。

これだけの数を3人で相手にしたにしては早く済んだが、ルイズ達を追つには遅い。

おそらく彼らは既に港へたどり着いている頃だ。

「よし、じゃあ子爵達を追うか……むッ！」

タバサとキュルケも異変に気づいたらしい。  
杖を構えて俺の方へ駆け寄つてくる。

闇に包まれた大通り。

起こつた騒ぎに関わるまいどどの店も家も堅く扉を閉ざして息を潜めている。

だが、誰も居ないはずのそこには、確かに黒い人影があつた。それだけならまだいいのだが…気のせいだらうか。その人影は、だんだんと大きくなつていてるのだ。

「大きくなつていぐ… 一体… ッ！？」

「下がれ！」「レムだ！！」

「… „エア・ハンマー”」

俺の声に慌てて飛び退るキュルケ。

タバサも牽制に一発撃つた後、すぐに下がる。

「… なあタバサ、この『レム』の造形と動き… どこかで見た覚え無いか？」

「… フーケ」

やはりタバサもその可能性に思い至つたようだ。

この『レム』は、フーケが作ったものに酷似していたのだ。

「嘘でしょー？ フーケは今頃監獄の中にはいるはずよー？」

焦つたように言つキユルケに答えたのは、俺でもタバサでもなかつた。

「… 脱獄したんだよ」

「フーケか…しつこいなアンタも。

そんなにマジックアイテムが欲しいんなら、俺の幻惑の羽をくれてやるからとつと消えろ」

暗い路地から歩き出てきたフーケはしかし、俺の軽口に乗ろうとはしなかった。

「生憎、今は盜賊は休業中。アンタたちを倒すことが目的だよ。それに幻惑の羽貰つたってどうせまた使い捨てだろ？」

一束三文どころか買い取つてすらもらえないわ」

「全くしつこいわねえこのオバサンも。

こないだシンに叩きのめされたの忘れたのかじりへ」

呆れたよつこ滋くキルケの一言が、どうやらフーケの逆鱗に触れたらしい。

「オバ…ッ！？」アタシはまだ23だよ！

それに、アタシに簡単に操られちまつたバカに言われたかあないね！

乳にばっかり栄養取られて脳みそ育つてないアンタにや分からないかも知れないけど？

…アツハツハ！！

「…バカ…？」

乳にばっかり栄養取られてる…？  
脳みそ育つてない…？」

げに恐ろしき女の戦い。

一人が放つ殺氣を帯びた怒氣は、百戦錬磨の俺をすら萎縮させるに充分だった。

「…シン…？」

この年増、アタシがやらせてもらひつわ…アンタはこのゴーレム何とかなさい…。

嫌だなんて…言わないわよねえ？」

NOといつ返答は即座に俺の死に繋がる。

実力的には俺の方が圧倒しているはずなのに、それを忘れさせるほど今のキュルケは怖い。

俺に肯定する以外の選択肢など残されてはいなかつたのだ。

「…分かつた… フーケは頼んだ、キュルケ。

この際、徹底的に懲らしめてやればいい。

…タバサ、キュルケを頼むぞ…（ボソッ）」

タバサがこくりと頷くのを見やつて、俺はゴーレムへと向かう。

：

既に一度も破壊されたゴーレムが俺に通用すると思つほどフーケが馬鹿なら俺としても苦労は無い。

が、数々の貴族を出し抜いてきたフーケが馬鹿であるはずがないのだ。

フーケはキュルケと戦闘中。

あちらでも魔法を使つていふと見ると、田の前のゴーレムはどうやら自動操作らしい。

フーケが俺たちの前に姿を現したことからして、自動操作に加え、そう簡単に潰されないよつな細工をしてあるのかもしない。

…まずは、小手調べだ。

「ジャッ!!」

ゴーレムの足へと飛んだ”アイアンクロウ”は、しかし甲高い音を残して弾かれる。

その音からして、おそらく鋼鉄製ゴーレムなのだろう。これほど大量に鋼鉄を作り、それを人型に成形し、自律行動するよう魔力を込める。

おそらく膨大な魔力を必要とするはず。

スクウェアクラスでもない限り、今のフーケに余力は少ないはずだ。ならば、キュルケの事を気にかける必要はない。

「さて……どうやって潰してやるつか」

ニヤリと笑つて、俺は次の攻撃に移つた。

s i d e   o u t

## 第十七話 恐怖（後書き）

今回は延々と戦闘描写。  
ついでに少しの、ギャグ。

どうも苦手な描写です。  
誰か俺にセンスを分けてください……。

あとサブタイ考えるのに苦労します。  
ホント、漢字一文字に限定しようと考えた馬鹿な俺を殴つてやり  
たい。

## 第十八話 友情

side 人修羅

「少々時間がかかったな……」

「そうねえ、でもこのスピードなら途中で追いつけるんじゃないかな  
しら?」

俺たちは今、セイリュウに乗つてアルビオンへと飛んでいる。  
あの後フーケとゴーレムを無事撃退したのだが、ゴーレムが鋼鉄製  
だつたこともあって破壊に少々手間取つたのだ。

その後、街の外まで移動してセイリュウを召喚して、騎乗。  
さすがに夜とはいえ街の中で召喚するわけにもいかなかつた。  
それでなくとも大立ち回りを演じてかなり目立つたのだから、これ  
以上は……というわけだ。

「ここの時期に飛んでいる船は多くないはず……すぐ見つかる」

タバサの言葉に、俺たちも頷き、月明かりに照らされた雲を見やつ  
た。

「ん…？あそこに船が飛んでるな、アレか…？  
セイリュウ、ちょっと寄せてくれ」

向こうがルイズ達の乗り込んだ船ではない場合、見つかった時に攻撃しようとしている勘違いされは面倒だ。  
まずは気づかれないように、しかし向こうの船の様子が確認できる  
ように、そして攻撃と取られないような態勢で、セイリュウは目標  
の船へと近づいていく。

「…旗を掲げていない。空賊」

「関わらぬのが賢明か…セイリュウ、甲板にいる人間、見えるか？  
見覚えのある人間はいるか？」

タバサの言葉に舌打ちしたくなるのを押し殺して、セイリュウに問うた。

「…酒場<sup>テ</sup>別レタ者達ガ甲板ニ居ル。拘束サレテハイナイ」

「よし…俺がまず甲板へ飛び降りて様子を見る。  
合図したら、セイリュウも甲板へ降りて來い。  
もし不味い状況だつたら、そのまま甲板の制圧に移る。  
戦闘の様子が見て取れた場合の判断はタバサに任せる」

「…分かった」

「大丈夫だと思うけど、気をつけなさいね、シン」

了承する一人に頷き返して、セイリュウを促す。

船の真上を横切るように高速で飛ぶセイリュウの背を蹴り、俺は甲板へ飛び降りた。

：

すたんっ、と軽い音を立てて降り立った甲板。

いきなり空から降つて沸いた不審者に、水夫たちが怒鳴るような誰何の声を上げる。

俺はその声に構わず、大声で呼ばわった。

「ルイズ！ワルド子爵！サイト君！ギーシュ！居ないか！？」

「な、何なんだ貴様は…」この船に何の用だッ！？

「この船に貴族の四人組は乗つていなか？女の子一人に男三人のグループだが。

乗つていらないならすぐに立ち去るし、乗っているなら会わせ…」

しかして、その言葉は途中で途切れた。  
知り合いの声が上がったからだ。

「シン！？シンじゃないか！來ていたのか？タバサたちはどうした  
んだ！？」

ギーシュが駆け寄ってきて声をかけてくる。

その様子に、水夫たちがぽかんとした顔で問うた。

「あの……」この男は貴方がたのお連れで……？」

「あ、ああ。彼は私たちの仲間だ。一端離れたんだが今合流した。  
大丈夫、敵ではないから……」

その言葉に釈然としないものを抱えたような顔で、水夫たちは持ち場へ戻っていく。

その様子を見て、俺はセイリュウへ合図を送った。

「タバサ、キュルケ、シン！ 来ていたの！？」

甲板へ降り立つたセイリュウから一人が降りたところで、サイト君とワルド子爵を伴つたルイズが甲板へ出てくる。

「あの後、傭兵達は蹴散らした。こちらに被害は無い。

それからセイリュウに乗つて追いかけてきて、この船を見つけた  
んだ」「

簡単に経緯を説明し、情報交換を行つ。

「そう、お疲れ様。

私たちはあの後……」

「やあ、君たちがワルド子爵達のお連れか。

初めまして、私がアルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダーだ。

アルビオン王国艦隊旗艦”イーグル号”へようこそ。

大した持て成しもできないが、我等は君たちを歓迎しよう！」

まさか、こんなことになつているとは思いもしなかつた。  
いや、予測できる方が異常といえる、そういう類の事態かも知れない。

その後ルイズ達は、伏兵の奇襲を撃退しながら港へ到達。  
そこで商船に乗り込み、船長に威圧じみた説得を行つて強引に出航  
したらしい。

順調にアルビオンへ向けて航行していたのだが…。

そこで何の因果か、空賊の襲撃を受けてしまったのだそうだ。

奇襲の撃退によって消耗し、さらに準備の出来ていらない船を飛ばす  
ためにワルド子爵の魔法で航行補助をしたのが災いして、空賊たち  
と戦う余力が残つていなかつた。

やむなく恭順を示して捕らわれたのだが、空賊の頭にいきなり呼び  
出されて詰問を受けた所、頭が実はアルビオンの皇太子であることが  
が判明。

かくて、トリステインからの使者である四人はウェールズ皇太子の  
船でアルビオン王室の居城、ニューカッスルへと向かうことになつ  
たのだそうだ。

ちなみに、極秘任務についてもある程度の話は聞いた。  
とある品を回収することが任務であり、それを持っているのがウェ  
ールズ皇太子だ、と…。

「ただの空賊船かと思いましたけど…まさかウェールズ皇太子が乗

つていりつしゃるなんて…」「

キュルケは額から汗を垂らしつつ、恐縮している。  
さもあるつ。まさか皇太子が空賊をやつているなど、誰が想像する  
ものか。

タバサも彼女の言葉に頷いている。

表情は普段とあまり変わりないよう見えるが、驚きで僅かに目が  
見開かれている。

ごくごく僅かに、ではあるが。

「改めて…ルイズの連れのキュルケと申します」

「タバサ」

「タバサの使い魔、シンと申します。

先ほどは皇太子殿下の乗艦とは知らずに乗り込んでしまい、申し  
訳ありませんでした。

どうかご容赦ください」

自己紹介と共に、乗り込んだ無礼を詫びておく。

快活かつ開放的な性格らしき皇太子はさして気にしてもいないよう  
で、笑って許してくれた。

高圧的なところが全くなく、凜としていたがらどこか人懐っこいそれを  
思わせる笑顔である。

俺は、初対面のこの王族の少年に好感を持った。

……

### イーグル号の甲板。

最低限の人員を残して水夫たちが既に就寝しているため、人気は少なく閑散としている。

甲板上を軽やかに吹き抜けていく夜風が、心地よい音を立てて頬を撫でていく。

「……やあ、シン君だつたね。眠れないのかな？」

「皇太子殿下……いえ、この光景を見ているとどいつも時間を忘れてしまってます」

月光に照りされて浮かび上がる雲に映し出される、その幻想的な光景。

俺は思わず手を伸ばしそうになっていた。

「ふふ、その気持ちは良く分かるよ……。

空はいい。青空には青空の、夜空には夜空の良さがある。  
今日のような月の明るい夜は、特に美しいからな……」

返事が求められていないであらう言葉。

変わらず夜空を見つめる俺の隣に、皇太子が歩み寄つてくる。  
どれほど時間が経つだらう。

交わす言葉もなく、俺たちはただ夜空を見つめていた。

「……アルビオンは、白の国と呼ばれている。

高空に浮かぶ浮遊大陸であるために、手の届く所にいつも雲があ

るのだよ。

この国に生まれ育つた者は皆、子供の頃から雲に触れ、雲と戯れて育つ。

そして知るのだ、雲のように、空のように、広く雄大な心と生き様を」

呟くように静かに、しかしそこには確かに慈しむような愛情を込めて、皇太子は独白する。

「…シン君、君は本当に亜人なのか？」

私には君がただの亜人には到底見えない。

主との純粋な信頼関係然り、初めて出会った時の貴族顔負けの礼節然り。

そして今のように夜空と雲を愛でる姿も…。

君の行動は人間としか思えないのに、君からは人ならざる者の力が感じられる。

シン君、君は一体…？」

おそらく興味本位であろうその問い。

敵意も警戒心も感じられず、それどころか好意をすら寄せてくれているように感じる。

俺にとつては、とても新鮮な感覚だった。

「俺は…人であることをやめさせられた存在<sup>モノ</sup>。強いて言つなら”元人間”という所でしょうか」

「人であることをやめさせられた…！？」

そんなことがあるものなのか？一体何故…」

心底驚いているような彼。

俺に好意を寄せてくれた彼を安心させるよつて、俺は言葉を継いだ。

「さて、詳しい事は俺にも分かりませんが…ともあれ、この体も悪いものではありません。

大切な主を守れる力は、この体に秘められている。

…今の俺はタバサの使い魔、それ以上でも以下でもないのです

フッと微笑むようにそう言つてやる。安心してくれというメッセージージ。

「ふふ、そうか…ミス・タバサは良い使い魔を持つたようだな。

…さて、私はそろそろ行くよ。

夜風は体に毒だ。早めに戻つて休むといい。明朝には一ヨーカッスルに到着するだらうから

二口りと笑つて立ち去る皇太子の背を見送り、俺はまた夜空へと視線を戻す。

幾千年も変わらず空を漂い続ける雲。

風に吹かれて姿を変えていくその様は、さながら時代の変化を暗示させるようでもあった。

皇太子の愛した国、アルビオン。

その国は、滅びゆく運命を変化させることができるだらうか。

問いかけるよつて甲へ田をやり、俺は甲板を後にした。

## 第十八話 友情（後書き）

言葉の要らぬ男の友情。

いつぺん描いてみたかった。

上手く表現できてるかなあ

でかいものを背負う男ほど、その笑顔は深い。  
そんなウエールズを好きになつてくれるとい嬉しいです。

## 第十九話 覚悟（前書き）

PV20万超えてました。ありがとうございます^\_^  
感謝、感謝でござります！

## 第十九話 覚悟

side 人修羅

ハルケギニアへ来てからとんでもない経験は幾度もした。いや、来る前からか。

しかし、空飛ぶ島へ行つたことなどないし、空飛ぶ島の真下へ潜ることだつてなかつた。

「微速前進」

「微速前進、アイ・サー」

甲板の真ん中に陣取つて指揮を執るウェールズ皇太子。  
俺はその隣で、浮遊大陸の裏側を見上げている。

ただのゴツゴツした岩の塊が広がるだけ。

しかし、それが鍾乳洞のように下向きの棘が生えたような形になつてゐる。

当然ながらこんなところに植物などないし、生き物だつて住めないだろう。

暫く進むと、真上に大きな穴が現れた。

穴はかなり長く続いているようだが、奥にちらりと明るい所が見える。

「微速上昇」

「微速上昇、アイ・サー！」

歯切れ良く応える水夫たちの意思を汲んだかのようこ、船はゆっくりと上昇しはじめる。

前進も後退もせずに、だ。

何とも器用な操船であるが、そもそも帆船が空を飛んでいる時点で充分非常識なのだ。

今更垂直移動くらいでどういひつまつ氣は起きない。

「なるほど…大陸の裏側にこんな入り口があつたんですね。これは氣づけという方が無理な話だ…」

「ふふふ、そだらう？伊達にハルケギニア最強の空軍を有してはないよ。

数や鍛度は当然のこと、その運用法にも長け、十全に活かせる設備も有している。

最も、今はイーグル号しか残つていないので、な

誇らしげに、ついで苦笑するように話すウーハルズ。

素人目であるが、言うだけのことはあると俺も感じた。

「さあ、父上に会つてこつてくれ。他国からの賓客だ、皆も喜ぶだ

るわー。」

「ジョームズ陛下、お初にお目にかかります。  
トリステイン王国魔法衛士隊が一、グリフォン隊隊長のワルド子爵でござります。

こちらは、ギーシュ・ド・グラモン、

及びルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエー

ルとその使い魔にござります。

我等三人は、アンリエッタ姫殿下よりの密命を帯びてアルビオンへやつて参りました。

そちらの三人は、我等が仲間。

使者ではございませんが、この旅程に力を貸してくれた者達でござります」

「よく来たな、諸君。

我が国は内戦中である故、大した持て成しもできぬことを許して欲しい。

して、本日の用向きは?」

髭をたくわえた初老の王に、跪いたワルドが挨拶する。  
優しげな風貌の好々爺。

しかしその奥には、確かに王たる者の覚悟と強さが見て取れた。

「は…ウェールズ皇太子殿下へ宛てた姫様よりの書状を預かっております。

…ルイズ、あれを」

「はい…皇太子殿下、こちらでござります」

頷いたルイズが、懐から書状を取り出してウェールズに手渡す。

「ほつ、可愛い従姉妹からの手紙か…ふむ、これは確かにアンのサインだな」

封に記されたサインに軽くキスをして、手紙を取り出し読み込んでいく。

どんな内容かは知らないが、彼はそれを表情に決して出さない。王族としての正しい教育がされているようだ。ややあって、手紙を全て読み終えたウェーラズは顔を上げ、口を開いた。

「アンはかつて私に渡した品を返して欲しいと言つてきている。これがその品だ。確かに預けたぞ」

「はっ…必ずや姫様へお届けいたします」

恭しくウェーラズが取り出した薄い包みを受け取り、懐へしまるイズ。その様子を見て満足そうに頷いたウェーラズは、振り返つてジエムズへ呼びかけた。

「陛下、トリステインよりの使者殿はこれで無事に役目の中分を果たしました。

内戦中のこの国へ入ったその勇氣はまことに見事。

今宵は家臣たちも招いて盛大に持て成しの宴を開きましょうぞ…」

「つむー…皆も喜ぶであらー！」

皆のもの、宴じゃー！勇氣ある使者殿たちを盛大に持て成すのじや

！」

破顔する親子の申し出を、俺たちはありがたく受けることにした。

⋮⋮

華やかなパーティの準備に、広間は慌しい雰囲気であつたが、そろそろ終わる。

料理や酒が所狭しと並べられたテーブル。

ドレス姿の女性達や正装姿の男性が集まり始めている。

ベランダから沈み行く夕日をタバサと一緒に眺めつつ、俺は考え込んでいた。

「シン、タバサ。何してるの、『んなとこ』で？」

「ルイズか。

いや……アルビオンの夕日をよく見ておこうと思つて、な。

ここは、ウェールズ皇太子の愛した国だから……」

「綺麗」

「そう」

短く軽い声で返すルイズの顔は、しかし決して明るいものではなかつた。

その様子にタバサも気づいたようで、一人とも心配そうな顔になる。

「ルイズ、元気が無いじゃないか。どうしたんだ？」

「シン…ちょっとね。

…ねえ、どうしてこの国の人達はあんなに明るい顔をしていられるの？

今にも祖国が滅んでしまうかもしないのに…。

私、あの人達嫌いよ。皆、自分を待ってくれている人が居るはずなのに…」

その疑問は、俺も感じてはいたのだ。

だが、俺はその答えをも感じ取っている。

直接聞いたわけではない、だがあの人達の顔を見ていれば何となく分かるのだ。

「…覚悟、ただそれだけだろう。  
命を賭けてでも、全てを捨ててでも、國を守るのだという強い意  
志があるんだろうな」

そう呟いた俺をキッと睨みつけるようにルイズが食つてかかる。

「覚悟があるのは分かるけど、だからって命捨てる事ないじゃな  
いの！」

大切な人がいなくなるかもしれない。

そう思いながらただ待つ人の気持ちが分からぬわけないでしょ  
う、シン！？」

「落ち着け、ルイズ…俺に食つてかかつても仕方無いだろう。

それに何も、大切なものは人ばかりとは限らない。

彼らにとつては國も大切なんだろう…。

それを失いたくないから、覚悟を決めて戦おうとしている。

：俺は祖国に対する愛着を持たない人間だ。

だから彼らの気持ちは理解できない。

待ってくれている人のためにも生き延びるべきだというルイズの

気持ちは分かるさ。

だがそれでも、俺は彼らを笑えないし、止めることもできない

俺の言葉に、タバサも頷く。

「笑つても止めてもいけない」

「……？ 笑うなってのは分かるけど、止めちゃダメってどうことよタバサ！」

「彼らの覚悟は本物。それが彼らの誇り。止めるのは誇りを捨てろと言つとの同じ」

「……タバサはそれでもいいって言うの？」

「あの人達を待つてる人が悲しむかもしれないのよー？」

そう言い募るルイズに、しかしタバサは戸惑ったように顔を伏せた。

「……私たちに出来ることは、無い」

その言葉になおも反論しようとしたルイズだが、タバサの言葉の正しさに気づいたのだろう。

何も言えずに、悲しげな様子に顔を伏せる。

：タバサも決して、このままでいいなどと思つてはいない。

大切な人を失つた経験をしたタバサ。

彼女だからこそ、彼らを待つてゐる者の気持ちは誰よりもよく理解

している。

しかし、何もできない。

事は一国家の内戦。俺たちはトリステインからの使者であり、それ以上でも以下でもない。

内戦にまで手を出すのはお門違いだし、内政干渉にも当たるのだ。そう理解しているからこそ、タバサは感情と理性の一律背反の間で苦しんでいる。

重い沈黙。

しかし、その静寂を破ったのはこの場にいる人間ではなかつた。

「おや君達、どうしたのかね？」

そろそろ宴が始まる。中へ入つて楽しんでいってくれ」

「ウエールズ皇太子殿下…」

中にいる者達と同様に明るい笑みを浮かべる彼。その顔に悲壮感など欠片も無く、ただ強い覚悟に裏づけされた余裕だけがあつた。

あるいは、押し殺して隠しているだけかもしれないが。不意に、ルイズが顔を上げて口を開く。

「…殿下、無礼は承知なのですが…」

「構わんよ、何でも言つてみたまえ」

「では…失礼ながら、姫様から回収を命じられた品とは…」

「…気づいていたか。そう、お察しの通りアンから私へ宛てたラブレターだよ。」

かつてラグドリアン湖で水の精靈を前に将来を誓い合つた時のもの。

これが表沙汰になれば、最悪トリスティンとゲルマニアの同盟は取り消しになつてしまつ

「やはり姫様と皇太子殿下は…」

「…殿下、どうかトリスティンへ亡命なさいませ！」

姫様もそうお望みなのではありますか！？」

ルイズの必死の説得。

止めてはいけないと言つた俺も、しかし彼女を止めることができなかつた。

ルイズの言葉に、ウェールズは首を振つてみせる。

「…気持ちは嬉しいが、それはできない。

私はウェールズ・テューダー。このアルビオンの皇太子。

私にはこの国と民と家臣たちを命を賭けてでも守り抜く義務があるのだ」

「…守り抜くと仰いますが、しかし勝ち目はあるのですか…？」

突つ込みすぎだと思われるルイズの質問に、しかしウェールズは不快そうな顔はしない。

苦笑しながら答えてみせる。

「いや、無いな。

我が軍が三百、レコン・キスター軍は五万。

これほど兵力差があると、策を弄しても数でもとも踏み潰されるのが関の山だ。

もちろん正面からぶつかつても結果は同じ、まあ我等の敗北は決

定しているな」

「守り抜けないことがお分かりなら、せめて待つている人を泣かせるよひな真似だけは……！」

「……ス・ヴァリエール、ありがとう。

君の気持ちは本当に嬉しいよ。私の命と、そしてアンの心を案じてくれてありがとう。

だが、私は戦わねばならない。

守り抜けるかどうかなど、端から関係ないのだよ。

己が手で支え、守つてこそその祖国だろ。

今アルビオンを見捨てて逃げれば、私たちはもうアルビオンを『我が祖国』と呼ぶ資格を失う。

命ではない、かけがえのない『アルビオンの民の誇り』を失つてしまふのだよ。

アルビオン王国が滅び、この国がレコン・キスタの支配下に置かれるても、民は生き延びる。

その民たちにアルビオン人の誇りを忘れて欲しくないからこそ、私は戦うのだ。

皆の先陣を切つて戦う私の姿を見て、皆の心に誇りといふ名の火を灯すためにな」

けぶるような微笑を湛えるウホールズの言葉は、俺たちの心に染みこんでいく。

これが王族、一国を背負う王族の覚悟というものか。

夕日に照らされて少し赤い彼の顔は、もしかしたら照れてもいるのかもしねりない。

俺は、彼と出会い、そして言葉を交わしたことを一生誇りに思つだろ。

「さあ、アルビオン最後の宴の始まりだ！  
皆、楽しんでいってくれ！」

笑つてそう言い、背を向けるウェールズ。

その顔を見つめ、そして俺は覚悟を決めた。

side out

## 第十九話 覚悟（後書き）

ウェールズカツコよすぎます。

描いて惚れそうです。

俺が女だったら惚れています。▼i▼a自画自贊。

アホなことはさておき、また次回。

## 第一十話 狂氣

side 人修羅

パーティは、佳境に入っていた。

笑顔で料理や酒を勧めてくる貴族達に礼を言いつつ飲み食いしていったが、皆酔ってきたようだ。

部屋の隅で壁に背を預けて眠る者、椅子に座つて船を漕いでいる者もいる。

酒に強いまだ元気な者達もあつちこつちで雰囲気に浸りつつ言葉を交わし、グラスを傾けている。

そこかしこで乾杯を音頭が上がる当初の賑やかさは鳴りを潜め、穏やかな雰囲気が広間を包んでいた。

「…ふう。随分飲んだが、やはりほろ酔い止まりか。  
この体はアルコールにも強いらしい…」

頭がふわっとする心地よい浮遊感に身を任せながら、俺は傍らを見る。

タバサも充分飲み食いして満足したようだ。

酒が効いてきたのか、ほんのり上気したような赤い顔。  
俺の肩に頭を預け、タバサは静かな寝息を立てている。

「あーあーこんなところで寝ちゃって…。  
タバサ…風邪引くぞ…？ つたぐ…」

背中と膝の裏に腕を回し、そのまま華奢な体を持ち上げる。  
いわゆるお姫様だつて、という奴だ。

なるべく遙りやなこよつ氣をつけながら、翻つてうられた密間へと向かう。

「ほり、寝るなり」と寝る…

靴だけ脱がせて、ベッドにタバサを横たえる。隣のベッドでは、酔い潰れたキュルケも幸せそうに眠っていた。その様子を満足げに見やると、俺はテーブルの上の紙にメモを書き残し、部屋を後にした。

”少し出でて。明日の午前中には戻るから心配するな。シン”

：

…

…

夜の城壁。

あちら一帯に歩哨が立って、物々しい雰囲気である。

「貴方は確かにリストaineンからの使者殿…」のよつなとこひへ、どうなさいました？」

兵士たちのまとめ役と思しき男が声をかけてくる。

「ああ…レモン・キスター軍が迫っていると聞いて、少し不安になつ

てね……。

敵はいつ来るかと思つて、少し様子を見に来たのだが……」

「フフ、大丈夫ですよ。

距離からして、敵がここへ到達するのは明日の夕刻から夜半という所でしょう。

となると、決戦は明後日の早朝からとこりこりにならうです

にこりと笑つて説明してくれる兵士。

もちろん、不安というのは大嘘だ。

決戦時期の推測もおそらく正しい。

重火器の無い白兵戦主体の戦争が行われている世界だと、夜襲は余程のことが無い限り行わないのだ。

真つ暗な闇に覆われた状態で乱戦になれば、最悪同士討ちすら起ころし、兵の統率も非常に取りづらくなる。

少数の精銳部隊による奇襲を敢行するような場合でなければ、夜襲はリスクばかりが高く実益が伴わない下策なのだ。

だから、先制攻撃で主導権を得るならば早朝、夜が明けかけている時間帯を狙うのがセオリー。

寝ている敵兵が多く、それでいて暗すぎないから同士討ちの危険は大きく減る。

一番効果的な襲撃ができるのだ。

「なるほど……敵は今どの辺にいるんだ?」

「やうですねえ、西北西におよそ4～50ローニングと言つたところで  
しゃうか」

夜は野営して朝から進軍を開始したとして、一日およそ8時間の行軍。

時速4～5キロの進軍速度と考えれば、休憩時間も考えれば到着時刻もピタリと合つ。正確な情報と見ていいだろ？

「そうか…分かった。

では頑張つてくれ。俺は戦いには参加できないが、武運を祈る

「ハッ！ありがとうございます！」

破顔して俺に敬礼する兵士たち。

少々面映いが、他国の使者に激励されたと思ったのか、士気向上の役には立つたらしい。

俺は兵士たちに軽く挨拶し、城壁を後にした。

⋮

「…行くぞ、西北西だ。セイリュウ」

「…承知」

そして龍は、空を駆ける。

小高い丘の上。

満月が頭上に皓々と輝いている。  
見下ろした平原には、軍の野営陣。  
周りを簡単な柵で囲い、入り口の前に逆茂木を配置してある。  
無数の天幕が張られ、そこかしこで松明の明かりが見える。  
不寝番と思しき兵士たちが陣を縦横に歩き回り、見回りをしている  
様子が見て取れる。

「…さて、始めるか…」。

”魔神アマテラス”！

「おんまえ御前に。御主人様」

肅々と傳く白衣の女神。

”幻魔クー・フーリン”！

「呼んだか、マスター？」

槍を担いで破顔する戦士。

”龍神セイリュウ”！

「…応」

静かに佇む龍。

「行くぞお前ら。久々の大戦おおいくせだ。」

存分に暴れる

ニヤリと笑う、人修羅。

さあ、大地を血に染め上げようか。

：

……

……

丘を駆け下りつつ、命令を下す。

「俺が中央。

左翼はクー・フーリン。

右翼はアマテラス。

セイリュウは上空で竜騎士たちを優先して墜とせ」

『了解

仲魔たちの返事に頷き返し、俺は肺に溜めた空気を一気に吐き出し、そして喉を震わせた。

(ゴオオオオオオオオオウ！――！――！)

人間の可聴範囲外の轟音が、平原を包む。

”雄叫び”。あらゆる者を竦ませる悪魔の咆哮。

体の動きが鈍り、魔力のコントロールも乱れに乱れるのだ。

(なつ、何だ今のは！？)

(体の震えが止まらんぞ…どうなつてる！？)

(敵かつ！？状況を報告しろおつ！-!)

”雄叫び”に三半規管を、さらに脳まで揺さぶられ、慌てて天幕を飛び出してくる兵士たち。

震えで動けない兵士を突き飛ばして逃げ出そうとする者もいる。剣を抜いて陣の外線へ飛び出して敵襲に備えようとする者もいる。指揮官は状況把握ができず、周りの兵士たちに怒鳴り散らすばかり。陣は、既に大混乱を来たしていた。

「…チャンスだ。行くぞッ！  
”デスバウンド”ツ！-！」

「久々の戦がたかが人間じゃ歯ごたえに欠けるが、ま…憂さ晴らしにや丁度いいぜッ！

行くぜエ、”ベノン・ザッパー”！-！」

「御主人様の敵は私の敵わたくし…容赦は致しません…御覚悟ッ！-!  
”プロミニネンス”！-！」

「熱力ロウ…今冷ヤシテヤル…！

”絶対零度”！」

不可視の斬撃が敵を陣地ごと扇状に切り裂いていく。

疾風のような衝撃波が毒を撒き散らしながら陣を貫いていく。

灼熱の火球が弾けて爆炎が辺りを包む。

全てを拒む吹雪が、人の命を吸い取っていく。

一人一撃。

しかし、一切の手加減が無い。

神話の中にだけ語られる存在の一撃に抗えるほど、人の群れは強くはなかつた。

吹き飛ばされて宙を舞う瓦礫。

かつて人だつたモノの欠片が飛び散る。

残酷で幻想的なその光景を彩るは、巻き上げられた血飛沫、土煙、

黒煙、蒸氣。

そのステージで奏でられる音楽は、悲鳴と怨嗟。

戦いと呼ぶもおこがましい殺戮のショーの開幕。

「さあ……いい声で啼いてくれッ！！

フ……フフフ……ツ……フフハハハハハハハハハツ……！」

月明かりを背に、狂氣と歡喜に彩られた男。

残酷な笑みを顔に浮かべ。

悪魔は、咲笑する。

side out

side タバサ

夜半、まだ月も高い頃。

私はなぜか背筋に寒気を覚えて、目を覚ました。

血の匂いがする。

人の悲鳴と怨嗟が聞こえる。

大事な何かが…遠ざかつていくような不安を感じる。

「…」

それは恐怖か、不安か。

窓から月明かりが差し込んでいるにも関わらず、私は目の前の闇に押しつぶされそうになつた。

それらを振り払うように軽く頭を振つて、そして部屋を見回す。

隣のベッドに眠るは、親友。

幸せそうな寝顔と健康的な寝息を立てている。

「ん…もう…そんなに…飲めないわよ…むにぢ…」

気の抜けたその様子に思わず笑みが浮かんでしまう。

私の不安を払つてくれた親友に心の中で礼を言いながら、私は更に部屋を見回す。

ふと見たテーブルの上に、紙切れ。何か書いてある。

それを手に取つて読んだ時、私は不安の正体を知つた。

s i d e   o u t

## 第一十話 狂氣（後書き）

徹底的にダークな人修羅を描いてみました。  
やっぱ悪魔はこうじやないと、ね。  
ノリノリです。いやあ楽しかった。

## 第一十一話（第一部最終話） 終戦

side 人修羅

「ハア…ハア…」

五万の兵力を擁する軍勢。

その野営地は夜でも人の姿が絶えない壮大なものだった。

しかし今、その野営地は見渡す限りの瓦礫と死体の山になっている。もう、悲鳴すら響かない。

死が生に、静寂が賑わいに取つて代わった。

血の匂いが充満するその中で、俺はさく立つた心を鎮めていた。

「…御主人様、見回りが終わりました。

残敵の掃討も終了してございます。

逃げおおせたものは数人にも満たないでしょう」

「…」苦労、アマテラス

さすがに五万の軍勢を残らず叩き潰すとなると、かなりの時間がかかる。

始めた頃には高かつた月は西の空へ沈みかけており、空と大地の境界は薄つすらと明るみを帯びてきていた。

「マスター、こつちももつ誰も居ないぜえ」

「此方モダ」

「クー・フーリン、セイリュウも「」苦勞だった。  
さあ…ニュー・カツスルへ戻ろつか」

⋮

⋮  
⋮

「ただいま…タバサ？」

宛がわれていた寝室へ戻った俺。  
時刻は既に陽が登っている頃。

いるかと思つて覗いてみたのだが、誰もいない。

城の中は、近々攻撃してくるである「レ・ロン・キスター軍に備える兵士たちで慌しく物々しい雰囲気であった。

武器や防具の点検、兵糧の備蓄状況の確認、兵士たちの配置、城壁の破損箇所のチェック…。

籠城戦ともなるとやるべきことは多岐に渡る。

もつとも、既にレコン・キスター軍は潰してきたからその必要もないのだが、説明に困るので俺は何も言つていない。

そのうちアルビオン軍の斥候が情報を得てくるだらう。

ともあれ、忙しく働いている兵士たちの邪魔をする氣にもなれないので、ぶらぶらと城内を歩き回つてタバサを探しているのだ。

しかし、居そうな場所は全て探したはずなのだが、どこにも見当たらない。

俺を置いて先に帰ったなどとこいつもあるまいし……。

などと考え込みながら歩いていたのだが、その思考は急に途切れることを余儀なくされた。

遠くから轟音が聞こえてきたのである。

「何だ、今の音はーー？」

「敵の襲撃かーー？」

「うひたえるなー！ 敵がこれほど早く攻めてくるはずがないー！ 戦の準備を続けよー！」

人をやつて今の音について調べさせるー！ 皆は職務に集中せよー。」

ざわめき立つ兵士を、部隊長が声を張り上げて抑え込んでいる。俺はそれらに構わず、音のした方向へ向けて走り出した。

……

「音源はーーここか。

礼拝堂のようだがーーツー？」

思わず息を飲んだのは、中から濃厚な殺気の放射があつたからだ。思考を戦闘用に切り替える。

奇襲に対応できるよう身構えながら中へ飛び込んだ俺を待っていたのは、想像したくもない光景。

「……ウエールズ殿下……ツー！」

ワルド子爵… 一体何をツ！？

俺が目にしたのは、ワルド子爵の魔法がウェールズ皇太子の胸を貫く光景だった。

何かの魔法だらうか、ワルド子爵が数人。おそらく分身か何かだろう。

それらと戦うサイト君、キュルケ、タバサ。ルイズとギーシュは倒れて氣絶している。

「…シン君か。見ての通りだよ。

私がルイズを手に入れるのを邪魔してくれた皇太子を、消したのさ」

「シン…話は後。手伝つて」

にやりと笑いながら言い放つ子爵。

キュルケとタバサが杖を振るいながら事情を簡潔に説明してくれた。ワルドは敵。それで充分だ。

俺は、拳を握り締めてワルドへ向かつて走った。

椅子がそこかしこにある礼拝堂。

ワルドの横に倒れているウェールズ皇太子とルイズ。タバサやキュルケも分身体と思しきワルドと交戦中。乱戦と言つていい状況だ。大技を使えば皆を巻き込んでしまう。

ならば…。

(ギンツー)

ワルドと視線を合わせ、魔力を口から叩き込む。

「む…ぐつー?」

息を飲んだような声を上げて口元に手をやるワルド。  
相手を黙らせる悪魔の視線、“クロスアイ”がうまく効いたようだ。  
これで、魔法は唱えられない。

既に効果が出ている魔法を止めることはできないから、分身体を消すことはできないが。

「ハツ…！」

動搖しているワルドに、踏み込んで拳を繰り出す。  
ワルドはすぐさま思考を切り替えて身をかわして距離を取ろうとする。

しかし、俺の拳がそれを許さない。

次から次へと連撃を繰り出してワルドを一気に追い詰める。  
避けられないタイミングで放った拳に、ワルドは反射的にレイピア状の杖を出して防御する。

当然、へし折れた。勢いに乗せてそのまま胸部へ拳を叩き込んだ。

「がつ…！」

呻き声を上げて吹き飛び、壁に叩きつけられるワルド。  
手応えは充分。おそらく肋骨が折れているはず。

それでも衝撃で呼吸困難は確実だ。まともに動けるはずがない。

どうやら気絶したらしくワルドに念のため“シバブー”をかけ、タ

バサたちの様子を伺う。

“偏在”は消えたわ。術者の制御が利かなくなつたせいでしょうね

「ひちらも」

二人とも、既に戦闘を終えていた。

俺は、二人に領き返してウェールズに駆け寄る。

「…ウェールズ殿下！しつかりしてください！」

「…致命傷…」

「こんなに傷が深いと、水のスクウェアでも、もう…」

悲しげに目を伏せる一人を尻目に、俺は精神集中を始める。魔力が体中から絞り出されて、空気中に舞い上がる。

緑色の無数の光球となつた魔力は、弾けて周囲を満たしていく。

「…”メ・ディアラハン”…！」

部屋全体を覆つていた緑色の光は、指向性を伴つて収束していく。俺、タバサ、キュルケ、ルイズ、サイト君、ギーシュ、そしてウェールズ皇太子。

仲間全員の傷と体力を全快させる、最上級回復魔法である。致命傷であつても、死んでさえいなければ問答無用で回復させるという異常な回復力。

その分魔力消費も相当大きい。レコン・キスター軍相手に大暴れした後でこれは流石にキツかった。

「ハア…ハア…これで皆回復したはず…」

「シン…今のは何よ…？疲れが一気に消えたわよ…？」

「それは後で…ウェールズ皇太子の様子を確認してくれ…治つてゐる  
はずだから」

体力は戻つても魔力の使いすぎによる疲労感は癒せない。  
息を吐きつつ壁に背を預け、そのまま座り込む。

俺の意識は、そこで途絶えた。

239

side out

⋮

⋮

side タバサ

シン。

私の勇者、イーヴアルディ。

私は、彼に僅かな不信感を抱いていた。  
理由は、圧倒的なあの力と、血の匂い。

昨夜、置手紙だけを残して出ていったシン。

朝になつて戻つてきて、ワルドと戦っていた私たちに加勢し、ワルドを一蹴。

風のスクウェアをああも簡単に倒してみせ、ウェールズの致命傷をすらあっさり治してみせる。

消耗しているようだけど、寝息は健康そのもの。

しかしどうして、いつも濃厚な血の匂いを漂わせているのだらう。

昨夜、私に内緒で一体何をしていたの…？

トリステインへ帰つたら、彼と話す必要がある。

私は、そう決意した。

side out

side ミューズ

…何故、あの男がここにいる？

私が唱えたコトワリ、静寂の世界<sup>シマジマジ</sup>と全てを否定しつくしたあの男が。

感情の要らない静寂を望む私に恨みや憎しみなどという感情は無い。無いが、あの男が危険因子であることは私が一番良く知っている。

実際、あの男は自分と3体の悪魔とで五万の軍勢を駆逐してみせた。かつて私の配下と戦つたあの男を見た時もその力に驚愕したものだが、今度はそれを遙かに凌駕している。

やはり人の力も持っているだけあって、成長速度がただの悪魔とは

段違ひだ。

軍の異変を察知して遠見の鏡で監視していたのだが……あの力は、強すぎる。

レコン・キスタ軍はあのたつた一戦で全戦力の8割を喪失した。軍である以上後方支援部隊が存在していたわけだが、実戦部隊は全て壊滅している。

立て直して再起を図るか、後方支援部隊を再編成して実戦投入するか……。

前者はおそらく数年単位で時間がかかる。

後者では城に籠るアルビオン軍を倒すことはできないし、それでなくとも原因不明の大打撃を受けて士気は最低、脱走者が相次いでいる始末だ。

レコン・キスタは、もうダメだな。

傍らで青い顔をして震える男を一瞥して、私はここを去ることを決めた。

…さらばだ、オリヴァー・クロムウェル。

吠えるように私の背に慰留の声を投げかけるその男を無視して、私はその場を歩き去った。

主を氣取るあの男にも、警告しておかねばなるまい。  
人修羅は、最優先で消せと。

side out

## 第一十一話（第一部最終話） 終戦（後書き）

これにて第一部終了です。

いまいち納得のいかない終わり方になってしましました…。

次は最終章へ入ります。

もつと上手く書けるようになりたいな。  
では次回。

## 第一十一話（最終章）Re:zero（re：ゼロ） 秘密

レコン・キスタの「ユーカッスル攻略軍壊滅から一月。  
何者かによって引き起こされた大虐殺の跡。

アルビオン王室はレコン・キスタ軍が来ないことを疑問に思い斥候を派遣、一日後にこの事態を把握。

以後、調査が続けられたが、いくら調べても下手人は突き止められなかつた。

その余りの惨状から、この事件への印象はとある「文字」に収束し、それが正式名称として呼ばれるようになる。

曰く、”ニユーカッスルの惨劇”と。

公式にも非公式にも多くの調査が為されている。  
しかし、確実な情報は得られず、あくまで状況証拠を元にした推測のみであつた。

”ニユーカッスルの惨劇に関する調査報告書”

一月前に起こったレコン・キスターのニユーカッスル攻略軍壊滅事件。一般に”ニユーカッスルの惨劇”と称されるこの事件によつて、我が軍は敗北の決定した圧倒的不利な状況下から救われた。しかし、この事件には我がアルビオン政府は一切関与していない。政府や王党派貴族に対する内偵活動でも、容疑者を特定するには至らなかつた。この一ヶ月間、全力を挙げて調査したが、事件の全貌は未だ明らかになつてはいない。

しかし、状況と判明している経緯を元に仮説を立てることに成功した。その詳細を以下に述べる。

まず、判明した確実な情報は以下の通りである。

- 1・住民から得られたレコン・キスター軍の目撃情報が、ある夜を境にピタリと絶えていたこと。
- 2・惨劇現場の周辺に、他の軍が行動していた痕跡が一切見当たらなかつたこと。
- 3・その場から逃げおおせた者を見つけられなかつたこと。

以上の点を総合的に踏まえて浮かび上がるニユーカッスルの惨劇の下手人は、以下のような特徴を備えていたと思われる。

まず第一に、その戦闘力である。上記の1から、五万の兵力を擁する軍はたつた一夜で壊滅したことが分かる。その速度から考へても、スクウェアすら一蹴できる程の戦闘力及び広範囲に渡る大量破

壊を引き起こす手段を持っていたことが伺える。特に後者に関しては、完全に破壊されたレコン・キスタ軍陣地を見ても確實であり、特筆に値する。

第二に、軍ではなく個人ないし少數からなる組織（おそらくは10人以内）による犯行であることである。上記の2より、当時、惨劇の現場の近くに別の軍が居た可能性は除外できる。軍が行動していれば必ず足跡が残るし、野営すれば煮炊きの跡も必ず残るからである。また、それらの軍が現場へたどり着くまでに住民の目に一切触れていない点を踏まえても、軍によって惨劇が引き起こされた可能性は限りなく低い。痕跡を残さず行動できるほどの小勢によつて引き起こされたと見るべきであろう。また、この点からも、数的不利をものともせず一方的な虐殺を行つた下手人の異常な戦闘力が見て取れる。

第三に、下手人の非合理性である。少數の手勢で大軍を壊滅せしめたその戦闘力も常軌を逸しているが、状況を鑑みるに下手人の行動には非合理的な点が見受けられる。つまり、レコン・キスタ軍兵士の逃走すら許さず殺しつくしたことである。通常、少數の兵力で多数の敵と戦うならば、その兵力差を多少なりとも補う工夫は必ずする。これ無くして兵力差を覆すことは有り得ない。囮を用いて罠に嵌める、陽動によつて兵力を分散させ各個撃破する、補給を絶つて兵力差を逆手に取るなど、いくつかの手法が考えられるが、これまでに述べた下手人の特徴からすれば、「圧倒的実力差を見せ付けて敵を恐怖に陥れて脱走を誘う」のが最も効率的な手法と言える。しかし、この下手人はそれを行わず、文字通り「皆殺し」にした。これにより、下手人にとつてはただ勝利を得るためにだけの戦闘ではなかつた、という可能性が浮かび上がる。

以上の点は、いずれも謎に満ちたものであり、解明には更なる調査活動と時間を必要とする。次に、これらの点を踏まえ、下手人の動機や目的、正体についての仮説を述べる。

下手人が何者であるかは未だ不明であるが、その目的が地位や名誉ではないことは明白である。敵の逃走を許さず皆殺しにした点、事が済んだ後も名乗り出ない点から、この下手人は自分がやつたと知れることを忌避していることが見て取れる。

また、軍が持っていた物資や殺された貴族の身につけていた金品が手付かずで放置されていた点から、金銭目的だったという線もあり得ない。第一、金銭を奪う対象としては、軍は最も不適当である。それならば隊商などを襲う方が遙かに効率が良く、安全でもある。

現状、レコン・キスタに対する怨恨、あるいはアルビオン政府ないし王党派関係者への協力という仮説が最も少ない矛盾で説明できるが、一方で「ならばなぜあの局面に至るまで手を出さなかつたか」という疑問が残る。手を出したくなかったのか、あるいは出せない状況にあつたのか。いずれにせよ、推測の域は出ない。

次に下手人の正体及び背後関係であるが、これに関しては更に情報が少ない。

アルビオン政府が関わっていない以上、もし我等の陣営に属する者の犯行であつた場合は独断専行ということになるが、それほどの戦力を有していたのにこれまで手を出さなかつたことは不可解の一言に尽きる。あれほどの戦力があれば名声は欲しいままにでき、謀反を企てても成功した可能性が高い。

他国の間者であったという可能性も検討したが、これも可能性は低い。我がアルビオン政府に対する支援行動を取りうる国として最も可能性が高いのは、トリステイン王国である。この点は、外交関係から言つても地理的要件から見ても異論を挟む余地はない。しかし、もしトリステイン王国であるならば、支援行動を行うことをアルビオン政府へ通達しなかつた点が不可解である。非公式にあっても通達はしておいた方がアルビオン政府へ恩を売ることにもなるし、軍事力的に他国を威圧することも可能となり、隠匿するよりも

遙かにメリットが大きい。この点は、ガリア・ゲルマニア・ロマリア・クルデンホルフなどの各国に関するても同様のことが言える。特に、ガリアやゲルマニアは、我がアルビオンとの外交関係の向上を図れる点からしても、他国に比してメリットは大きいと言える。総じて、「国家の意向で動いたにしてはそれらしい動きが無さ過ぎる」のである。

最後に残るのは、組織としてではなく一個人として動いたという可能性である。しかしこのケースに関して有効な推測を行うことは不可能と言わざるを得ない。下手人の正体（特に立場や思想）が判明しない限り、その意図は推測することすらできない。合理性に照らし合わせて行動の意図を読み取るにも下手人の正体に関する情報に基づく必要がある上、上述した「下手人の非合理性」を無視した推論にならざるを得ず、有力な仮説とはなり得ないのである。

この”ニューカッスルの惨劇”以降、当時レコン・キスター軍とも激しく戦っていた我が軍がその下手人だと安易に考える者達によつて、我がアルビオン王国には「虐殺」の暗い噂が付きまとつようになつてゐる。

また、この件は公表していないにしても、各國政府がこの情報を掴んでいることは確実であり、事実各國から公式非公式に事情の説明を求める声も上がつてゐる。当然、情報を掴んでいないアルビオン政府としては「正体不明、目的も不明」としか答えられず、それが各國政府の不信を更に煽る結果となる悪循環を生んでゐる。外部の人間からすればアルビオン政府関係者の仕業と考えるのが最も合理的である以上、アルビオン政府が意図したわけではないにせよ、各國が我が國を軍事的脅威と見なすことに何ら矛盾は生じず、事実そうなりつつある。

惨劇との関与を徹底的に否定し続けるか、あるいはこの事態を奇貨として各國に対するアルビオンの発言力・影響力を強める方向で動くか。どちらにしても一長一短があるが、いずれの方針を探るに

せよ、「下手人の正体及びその意図」が今後の推移の鍵を握ることは明白であり、最も重要なファクターである。何故なら、「五万の軍勢を小勢で殲滅せしめる存在がアルビオン国内に存在した」ことは確実であり、その牙がアルビオン政府に向くことが無いという保証は存在しないからである。この点に比べればこれまで述べてきた疑問や矛盾は取るに足らぬ些事であると断言する。

よつて、「下手人の正体及び意図」を把握することが天下最大の課題であることを重ねて進言し、報告を締め括ることとする。

なお、事は国家の重大事である。下手人の正体は不明だが、スクウェアクラスすら足元にも及ばぬ戦力を有する点から、未確認のペンタゴンメイジないしヘキサゴンメイジである可能性、あるいは何者かに操られた幻獣の可能性、エルフである可能性も考えられる。いずれにせよこの件が露見すれば「始祖の教えに外れた悪魔を擁する国」としてアルビオン王国そのものが異端認定を受けてしまうといつ最悪の事態も想定しうる。

よつて、この報告書を最上級機密文書に指定。

国王及び宰相以外の閲覧を禁じ、先500年間は地下書庫に封印するものとする。

## 第一十一話（最終章 Part 010 009） 秘密（後書き）

事件後の経緯の説明に報生書と云う形式を用いる。いくつかのフィクションで見られる手法ですが、謎めいた雰囲気を出すにはうってつけです。

感情に訴える文より論文みたいな理性に訴える文の方が書きやすいしそっくり来ます。その割に文がちょっとぐどいかもしれないけれど。

## 第一二三話 悪夢

side 人修羅

闇。

見渡す限りの闇があつた。  
まるで原始の時代の夜のような。  
ねつとりと絡みつくような。  
質量を持つような、重厚な闇が。  
ポタリ、ポタリと水滴の音だけが、まるで洞窟の中にいるかのよ  
うに響く。

俺は、ただそこに立っていた。

「これはどうじだ。

俺は何故ここにいる。

頭の中で呼びかけてくるお前は誰だ。

(よくも…)

(何故殺した…)

(お前も死ね…)

体に力が入らなくなる。

悪魔共から恐れられ、常に怨嗟の声を向けられていた俺。  
何故今更怨嗟の声などに惑わされるのだ。

不意に、闇がうねるようにな形を変えて、俺の体へと伸びてくる。  
薦か何かのように絡みついてくるそれ。

(…よくも…！)

(…何故殺した…ア…！)

(…お前も…死ね…ッ…！)

怨嗟の声が、だんだんと濃く、強くなっていく。

心を奥まで抉り取つていくようなその声に、俺は顔を歪める。

「…させ…やめろ…ッ…！」

絡みついてくる闇はまたも形を変え、それは人の腕のようなものに  
変わる。

千切れた腕。折れて骨が飛び出した腕。  
それらが胴から切り離されたままに、俺の体を掴み、締め上げてい  
る。

不意に目を前へ向けると、見覚えのある顔。

今まで俺が殺した人間たちの顔。

顔が半分抉れて脳がむき出しになつた顔。  
目玉が飛び出てぶら下がつている顔。  
口が切り裂かれて血を流している顔。  
日々に、怨嗟の声を上げている。

(…よくも…！)

(…何故殺した…)

-  
-  
-  
?

夢たたのか

じつとりと汗をかいた顔と首筋。

備は軽く腕を動かして  
とこか痺れたよーな感覚の体を探るよーに  
見る。

繋がれた左手をそっと右手で離した

「…どうしたの？」

不意に後ろからかけられた声に、俺は振り向いた。

「…起こしてしまつたか…？」

「魔されてた：大丈夫？」

ベッドからこちらへ目を向けているタバサ。

その畠には、こすりを氣遣うよくな色が見て取れる。

「……ちよつと悪夢を見ただけだ……」

「悪夢は、辛いことがあつた時か罪悪感を抱えている時に見るもの」

「罪悪感…？ そんなものは無い。

俺は何も間違ったことなどしていないんだからな」

夢の内容を振り払おうと、つい語氣を強めてしまう。言つた後に、しまつたと思った。

タバサはそれに動じることなく、全てを見透かすような澄んだ目で俺を見つめている。

「…」ニユーカッスルの惨劇”…

「ツー？」

咳くよづいた言葉に、タバサの言葉について反応してしまい、俺はまた後悔した。

そう、俺は罪悪感に苛まれていたのだ。

人の心はとうに薄れていたと思っていたのに、俺は人を殺したことを見つめている。

ボルテクス界では悪魔を掃いて捨てるほど殺してきた。

その中には悪魔と化した友人も居たが、あれは悪魔だった。俺は、ハルケギニアへ来て初めて「人を殺した」のだ。

最初は、ラ・ロシエールだつたらうか。

酒場を襲ってきた傭兵達を蹴散らし、数十人を殺した。次にニユーカッスル。

仲魔と共に五万の軍勢を残らず殺し尽くした。

戦っている最中は罪悪感など感じる暇は無かつたし、その後もやることは色々あつたから、考えている暇など無かつたのだ。だが、こうして曲がりなりにも状況が落ち着いてくると、思い出しが手に蘇ってくるのだ。たくもない「人を殺す感触」が手に蘇ってくるのだ。

毎晩、だんだんと悪夢は酷くなつてくる。

「このことは、タバサには言つていない。  
気づかれてはいるが、言つわけにはいかない。

あの事件はもう魔法学院内でも噂になっている。  
下手人はどれほど酷い奴だろうと散々に言われているのだ。

俺がやつたなどと言えば、俺の主であるタバサまで…。  
余人に知られるかどうかなどこの際関係が無い。

俺は、否定していなければならないのだ。

「…やはり、貴方が…」

「ツ…違つツ…」

「嘘。何故隠すの」

「隠してなどいない。俺はやつていない

重ねて否定する俺の言葉にもう無駄だと悟つたようだ。

目に微かな落胆の色を浮かべてこちらを一瞥した後、顔を俯けてベッドに横になった。

俺は、何も言えないままそれを見つめるしかなかつた…。

s i d e o u t

s i d e タバサ

シンが毎晩魔されていることは知っていた。  
その度に、私は彼の手を握った。

(大丈夫、貴方は一人じゃない。私が側にいるから)

そう、言い聞かせるよ。つい。

彼が魔される理由は、私には察しがついていた。  
さつきの反応を見ても、”惨劇”は彼の仕業であるように思える。  
彼がそれほどの力を持つているとは思わなかつたけれど、あり得ないことではない。

(彼は、何故話してくれないのでさう)

初めて感じる寂しさ。

”惨劇”的下手人と知られれば私にまで嫌われるとでも思ったのか。  
事が知れれば私に危害が及ぶと思ったのか。  
そんな心配をすることは、私を信じないと言つとのと同じ。

(シンは、私を信じてくれていない)

溢れそうになる涙を隠すよ、泣くくなつた。

side out

side ジョゼフ

「… よくもまあこんな機密文書を『写』してこれたものだな」

王の私室。

余人が入ることを堅く禁じた、俺の部屋。

俺はそこで使い魔と二人きりで密談していた。

「全く苦労したぞ。ありとあらゆるマジックアイテムを駆使してようやくだ。

まあ投資分の価値はあるだろうがな」

俺はミューズが手に入ってきたアルビオン王国諜報部の報告書を読みつつ、呆れたように咳く。

「しかし… アルビオンも下手人が誰かは把握していないようだな。様々な可能性が検討されているようだが、どれも根拠は無い」

「そうだろうな。奴にこれほどの力があることを知っているのは私だけだろう」

「奴…？」ミューズよ、貴様下手人が誰か知っているのか！？」

使い魔の言葉に、俺は目を剥いた。

これほどの力の持ち主と、接触できるかも知れない。

この者と対峙したとき、俺は心動かされずにいられるだろうか。奴の殺氣と圧倒的な力を前に、俺は恐怖せずにいられるだろうか。命惜しんで、涙を流せるかも知れない。

そんな俺の心を知つてか知らずか、ミューズは平然と答える。

「ああ、知つてゐる。遠見の鏡で見ていたからな。

奴の名は『閻羅シン』、悪魔の力を宿した人間……”  
人修羅”だ”

「…その辺について詳しく述べよ」ハーネーズ。

金も人も好きなだけ使え！一刻も早くこの者の素性を調べ上げるのだ！」

俺は笑い出しそうなほど歓喜を抑えられずにいた。

早く会いたい！

命までその殺氣を体中に浴ひてみたい  
俺はこの片手でお前を殺す。

お前ほどのようにして俺を殺してくれるのだ？

何度も、何度も、俺はお前に殺されたい。

前はさうと、殺氣を入れた一撃で俺を傷つけられるだらう。

死ぬほどの痛みを味わわせてくれるだろう。

つけてくれるだろう。

震え止かるほどの恐怖を味わわせてくれるだニハ

れるだろう。

そんなお前であれば、

「フッ…フフフフッ…フフハハハハハハハハハハハハ…！」

退出していく使い魔の背に、俺は期待を抑えられなかつた。

s  
i  
d  
e

o  
u  
t

## 第一二三話 悪夢（後書き）

今回はダークな描写に終始しました。

どこのか自分を狂わせないところなの描いてられない。  
が、墮ちるところまで墮ちたら戻つてこれなくなりそう。

その辺のさじ加減も描いてて面白かったなんですが  
そんなわけで、また次回。

## 第一十四話 離間

side タバサ

穏やかな朝。

私は早くに目覚め、特にすることもなく窓から外を眺めていた。朝日が差し込み、心地よい風が頬を撫でる。

歌うように響く鳥の声が、朝日を祝いでいるようすにすら思える。

爽やかな朝。

しかし、私の心はそれを素直に喜べなかつた。

昨夜のことが、まだ心の奥に棘のように引っかかっているから。

起きた時にはシンは部屋に居なかつた。

どこへ行つたのだろうとは思つたが、あんなことがあつたためか、探す気にはなれなかつた。

シンとの関係がギスギスし始めている。

けれど、主人と使い魔という関係だけは生涯変わらない。

この不安定な関係をいつまで抱え込むことになるのだろう。

それを考へると、心が重くなつた。

それを振り払うように、着替えようと踵を返しかけたその時、空に向こうに黒い点が見えた。

(…あれは…梟?)

こちらへ真っ直ぐ向かつてくる。

“ひつや、ひしの部屋を垣籠してこねりこそ。  
で、あれは…。

(……指令……)

不意に、重かつた心がさらに冷たくなつていいくのを感じる。  
目から感情の光が消えていくのを感じる。

私はその鳥を睨みつけるように、一いちらへ飛んでくるのを待つた。

……

……

：

(……“惨劇”の下手人の調査……)

それがジョゼフからの指令であった。

イザベラを介さず下された、ジョゼフからの直接命令。  
どうしたことかは分からぬが、その指令書を読み込んでいく。

“惨劇の下手人を調査せよ”

“素性や正体までは分からなくてもいい、手がかりの一つも増えれば上々”

“一いちらで掴んでいる特徴を併記しておるのでこれを手がかりに調査すべし”

曰く……

”下手人は四人組”  
”一人は白衣の女”  
”一人は槍を持った男”  
”一頭は青い鱗に枝分かれした角を持つ蛇”  
”一人は体に刺青の入った15～7歳くらいの少年”

それを読んだ時、タバサの心は凍りついた。  
心当たりがあるどころの話ではなかつたから。  
しかもそれを自分に言つてくるという事は…

(ジョゼフは、シンが下手人であること、シンが私の使い魔であることを知つている…?)

仮にそうだとして、それを自分にほのめかしてくる以上、何か意図  
があるはず。

殺せというのか、あるいは差し出せというのか。  
どちらかは分からないが、しかし直接そう言つてこないのが気にか  
かる。

ジョゼフは、自分に対し絶対的な命令権を持つている。  
母を人質に取られている以上、逆らうことができない。

状況は、一気に切羽詰つてしまつた。

(ジョゼフには逆らえない。けどシンを売るわけにもいかない)

もつと言えば、わざと指令に失敗するということもできないのだ。  
失敗すれば、それに対する罰として母に危害が加えられることも考  
えられる。

シンが下手人だと向こうが気づいている以上、嘘を報告しても同じ

結果に終わる。

逃げ道を完全に塞がれた状態で、ジョゼフは自分に『シンを売れ』と言つてきているのだ。

「…どうすれば…いいの…？」

声が震えていることが分かる。

寒くもないのに体まで震えている。

泣き出しちくなるような状況。

大切な人達が失われてしまふかも知れない恐怖。

「…私が、守るしかない」

震える自分を叱咤して、睨みつけるように顔を上げる。

タバサは何をするでもなく、沈思黙考を始めた。

大切な人を救う方法は無いか。

あらゆる可能性を細部まで検討する彼女の頭脳は、今、それまでの人生で最も早く回転していた。

side out

side ジョゼフ

「…//ユーズ、手筈は整えてあるか

「ああ、既に指令は送つてある。

お前の姪は聰明な娘のようだからな、あの内容ならば此方の意図は察するだろ?」

「お前の世界ではこれを『離間の計』と呼ぶのだったか。シャルロットはどう対応すると思つ?」

「…さあな。私はその娘を伝聞でしか知らん。が、普通に考えれば人修羅を売るだろ?」

メイジが生きていれば使い魔は替えが利くが、母はそうはいかん。いずれかを差し出さねばならんのなら…それが合理的な判断だろ

う

ジョゼフの顔には面白がつている色が浮かんでいる。

一方、氷川は何も感じていないように無表情であった。

「人間を思い通りに操るのは簡単ではない。しかし、追い詰めてやればやるほどそれは容易になる。追い詰めるとは、つまり選択肢を減らしてやること。あの娘は今、母を売るか使い魔を売るかの一択を迫られている。人修羅が自分が売られたと気づいた時にどうするかは知らん。が、どう転ぼうがやりやすくなる」

「ククッ…ああ、そうだな。

こうしておけば人修羅とやらの俺に対する憎悪は一層強くなるだろ?」

これでいい…ああ、待ち遠しくてたまらぬわ!」

笑うジョゼフを見る氷川。

無表情にしか見えないその顔に微かに不快そうな色が浮かんでいる

のに気づける者はそう多くない。

(姪に無理な一択を押し付けて喜ぶ伯父など他に例があるまい…)

やはりこの男は、破綻している。

最も、その破綻者に付き従つて年端もいかぬ少女を苦しめて何も感じない私も同様だが。

このような破綻者に支配される国。

魔法という力に溺れ、6000年続いた特權という毒に溺れた貴族

達。

ブリミルの名の下に世の権力者達を洗脳する教皇庁。

それらに反旗を翻す力すら持てず地に伏せる平民たち。

この国もまた、破綻しているのだ。

(ガリア受胎…準備が必要かも知れぬ)

呵呵大笑するジョゼフの声をBGMに、氷川は沈思黙考した。

side out

## 第一十四話 離間（後書き）

ちょっと短いですね。申し訳ない。

では、また次回。

## 第一十五話 選択

side 人修羅

俺は、悩んだ。

悩んで、悩んで、悩み抜いた。

タバサに言われた言葉が棘のよつに心から抜けなかつたからだ。

(嘘。何故隠すの)

何故。

それは、虐殺者の汚名をタバサにまで届かせないため。

しかし、それは欺瞞なのではないかという気持ちもあつたのだ。  
タバサの口ぶりから、十中八九俺が惨劇の下手人だと気づいている。  
気づいた上で、俺がそれで苦悩しているのを察した上で、俺に聞い  
てきた。

(彼女は、俺に正直に話して欲しかつたのではないか)

あの時は焦つていてそこまで気が回らなかつたが  
もし、逆の立場なら?

もしタバサが惨劇を引き起こして、それを必死になつて隠され  
たら?

俺は責める気にはならないが、寂しくは感じるだろ。

それが、あんな境遇にあつたタバサであれば尚更だ。

俺は、タバサから聞いた彼女の過去を思い出していた。

父を殺された。

母は心を壊された。

人形を娘と思い込み、実の娘を刺客と思い込んで、タバサは罵声を、物を、投げつけられた。

泣く気力すら湧かないままに修羅場に放り込まれ、訳も分からぬまま命を賭け続けてきた。

誰も、何も、信じられないままに。

そして、彼女は俺を召喚した。

それは、彼女にとつての転機であり、運命の転換点。

そう思うのは、俺の自惚れだろうか。

そんなことを思いつつ、右手を眺める。

”イーヴァルディ”

俺には読めない字だが、ハルケギニアの御伽噺に出てくる勇者の名なのだそうだ。

(俺が勇者、か…悪魔の力を宿した俺が…)

正直、俺には重過ぎるルーン。

しかし、俺を勇者と呼び、助けて欲しいと頼ってくれたタバサを思えば、嬉しいものでもあった。

(俺は、タバサにとつての”勇者”たりうるのか)

”惨劇”を引き起こした張本人。

悪魔を従える悪魔。

人の形をした修羅。

とてもじゃないが”勇者”なんて柄じゃない。

俺は、タバサにとつての”勇者”たりえない……。

そこまで考え、ふとその言葉を反芻する。

「タバサにとつての、”勇者”……」

俺は、何か勘違いしていたのかも知れない。

”タバサにとつての勇者”と、”世間一般における勇者”。  
その二つが、必ずしも同一とは限らないのではないか。

タバサのために己を鼓舞し、勇気を奮う。

その姿を以つて、タバサの勇気を呼び起します。  
それができるなら、俺でも”タバサの勇者”たりえるのではないか。

(俺は、”君の勇者”になれたかい?)

タバサに、そう聞いてみよう。

勇気を奮つて全てを話し、タバサの勇気を呼び起させるか、やつて  
みよう。

自分を見限るのは、それからでも遅くない。

「行こう… タバサのところへ」

顔が幾分か明るくなつたことを自覚しながら、俺は踵を返した。

私は、悩んだ。

悩んで、悩んで、悩み抜いた。

無理な一択を迫られて、どちらも選べなかつたから。

(シンとお母様と、どちらも失うことなんてできない)

どちらも私にとつては掛け替えのない存在。

シンは私を信じてくれていないように感じるけれど、それでもやっぱり私の使い魔。

まだ短い付き合い。

けれど彼が信頼に足ることは充分分かっているし、彼自身にも好感を持つている。

お母様は私を忘れてしまつてゐるけれど、それでもやつぱり私の母。罵声を浴びせられ、物を投げつけられ。

それでも私のたつた一人の母で、私は母を誰より愛している。

どちらも、失うなんて考えられない存在。

シンか、母か。

どちらかを選べば、どちらかを失う。

どちらも失わない方法…一つだけあつた。

私は、それに気づいてしまつた。

リスクは、高い。

途方もなく大きい。

シンも母も失わずに済む代わりに、私は大きな物を失うことになる。  
正直、怖い。

怖くて悲しくて、想像するだけで手が震えた。

けれど、それを犠牲にしてでも、私は一人を選ぶ。  
シンにも、母にも、生きて笑っていて欲しいから。

そのためなら…何を失っても構わない。

私はそう決意した。

不思議と、決意を固めたせいか、手の震えが止まる。  
私はふと微笑んで、自分に言い聞かせるように呟いた。

「行く…一人を救いに」

目に覚悟の光が宿るのを自覚しながら、私は踵を返した。

side out

## 第一十五話 選択（後書き）

トイ・ストーリー3見てきました、3Dメガネかけて。  
ぶつちやけアレなくていいなあ、2Dで見たかった。  
何か目が疲れる割にそんな凄く感じない。

## 第一十六話 捜索

side 人修羅

タバサに、全てを話そう。

そう決めた俺は、女子寮の廊下を足早に歩いていた。  
時刻は既に夜。

静まり返った廊下が、壁に所々設置された燭台に照らし出されている。

まだ起きている者もいるようで、部屋から押し殺したような笑い声  
が聞こえてきている。

タバサの部屋の前までたどり着いた俺は、田を閉じて軽く気息を整  
える。  
ノックをして、ドアを開けた。

「…タバサ？ 僕だけど…あれ？」

部屋には、誰も居ない。

様子を見ると、ちょっと席を外しただけのようにも見える。  
タイミングを外されて肩透かしを食らったような感覚。

「…朝まで待つか…」

いずれ帰つて来るだろ？

そう思つた俺は、氣を取り直して彼女を待つことにした。

「遅い」

そのうち帰つてくるだらうと思つて待つうすむ、夜が明けてしまつていた。

まさか、タバサの身上に何かあつたのか？

「…何よ朝っぱらから…タバサあ？」  
見てないわよ…サイトお、アンタ知ってる…？　「知らないって」

「…おはよう、シン…朝からビビしたんだい…？」  
タバサ？いや、見ていないな…心当たりも無いが…いないのかい

ルイズもギー・シユも知らないという。  
キュルケなら何か知つているだろウか……。

「ふわあ……こんな朝早くござりましたのよ、シン……夜這こするこは遅すぎるわよ……？」

眠そうな目で「冗談を飛ばしてくるキュルケに事情を話して、何か知  
らないか尋ねる。

「昨日の夜から……ね。遠出の準備をした形跡は無いのに一晩戻つてこなかつた、と」

「ああ……何か嫌な予感がしてな。タバサが行きそうな場所に心当たりは無いか?」

「うーん……前からたまに二、三日部屋を開けることはあつたわ。けど最近はそれも少なかつたし、どこへ行つてゐるのかは私も知らないのよね。梶が届ける手紙を見て出かけていくようなんだけど。

一度、その手紙が来る時に居合させたことがあつたから覚えてるわ。

急に真剣な顔つきになつて、『急用ができた』って学院を出て行く。

聞いても詳しいことを言おうとしたから私も聞かずに置いたんだけどね」「

そこまで聞いた俺は、キルケに礼を言つてタバサの部屋へ戻つた。これ以上有益な情報は無さそうだったから。

：

部屋の窓から外を眺めて、俺は途方に暮れていた。

タバサを探そうにも、学院内にいなのは間違いない。

向かつた先の手がかりが無い以上、探す當ても無いのだ。

セイリュウを使つていない以上馬か徒步で出て行つたはず。

だが、時間経過を考えればもう結構な距離を稼いでいるだろう。しらみつぶしに探せる面積ではない。

「…考えていても仕方無いな

俺は踵を返して、聞き込みを更に広げることにした。

学院で働くメイドや正門を守る守衛、厩舎の職員に聞き込んだ所、新たにいくつか分かったことがあった。

タバサは昨夜早いうちに、人目を避けるように学院を出て行つたらしい。

馬は使わず徒歩で、近くの林へと姿を消したそうだ。  
守衛もメイドも、何か事情があることを察して声をかけたりはしなかつたという。

まだそこにいるとは思えないが、何か手がかりが見つかるかも知れない。

俺は、その後を追つことにした。

誰もいない林。

まだ朝も早く閑散とした林。

鬱葱と呼ぶには明るすぎるが、一方で開放的と呼ぶには木々が茂りすぎている場所だった。

ひんやりした朝の空気が肌に心地よく、響く鳥の声が微笑ましい。だが、そんなものに和んでいる場合ではなかつた。

「何だこいつは…『ゴーレムか？』

不意に茂みの奥から現れた人形。

明らかに人工物で、かつ生きているはずもない無機物であることも確か。

ゴーレムかと思つたが、それにしては動きが精巧である。

こちらを襲つてくる雰囲気もなく、暫く様子を見ていたのだが…

『聞こえるかね、人修羅』

不意に、ゴーレムから聞き覚えのある声がする。

俺は、驚いていた。

ゴーレムが喋つたことにはない、俺を『人修羅』と呼んだからだ。

その呼び名を知っているハルケギニア人は多くない。一緒に旅をしたルイズ達でさえ知らないことなのだ。

「…何者だ」

『私の声を忘れたか？静寂のコトワリを見事に否定してくれたではないか』

「ツ…氷川か！？何故貴様がここにいる！？」

「ゴーレムは何だ!? 隠れていないで姿を現したりビツだッ！」

『私も君と同様、使い魔として呼び出されたのだよ…。これはゴーレムではなくガーゴイル。魔法仕掛けの人形だ。姿を現すことはできない。私は今ガリアにいるからな。ガーゴイルを介して声だけを届けている。

…が、そんなことはどうでもいい。

君は主を探しているのだろう?あの蒼い髪の少女を』

律儀にもこちらの質問に全て答える氷川。

相変わらず怜俐だがどこかマイペースでいけ好かない男である。

「貴様…タバサをどこへやつた!?」

『タバサ? シャルロット姫のことか、陳腐な偽名だな…。

さあ、どこにいるかな。

私には分からぬが、ガリアへ来れば会えるような気がするぞ?』

フフ…』

「ガリアの何処だ!/? 貴様、何を企んでいる!/?

ゴーレムを攻撃する態勢を整えて、俺はさらに聞く。

『ガリアのオルレアン邸。ラグドリアン湖のガリア側の湖畔に位置する屋敷だ。

企みなど見え透いているだろう? 君を招待するためだよ』

それだけ聞けば十分だ。

この程度の危険は幾度も経験しているのだから。

「いいだろう…すぐに向かつてやる。

…言つておくが、タバサには絶対に手を出すな。

彼女の身に何かあつたら、お前が恐れた俺の力は、どう暴走するか分からんぞ」

そういう捨てて、俺はセイリュウを召喚して飛び乗った。

「行けッ！南のラグドリアン湖へ向かつんだ！」

事情を把握したのか、セイリュウは返事をする間も惜しんで全速力で飛んでくれた。

「…待つてろ、タバサ…！」

side out

side ミューズ

…相変わらず火の玉みたいな少年だ。

すぐに熱くなるところは変わつていしないな。

ああいうタイプは扱いやすい。

しかし、人質を取るなどという陳腐な手を使う羽目になるとはな…

不本意だ。

とはいえ、効果が高いからこそよく使われるのだ。

よく使われるからこそ陳腐と呼ばれるようになる。

「簡単なものだ。

…シャルロット姫、君の騎士様はすぐに来るそうだよ」「

嘲笑を浮かべて見やつた先には、猿轡を噛ませて拘束された蒼い  
髪の少女。

その目には苦渋の色が濃く浮かんでいた。

s i d e o u t

## 第一十七話 潜入

この世に、時間ほど残酷なものがあろうか。

悪夢のような苦しみを味わう時も。

夢と見紛うような至福の時も。

常に、時計は無情に時を刻む。

決まった速さで、淡々と。

しかし、常に時間とは相容れない”何か”を望むのは人の性。

”どうか愛する人と共有する時が、永遠ならんことを”

”この悪夢のような時間が、一秒も早く終わりますように”

”運命の選択を間違えたあの時へ帰りたい”

”待ち遠しい未来図を早くこの目で見てみたい”

この世に溢れた”時”への願い。

”時”は、それを決して拒絶しない。

ただ、無視するだけである。

しかし、時の流れに”もしもIF”を願うことができるのは、人だけである。

side タバサ

私は、ただひたすらに願つた。  
”来ないで”と。

シンがここへ来てしまえば、私の願いは全て水泡に帰してしまつ。手首にきつく結ばれた荒縄の痛みも、口を封じる猿轡の苦しさも、今はどうでも良かつた。

(シンが、ここへ来てしまう)

私は、母様もシンも失うわけにいかない。

二人を失つた未来など、私にとつては地獄と同じ。  
それを見ずに済むのなら、私はどんな代償も支払う。

そう、私の”命”でさえも。

それが私の選択。

私の命を代価に、二人の助命と今後の不干渉を願つた。  
勝ち目の薄い、賭けと呼ぶのもおこがましい選択。  
けれど、確実にどちらかを失うよりは余程いいはずだつた。

そして、私は負けたのだ。

命を切り札にした私の願いは、しかし嘲笑で迎えられ、私はそのまま囚われてしまった。

氷川というこの男は、私の命を囮としてシンを誘き出した。  
シンは今、此方へ向かっているらしい。

来てはならない。

事此処に至れば、私の願いはもう叶わない。

母様も、私自身も、既に敵の手の内。

この上シンまで敵の手に落とすわけにはいかないのだ。

思えば、私は逆上していたのかも知れない。

勝ち目の薄い賭けだとは分かつていても、それ以外無いと思つてしまつた。

他にやりようは無かつたのか。

私の選択は何をもたらした？ただシンの足枷になつてしまつただけではないか。

私は自分の馬鹿さ加減を今更になつて思い知つていた。

” お願い、来ないで。私を助けようなんて思つてはダメ。逃げて…  
！”

身動きも取れず、口も封じられ。

叫ぶことすら叶わぬその願いがシンへ届くことを、私はただ祈り続けた。

side out

side 人修羅

目を向けたその館は、奇妙な程に静まり返つていた。

時刻は夜。

向こう岸が見えないほど巨大な湖の側に、その館は静かに佇んでいた。

森から聞こえる、木々の囁き。

湖から聞こえる、水のせせらぎ。

月光に照らし出されたステージで奏でられる合奏。しかし、今の俺にそれを楽しむ余裕など無かつた。

館の周りには猫の子一匹見当たらず、奇妙なほどに静まり返っている。

しかし、だからといって誰も居ないと思い込むほど馬鹿ではないつもりだった。

「……<sup>ヒストム</sup> 気配遮断魔法」

自分の気配を消し去る魔法。

その瞬間を目にした者がいれば、シンが急に消えたように見えただろう。

気配を遮断する不可視のシールドが張られた今の彼の存在に気づけるのは、彼以上の力を持った者だけである。

タバサは既に敵の手の内にある。

である以上、”誘引魔法”<sup>リペラマ</sup>を併用した陽動を使うことはできない。

騒ぎを起こした時点でタバサが害される可能性があるからだ。

そもそも、真っ向から行つてもタバサを盾にされればどうじょうもない。

ならば、気配を消して忍び込み、奇襲をかけてタバサを解放する以外に手は無い。

魔法の効果が現れたことを確認した俺は、足音を立てないように館へ駆け寄る。

しかし、正面玄関のドアには手をかけない。

どこの世界に真正面から忍び込む馬鹿がいるだろうか。

陽動した上でならそれもアリだが、そうでないなら敵も「こ」を一番ケアするのだから、ここから入る手は無い。

一階の窓はどれも締め切られている。

が、見れば一階には少しだけ開いた窓があった。

「…よひ」

近くの木の枝に飛び乗って、そこから壁へ飛び移る。片手で掴める程度の取っ掛けがあれば、この程度の芸当は可能だ。窓の隙間を覗き込み、人の気配が無いことを確認した俺は、そつと窓を開いて体を滑り込ませた。

(…潜入は成功)

俺は、廊下の所々に置かれている遮蔽物に身を隠しつつ、各部屋の気配を探りながらタバサを探した。

⋮

⋮

⋮

微かに人の気配がしたその部屋。

しかし、その気配が今は消えている。

(…何かいる。俺の存在にも気づかれたと見るべきだな)

静かに、声を上げさせることなく拘束する必要がある。俺はそつとドアに手をかけつつ、目に魔力を集めた。だが、そこに声がかかる。

「…お入り下さい」

「ツー？」

「敵ではありません。私はシャルロット様の執事、ペルスラン。貴方のことはシャルロット様から伺っています」

：余人に気取られないように抑えられたその声と内容からして、どうやら敵意は薄そうだ。

とはいえ、まだ信用はできない。

俺はそつと室内に踏み込んで、ドアを静かに閉めた。

部屋の中央に置かれたテーブル。

椅子に腰掛けて燭台の明かりを頼りに本を開いている初老の男が、そこにいた。

すっかり白髪に制圧された髪は綺麗に整えられ、左目の片眼鏡モノクルが燭の明かりに煌いている。

正装ではなく寝巻きであることだけが、今が勤務時間外であることを示していた。

「シャルロット様の使い魔、シン様ですね？」

「…そうだ」

「そう警戒なさらないでください。事情は把握しております。

…シャルロット様はご無事ですよ。

手足と口を拘束されではあります、湖に面した部屋に…」

静かに語るその声には、何の色も見えない。

ただ、この状況を前に必死に感情を殺しているのだろうと、誰に教わるでもなく感じ取れた。

「…氷川もそこにいるのか？」

「あの男は夕刻、館を出ました。

ただし、見張りを残しています」

「…解せないな。奴はタバサを盾に俺を誘き出した。

なのに俺に手を出さずに去るとは…」

「…その見張りが手練れなのです。

おかげで、私も隙を伺っていましたが、手を出せませんでした。

…エルフです」

…静かに、しかし吐き捨てるように咳く彼。

主を人質に取られたのに何もできない自分を嘆く無念の色が見て取れた。

「俺はエルフを知らんが、それほどまでに強いのか

「エルフの使う先住魔法は威力も凄まじいですが、何より厄介なのがその堅い守り。

”反射”<sup>カウンター</sup>と呼ばれる防壁は、魔法も物理攻撃も通しません。

その土地の精霊と契約して自然を操るのがエルフの魔法。見知らぬ土地ではその真価を發揮できませんが、奴は既にこの地の精霊との契約を終えている。

あの男を下せるほどのメイジはおそらくハルケギニア中を探しても数人とおりますまい

「…いい情報を貰った。これで対策が打てる

薄つすらと笑つてそつ答える俺を、彼は驚愕の顔で見やつた。

「…エルフの”反射”<sup>カウンタ</sup>を打ち破る手があると…！？」

「ああ、守りが堅いならその守りに穴を作つて打ち崩すだけのことだ」

彼は、そう言い放つて不敵に笑つた。

side out

## 第一十七話 潜入（後書き）

お盆休みが終わって、更新再開しました。  
ちょっと間が開いたので勘が鈍つてないかちょっと心配です。  
あと、前後の矛盾が起きていないかもちょっと心配です。  
気づいても黙つてやってください（待て  
ではまた次回。

## 第一十八話 切札

side 人修羅

息を潜めて、気配を探る。

どうあっても敵に気取られる訳にはいかないのだ。

突入して先手を打つ。

不意の一撃で、沈める。

ただし、それにも対応されてしまう可能性がある。  
それを計算に入れてなお敵の上を行く必要があるのであるのだ。

出来るだけ静かに、仲魔を召喚する。

口の前に人差し指を立てて、声を出さずに沈黙を命令。  
その後、軽く指を動かして動き方を指示。

あらかじめ指話の符丁は決めてあるから、ある程度の指示はこれで可能。

あとはその場の状況でやるべきことは理解してくれる。  
彼らも、俺の中から見ていたから事情は全て把握している。

指示に従い、音を立てずにその場を離れていく彼らを見送り、俺は睨むようにドアに目をやつた。

右手に意識を集中し、力を集めて、収束。

(… まあ、タバサを返してもらおうか)

仲魔の準備が整つまでの数十秒を待ち、俺はドアを蹴破つて中へ走り込む。

「貴様……」

長い耳に長い金髪の男が此方を睨んでいる。  
俺の存在に気づいていたようだ。

タバサが奥の窓の下に転がされているのを確認。  
男が何か言おうとするが、待つてやる義理などない。

「ジャツ……！」

右手の人差し指から、糸のように細い光の針が飛んだ。  
本来はこの数百倍は大きい光弾になる。

万能属性、”至高の魔弾”。俺の切札である。  
その特徴は、確実性。

ダメージを軽減させる手段はあつても、完全に防ぐ術は無い。  
物理攻撃技の一種だが、”物理反射魔法”でもこの一撃は防げない。  
防ぐ術が無い、故に”万能”属性なのだ。

「無駄だ」

恐らくペルスランが指したエルフであろう男が言い放つが、そんな  
ものに構う余裕は無い。

金属と金属がぶつかるような甲高い音が響く。  
見れば、至高の魔弾は光の壁のようなものに止められていた。  
互いに互いを押し合い、そして光弾は弾けた。

ダメだつたか。  
ならば次の手だ。

「今だッ！――！」

俺の咆哮に応えるように、窓ガラスが割れて二つの影が飛び込んでくる。

アマテラスが床に転がっているタバサに取り付き、抱え上げる。それを守るように立ちはだかるクー・フーリンがエルフの男に槍を向けて構える。

「行け！」

アマテラスに、セイリュウに乗つてタバサを逃がせと命令。それを遮るように、エルフの意思が世界に作用した。

「風よ……我が意に従え」

アマテラスとタバサの乗るセイリュウが飛び去りうとしている所に、強風が吹き荒れる。

男の妨害に舌打ちを一つくれて、俺は男に殴りかかる。

タイミングを同じくして、クー・フーリンも豪槍の一撃を繰り出した。

「無駄だと分からぬいか？」

嘲笑うような男の声に構わず、俺たちは何度も何度も光の壁に攻撃を仕掛け続ける。

俺は男に攻撃を仕掛けつつ、窓の外へと視線を送った。  
：：： 狹い通り、やはり外の強風は弱まっている。

少々ふらつきながらも無事にその場を離脱したセイリュウを見送り、俺は攻撃を一端中止する。

軽く男から距離を取つて、見やつた。

「タバサは無事に逃がした。後は…お前を始末するだけだ」

「成程、無駄と知りつつ攻撃してきたのは私の気を逸らすためか。中々良い連携だ。

しかし…」このビダーシャルを始末するとは…大きく出たものだ。見ればどちらも蛮族ではないようだな、大きな力を感じる。しかし、大いなる意思の加護の下にある私には敵わぬ」

「ならばその加護とやらを消し去れば済む話だな。

”抽出魔法”！」

ランダマイズ

”randomize”。「無作為に抽出する」の意。

本来は統計学の用語。

統計結果の妥当性を高めるためにデータを無作為に抽出する行為、その英語名である。

しかし、悪魔の魔法における無作為抽出の対象とは、「あらゆる力

。敵が何であろうとも、どんな力を持つていようと、強制的に、例外なく、力を「抜き取る」。

故に、”randomizer”。

強者を強制的に弱者へと変貌させる魔法。

伝説の中にのみ存在する者達が掃いて捨てる程いるボルテクス界においてさえ、伝説の域にある。

つまり、伝説すらも陳腐化させるという“伝説”。俺の切れである。

ビダーシャルと名乗るこの男はエルフ。

ペルスランの話からすれば、その地の精靈と契約を交わして魔法を行使するものらしい。

精靈と呼ばれる存在はボルテクス界にも存在した。

すなわち火の「フレイミーズ」、水の「アクアンズ」、風の「エアロス」、土の「アーシーズ」。

力で言えば下の中から下の上程度。

上の上と呼べる存在の力すら易々と削り取る“抽出魔法”<sup>ランダマイザ</sup>に抗えるはずもないのだ。

「な…力が抜けていく！？」

いや…これはッ！

精靈との契約が…断ち切られている…？」

驚愕に目を剥くビダー・シャル。

他人に精靈との契約を断ち切られるなど、初めての経験だろう。当然だ、これはハルケギニアに存在しない魔法なのだから。

「貴様…何をした！？」

「何を？おかしなことを聞くんだな。

今お前が自分で言つただろう、『精靈との契約が断ち切られている』つて。

それをやつたに決まっているだろうが

精靈との契約に限らず、人外の存在から力を借りる契約は、概ね似たようなものだ。

即ち、己が力を人外の存在に知らしめ、力を貸すに足ると思わせるのだ。

悪魔を仲魔にする契約もそれに該当する。

ビダー・シャルの言つ契約は、つまり精靈の隸属の一形態。

伝承の中には「神や精霊や妖怪が人に力を貸した」というエピソードもあるが、あれは契約ではない。

隸属ではないし、一度限りのもの。

人外の存在の”気まぐれ”によってごく稀に生じる状況の産物である。

その証拠に、人外の機嫌を損ねて最後には殺されたり不幸にされたりするというオチはありがちなのだ。

ともあれ、自分の力を知らしめて精霊を隸属させている以上、”自分の力”を抜き取ってやれば契約は破棄。子供でも分かる理屈である。

「貴様……一体何……」

その言葉はしかし、最後まで口にされるとは無かった。  
彼の首は既に胴から離れていたのだ。

「何者……か。答えてやる理由は無いな」

返り血を浴びないよつて距離を取つて、崩れ落ちる首の無い体を見やる。

一言呟いて、俺はクー・フーリンと共にその部屋を後にした。

side out

## 第一十八話 切札（後書き）

また更新に少々間が開きました。申し訳ない。

ともあれ、無事に更新できて良かつたです。

ビダーシャルさん、ご愁傷様。

あんまり見所作つてあげられなくてごめんな。

人修羅強すぎて、強敵を描けません。

己の力の無さが恨めしい。

では、また次回。

## 第一十九話 真意

side タバサ

セイリュウの背に乗せられた私は、暫く声を出すこともできなかつた。

目立たぬよう、それでいてかなりのスピードで飛ぶセイリュウ。私を後ろから抱きしめるように支える白衣の女は、警戒するように視線をあちこちに飛ばしている。

彼女は確か、アマテラス。シンの仲間だったはず。

白磁のようなきめ細かい肌をした手でそっと包むように私の口を押さえているその動作は、声を出すなという彼女の意思を言外に伝えていた。

恐怖と夜風に震えることを覚悟していた私だが、後頭部に感じる彼女のふくよかな胸から伝わる暖かさに、私は安堵した。どこかに置き忘れてきたような母の温もりを思い出したのだ。

「…ここまで来れば大丈夫でしょう。

セイリュウ、私たちをどこか目立たない場所に降ろしてください。私とタバサ様はそこで御主人様達を待ちます。貴方はお一人を迎えに行ってください。

もう決着はついているでしきうから

「…承知」

低く答えたセイリュウは、近くの林に降下する。アマテラスは私を抱きかかえたまま、セイリュウの背を降りる。セイリュウはすぐさま舞い上がり、屋敷の方角へと飛び去つていつ

た。

それを見送ったアマテラスは、私の方へ向き直つて、丁寧に頭を下げる。

「…タバサ様、ご不自由をおかけ致しました」

「タバサでいい」

「そういう訳にも参りません。

貴方は御主人様の主。である以上、私にとつても主ですから」

ふわりとけぶるような微笑を湛えるその顔に、私は見惚れそうになつた。

「…そう。助かつた」

「お気になさいませんよう。何処か、お体にご不調は御座いませんか？」

恩を着せよつとするでもなく、心から私を労り、心配してくれている。

その様子に、私は涙が出そうになる。

それを振り切るように、ふるふると首を振つてみせると、彼女は安心したようにまた微笑を浮かべた。

（もう大丈夫ですよ、安心してください）

そう言いたげな彼女の笑顔は、確かに人の心を安らげるものであつた。

「…シンは大丈夫?」

彼の力はよく知っている。

フーケを討伐したり、数万の軍勢を難ぎ払つてみせたり（彼は必死に隠していたが）。

それでも、ビダーシャルはエルフである。

詳しく述べ知らないが、エルフの自治組織に所属する一員らしい。である以上、その力はエルフの中でも上位に位置するはず。心配はしていなかつたが、気にはなつていた。

最も、私が一番恐れていたのは私が盾に取られてシンが思うように戦えず敵にやられるというケース。

シンはそれによく理解し、まず私の救出を優先させた。

その手際は見事の一言。

任務で敵に囚われた人質を救出したことはあつたけれど、全て一人でやつてきた。

仲間がいるところも違うものかと、驚いたものだ。

「ご心配なさいませぬよう。

御主人様こそは最強の存在。

聖も邪も中庸も、およそボルテクス界に存在するあらゆる力を取り込んで捻じ伏せたのです。

その末に”混沌王”とまで呼ばれる高みへと至つた御方。

神をすら従える程の力を持つあの方が負けるはずはありません

誇りをすら滲ませるように言い放つ彼女の言葉には、反論を許さぬほどの説得力があつた。

しかしまさか神を従えるとは。

私はなんという使い魔を召喚してしまったのかと、心中で苦笑を浮かべた。

しかし、彼の力を思えば、その通りなのかもしれないと思えた。

「やつ…ありがと」

「ふふ…タバサ様がご無事でよう御座いました。御主人様もきっとお慶びになりますよ。」

お礼の言葉は、御主人様に直接仰ってくださいな。  
随分、迷つていらしたようですから…」

「迷う…？」

正直、迷つているシンなど想像もつかなかつた。  
常に冷静沈着で状況を誰よりもよく掴んでいる。  
それでいて誰より強く、優しい。

けれど、とタバサは思う。  
悪夢に魘されていたシン。

私に問い合わせられて否定していたあの様子は、迷つてていると言つて相応しい。

あの姿を見た時、不謹慎ながら心配と同時にシンの人らしさに弱さに触れたことで心のうちに暖かい何かを感じたことも事実なのだ。  
惨劇に関しての迷いだつたのだろう。

あの件の、一体何を…？

チラリとアマテラスを見やると、彼女はふわりと微笑うだけで何も言おうとしない。

詳しいことは本人に聞くべきだと言いたげな様子。

私はそれにコクリと頷き、木の幹を背もたれにして座り込んでいるアマテラスの横に腰を下ろした。

言葉を交わすでもなく、触れ合うでもなく、過ぎていく時間。それでも、夜空を見上げるのは全く同時だった。

side out

side 人修羅

「そうですか…シャルロット様は」「無事ですか。  
安心致しました。お礼を申し上げます。

本当に…ありがとうございました」「

ビダーシャルを下した後、特に警戒する必要も無くなつた館。俺は一人ペルスランの部屋へ向かつた。  
クー・フーリンは召喚を解除している。  
ペルスランに見られた時の説明が面倒だつたからだ。

タバサの無事を伝えられたペルスランは、先ほどまでの無表情をどこかに置き忘れたかのような安堵を浮かべていた。

その表情から滲み出る好々爺と呼ぶに相応しい人柄は、ずっとタバサを支えてきた年季を伺わせた。

「気にする必要はない。

俺はタバサの使い魔、主を守るのは当然のこと。

むしろ、彼女の誘拐を防げなかつたことを悔いてい

本当に、俺は何と言う間抜けなのだ。  
つまらないことでタバサとすれ違いを起こし、距離を取り。

そこを狙われ、彼女は敵の手中に落ちてしまった。

こんなことならば何があつても離れるべきじやなかつた。

しかし、ペルスランが口にした言葉は俺の認識をブチ壊した。

「いいえ…シャルロット様は誘拐されたのではありません。自ら身を差し出したのです」

「な…ッ!? 一体何故そんなことを…?」

タバサが自ら身を差し出した?

一体何のために?

こんな話を聞かされたところで、タバサを助けたことを後悔などするわけがない。

彼女だつてそんなことを望んでいたはずがない。

そうせねばならぬ何かの理由があつたのだ。

「詳しく述べ私も存じ上げませんが…恐らくは、何かしらの脅迫を受けたのでしょうか。

もしかしたら奥方…シャルロット様の御母上に関係あるやも知れませぬ。

先日までこの館にこらつしゃつた奥方は、ヒカワに連れられていきました

「それだけ聞けば今は十分だ。

とりあえずタバサと合流していく。

また何か頼るかも知れないが、その時は…頼む

「はい…今は亡きシャルロット様の御父上、オルレアン公シャルル様に忠誠を誓う者達は、タバサ様のために力を尽くすでありますよう。

その者達と、私は繋ぎを取つております。

王宮内の動きもある程度伝わつてまいりますので、何かあればお知らせ致します。

ただ…御母上のことよりもやれこます。事を起こすなら、急がれた方が宜しいでしょう。

手が足りぬことがあればお知らせください

「ありがとうございます、タバサに代わって礼を言ひます。」  
では…

軽く頭を下げる、俺は館を出た。

彼女の真意を聞こづ。

その上で、今度こそ問ひ。

こちひへ向けて飛んでくるセイコウの影を見やつて、俺は再度決意を固めた。

## 第二十九話 真意（後書き）

更新が遅れて申し訳ない。

いよいよ最終決戦に向けて話が進んできました。

如何に氷川に見所を作るか、如何にジョゼフを狂わせるか（笑）。

最終決戦をどうするかはまだ迷つてますが、必ず書きます。

では、また次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6410m/>

---

悪魔の勇者

2010年10月12日16時22分発行